あ、アシ？北上やけど何か文句あるが？

ジト民逆脚屋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何や山で仕事しよったら足場が崩れて、頭打ったがよ。そいたらよ、ゲームのキャラになってしもうた。

何や分からんし、取り敢えずはここで生きてみるとしようか。

目次

一日目 1
一日目後半 4
二日目　朝 8
二日目　昼夜 14
三日目 20
三日目昼～夕方 25
三日目夕方～夜 29
四日目朝 36
四日目昼 42
四日目　接敵 47
四日目　開戦 52
世界は廻るよ、何処までも 61
港と船乗り 67
七日目 74
七日目 79
七日目　邂逅 84
七日目　交渉 90
七日目　乗船 95
七日目　縁会 100
十日目　補給と 106
十五日目　授業と 111
二十日目 116
二十三日目 121
二十三日目　始まり 126

三十日目 131
三十日目 135
三十二日目 139
四十日目 144
四十日目 黒蛇 148
四十日目 破鎧 153

一日目

あ、アシ？北上やけど何か文句あるが？
突然やが、北上になってしもうた。え？お前が何言うか分からんって？安心しぃや、アシにも分からんき。
あれよ、山で仕事しよったら足場が崩れよってな頭打ったとこまでは覚えちゅうがじゃけんど、目が覚めたらゲームの『艦隊これくしょん』け？
それに出てくる『北上』になっとったがよ。喋り方が変？ほっちょき、アシは生まれも育ちも高知県ながやき標準語ゆうがは苦手ながよ。
それでまあ、今アシが何処におるかと言うと・・・
「なにが悲しゅうて、こんな小島におるがやろう？」
山から小島、何処の神さんの悪戯か知らんがちっくとばかし、根性ひねくれすぎやないか？
救いとしたら、アシがこうなる前の服装やら持ち物がそのまんまの状態であるゆうことか。
いや、なんか鉈の形がおかしいが。角鉈ながやけんど、柄からくの字に曲がっちゅうし、峰の部分が金槌になっちゅう。なんやこれ？最近のガンダムでこんな鉈使いゆう奴見たぞ。こんなん、どうせえ言うがな。
まあええか、軽く振った感じ違和感無いし、刃先が重うなった分、かち割りやすうなったわ。
「煙草煙草っと、あったあった。こっからどうするかぁ、このまんま海に出るがはアホウのやることやし」
いかんが、詰んだわこれ。今更やが山育ちを一人海に、それも辺りに人の気配の無い小島にほり捨てるとか、なんじゃこれ？
でもまあ取り敢えずは、水と拠点の確保が先決やな。食いもんは魚やらなんやらがあるろうし、この小島の感じやと水源がある筈や。なんでやって？ほれ、そこ。小川が海に流れ込みゆうが、飲めるかどうかは分からんが火ぃ起こいて沸かいたら飲めるろぉ。

目標も決まったし、煙草も火ぃ消いて・・・
「ほいたら、そろそろ動くとしよか」
水沸かすしても、器がいるなぁ。なんか無いろうか？お！鍋が有るが！流れて来たがやろうか？うん、穴も空いてちょらせんし大きさも丁度ええが。

「しかし、妙な島やが。人は住んじょらせんのに小屋がある」
ほんに妙な島やが、浜辺で鍋拾うてから少し小川沿いに島の中を歩きよったら小屋があったが。しかもオンボロの癖に造りがしっかりした奴が、中には囲炉裏やらがあるき人がおったがやろうな。
けんど、床に埃が積もっちゅうき誰も使いやぁせんがじゃろ。それやったら、アシが使おうかの。
「拠点確保っと、なんぜこれ？」
小屋の土間に何ぞ見た事がない機械があるが、なんやろ如雨露？にしたらおかしいが。口が下側やのうて真ん中に付いちゅうし、水入れる穴が無いが。なんぜこれ？
後は、変な煙突付きの機械かの？両側に背負革が付いちゅうゆうことは背負うもんながか？こんなん背負うて、何するがやろうか？除草剤でも撒くがか？
「なんながやろうか、分からんわー」
ほんに分からん。なんながやろうか、これ。分からんもんはええか、先に水汲んで沸かいて、飲み水の確保をせな。服やら体は、最悪あの小川で洗うたらかまんし。
「水汲みに行って、それ沸かいて後は、今日はこの小屋で大人しゅうしよるか」
もう日も落ちてきゆうし、普段の山ならかまんけんど見ず知らずの小島を夜に歩き回るはしんどいし、なにがあるか分からんきな。
イカンが、火ぃ起こすに薪が要るが！生木はイカンき、枯れ枝でも拾いながら戻って来ようか。
「なんでこんな事になったか分からんが、やる事は普段とそう変わらんきマシかの？」

元に戻れたらええがじゃけんど、なんか戻れん気がするがはなんでながやろ。

取り敢えず、明日は色々調べてみよか。何か分かるかも知らんし、煙草もあんま無いき人がもしおったら分けて貰おうかの。それと酒、酒が欲しいが。肴もあれば言うこと無しやな。

全ては明日の事か、さてどうなるかよ。

一日目後半

おう、アシよ。北上よ、なんか水汲んで帰って来たらよ、あの煙突付きの機械にこんまいまるっこいヘルメット被ったがが乗っちゅうが。ありゃなんぜ？

『北上さんだー』

『ハイパー？スーパー？』

『スイパー！』

ほんまになんぜ、こいたら？人、じゃあないろぉし妖怪かや？煙草の煙吹き掛けたら消えるがかな？

「ふー」

『煙い！』

『なにをするだー！』

『ゆるざん！』

イカン、消えんし怒らいたが。山の怪やったら煙草の煙で消えるち聞いたけんど、ほいたらこいたらは山の怪やないがやろうな。

「おんしら、何者ぜ？」

『『妖精です！』』

妖精つか、確かに妖怪よか妖精の方がらしいゆうたららしいが、いきなりそがいなこと言われてもにゃあ。まあええか。

「まあ、そいたら妖精さんち呼ぼうか」

『オーケーです！』

『それにしても、変な喋り方です！』

『ほんとに北上さん？』

ほっちょき、標準語らぁ喋るがは苦手ながやき。

「アシは北上よ、何ぞ文句あるがか？」

『怒らしたです！』

『お前のせいです！』

『許して、プリーズ！』

別に怒っちょらせんが、やっぱりあれやろうか？土佐弁は聞き慣れん人にはキツイがやろうか。

「気にしな、アシは別に怒っちょらせんが」
『ホントです？』
『よかったです』
『わちき、許された！』
　分かってくれた様じゃな、にしても、最後の奴は許されん気がするがは、アシの気のせいながやろうな。
『北上さん北上さん！』
『出撃しましょう！』
『北上、いっきまーす！』
　妖精さんの一人が煙突の上で跳び跳ねて、残りの二人が背負い革をバシバシ叩きながらはしゃぎゆうが、なんじゃろ？
「出撃ち、なんぜ？」
『は？』
『ひ？』
『ふ？』
　へほ、つか？喧しいわ！妖精さんが「何言ってんの、こいつ？」みたいな顔でアシを見ゆうが、知らんもんは知らんがじゃ。
『北上さん』
『じ、冗談じゃ？』
『ですよね？』
「アシは冗談は、上手く言えんがよ」
『なんてこった・・・』
『やばくね、これ？』
『おーまいがー・・・』
　其れほどか？其れほどまでにヤバイがか？妖精さんが、がっくり膝をついて項垂れちょるきヤバイがやろうなぁ。
「で、その出撃ゆうがはなんながよ？」
『え～と、ですね』
『その文字の通りに』
『出撃して戦います』
「戦う？なんとよ？」

『オウフ』
『マジかー』
『そこからかー』
あれ、これアシ、バカにされやぁせん？出撃の言葉の意味は知っちゅうが、この妖精さんらの様子からするにこれはやまったろうか？
そいでまあ、妖精さんから聞いた話やと、この世界は深海棲艦ゆう連中に制海権を獲られてしもうたらしいがよ。
それだけやったらかまんがやったろうけんど、いやかまんことないけんど、この深海棲艦ゆう連中は、げにまっこと厄介なことに現代兵器、ミサイルとかバルカンやらが効かんかったがやと。
そっから、各国はじり貧になって頭抱えよったとこに、アシの体でもある北上ら、艦娘と妖精さんが日本に現れて深海棲艦を張りまわしたらしいがよ。そいで、そっから日本が主体になって各国に艦娘とその上司の提督を派遣して、反撃を始めたゆうことながやと。細かいことは、はしょったけんど、そういうことらしいが。
「しょう、厄介な話やの」
『そうなんですよ！』
『だから』
『戦いましょう！』
戦う言われてものう？アシはガワは北上やけんど、中身は第一次産業従事者やが。そらぁアシだって、喧嘩の一つや二つしたことあるし、山で仕事しよったら獣に会うて襲われたき殺いたことはあるけんど、戦争となったら話は別よ。
第一、北上になったゆうて絶対戦わなぁいかんゆうことでもあるまい。戦こうて死ぬがは嫌やし、こっちの世界に何ぞ義理が有るゆうことでも無し。
あれ？これ戦ってもアシに得らぁ一コも無いが。
「戦うゆうても、今の事やないがやろ？」
『まあ』
『それは』
『そうですけど』

「それやったら、明日の事よ。もう日が沈みゆうき、湯う沸かいて飲んで寝よか」
ホンマは酒がええがやけんどの、無い物はしゃあない。
さて、明日はどうするかよ?この世界を調べるにも、海は厄介者がおるし、まあ、明日の事か。

二日目　朝

あぁ、アシよ。北上よ。昨日は湯ぅ沸かいて、白湯飲んで寝たがやけんど、あれな妖精さんらのことながよ。

あいたら、まっこと不思議な奴らやが。昨日は白湯沸かいたまでは良かったがよ、がやけんど、白湯飲もうにも器が無いことに気付いてどうすらぁ思いよったら、三人の内の一人が何気なく湯呑みを差し出してきよったが。

どっから出したか聞いたがやけんど、妖精パゥワーです！とかしか答えてもらえだったが。

妖精パゥワーち、なんぜ？その煙草も妖精パゥワーゆうがで出したがか？アシの分は？無い？これは自分らのしか出せん？なんぜそら。

「そいで、妖精さんよ」

『何です？』

『北上さん』

『どうしたです？』

「何ぞ釣れたかよ？」

今は、小島の岸で魚を釣りゆうがよ。竿はどうしたか？これも妖精パゥワーゆうがで出してきたがよ。

なんで魚釣りゆうか言うたら、早い話腹が減ったき釣りゆうがよ。しかし、釣りゆうがやけんど何も掛かりゃせんが、餌がいかんがやろうか？

『何も』

『釣れません』

『これ無理なん違うかな？』

諦めなや、魚の一匹でも釣らんと飯無いがぞ。流石に二日も何も食わんがはツラいが。

しかし釣れん、仕方無いき竿岩の隙間に差いて、小石詰めて押さえてから妖精さんらがどういたち持ってけ言いよった煙突缶に凭れて煙草を吹かすことにしたがよ。

「早よう何ぞ釣れんかのぅ」

幸いに天気はええし、海も穏やかやが。しかしたいて釣れん、あれやろか？其処らで捕まえた虫じゃいかんかや。
あ～、煙草の煙が喉に沁みるんじゃ～。妖精さんらも竿手離して煙草吹かしゆうし、これで釣れんかったら沢蟹やら川海老やら採って食うか。こんな小島に居るとは思えんが。
「んぁ？妖精さんよ、何ぞ言うたかよ？」
『いえ』
『何も』
『言ってません』
おかしいにゃあ、何か聞こえたけんど気のせいやろか？
煙草の灰を棄てようと、ちっと顔を上げたら沖の方に何か黒いがが見えるが、ありゃ何ぜ？
「妖精さんよう、あっこに見える黒いがは何ぜ？」
『どれです？』
『あれです？』
『嘘やん・・・』

『『深海棲艦だー!!!』』
「あれがかよ？」
『しかも！』
『戦艦！』
『ル級！』
「戦艦？」
ありゃ人やが、船やないが。ん？ありゃ戦いゆうがか？
何と戦いゆうがぜ。
「ドンパチやりゆうが、此方にゃ気付いちゃあせんみたいやにゃあ」
『どどど！』
『どうするです！』

『北上さん?!』
どうすらぁ言われてもにゃあ、態々鉄火場に突っ込む必要も無いろうし、やるこたぁ一つしか無いろぉ。
「しゃっしゃと竿片して、隠れようや。態々、助太刀する義理も無いき」
『えー』
『良いんですか?』
『それで』
かまんろ、あの戦艦ル級け?あれと戦いゆうがはアシと同じ艦娘ながやろうけんど、アシ自身特に仲間意識らぁ無いし、この世界でそこまでする義理も無しや。
「ほいたら、行こか」
『はーい』
『わかりましたー』
『今日も飯抜き決定!』
それを言いなや、あの川に何か居るろうか?居ると良いがやけんどにゃあ。二日の飯抜きはきつい。
うおぅ!えらい音がしたが、なんじゃあの水柱?
へんしも逃げよ。

音がせんなったき、岸に戻って来たがよ。何ぜえらいことになっちゅうが。
「この黒いのも、深海棲艦ながか?」
『そうです』
『駆逐』
『イ級です』
あれらの破片やらが小島に流れ着いて凄いことになっちゅが、こ

らぁこの岸で釣りは無理やの。
「こらいかんが、反対の岸へ行こか」
『はーい』
『行くです』
『飯抜きは嫌です』
　ほんにそれやが。あっちは何ぞ釣れると良いがじゃけんどのう。
　反対の岸に行くに、昨日目ぇ覚まいた砂浜を通りよったがよ。そしたらよ、妙な格好の子供が棒振り回しゆうが。
「なんで、こがぁな所に子供が居るがな？」
『え？』
『あれって？』
『え？』
「あ？あれもかや？」
『違います』
『艦娘です』
『でも小さい』
　あれも艦娘ながか、でもよ、イ級やったか？それに追い回されゆうが。
「おぅおぅ、此方来ゆうぞ」
『なんでー！』
『こっちくるのー！』
『戦闘準備ー！』
　子供相手にそこまで必死にならいだちかまんろうに、お、艦娘が何ぞ言いゆうが。
「助けて！母さん！」
　母さん？誰がよ？おい！何故アシの後ろに隠れゆうがな！
『北上さん』
『お母さん』
『だったんですか?!』
「なわけあるか！」
「母さん、助けて！」

誰が母さんじゃ！あああぁ！イ級がこっち来ゆうが！
あ？口開けて何しゆうがな？
ドカン！
「おい！あいたぁ、口から鉄砲射って来よったぞ！」
『北上さん！』
『反撃！』
『反撃するです！』
「母さん！」
おおの！なんながな、うおぅ！また、射って来よった。
反撃ちどうするがな?!
「母さん、これ！」
「あ？この如雨露、鉄砲やったがか！」
艦娘がアシの腰に提げちゅう如雨露を指差しゆうきよう見たら、持ち手に引き金があらぁ。おらぁ！食らえや！
「おい、当たらんぞ！」
『北上さん！』
『射撃』
『下手くそですね！』
「母さん、イ級が来てる！」
「ああもう！こんな能の悪い如雨露要らんわ！」
如雨露銃をほり捨てて、使いなれた鉈に持ち変えてイ級の頭をかち割りにかかるけんど・・・
「おら！」
「イガッ！」
かった！何ぞこいつの殻。刃が入らんが！
「イギギギ」
「お？何ぜ、笑いゆうがか？おぉ？あんま舐めなよ、黒ぼっこがぁ！」
見た感じやと、こいた口からしか鉄砲射てんようじゃ。そしたら、やるこたぁ一つやが。
「イギッ？イイイギギ！」
「おうおう！あんましほたえな！いんま、かち割っちゃるき！」

口開けて鉄砲射とうとしたイ級の隙突いて、馬乗りになっちゃったわ。気分は西部劇のカウボーイよ。
こいた、体に引っ掛かりがようけあるき乗りよいが。暴れだったら話やけんどのう！
「ギギギギイーイギ！」
「ほたえな言うろうが！」
殻に鉈の刃が入らんがやったら、こっちの金槌はどうながな！おら、そのレンズみたいな目にシュート！
やっぱり、殻は硬いけんど目ぇはやりこいのう！
「ギッギギイイイィィッ！」
「おうおあ！ほたえんなや！」
鉈の峰に付いちゅう金槌で目ぇ割っちゃったはええけんど、今度はわやくちゃに暴れだしたが。
こんのべこのかぁ！大人しゅうにせぇや！
「ええ加減に、往生せいや！」
「イギッ！」
鉈を逆手持ちに変えてかち割っちゃった目ぇに突き込んで頭の中を掻き回しちゃると、痙攣して動かんなったがよ。ようやっと死によったか、あーしんど。
「うおーい、終わったぞ！」
『終わったです』
『うわぁ・・・』
『エグい・・・』
「母さん、凄い！」
「そら良かった。んで、おんしは誰ぜ？」
さっきはよう見やんかったけんど、アシ、北上の娘らぁ思えんが。
まず、髪の色が違うし顔も似ちょらん。大体、アシの見た目でこんな大けな娘が居るとも思えんがよ。
「私、大和！初めまして、母さん！」
おん？大和？

二日目　昼夜

アシよ、北上よ。何ぞイ級とか言う黒ぼっこはりまわいたら、大和ゆう子供の艦娘にカーチャン言われたがよ。

しかし、大和ゆうたらアシでも知っちゅうが。あれじゃろ、宇宙行った船やろ？違うがか？

「母さん、どうしたの？」

「あー、ちっと待っとうせ。妖精さんよ」

『はい』

『何でしょう』

『北上さん』

「どういことぜ？」

『そう言われましても』

『こちらも』

『何が何やら』

「分からんつか」

どうすらあよ、アシに子は居らんし相手も居らんがよ。この子の勘違いと違うがやないか？

「母さん？」

やけど、どうするぜ。勘違いゆうたち子供放っちょく訳にもいかんろうしにゃあ。

『あの』

『北上さん』

『ちょっと』

放っちょく訳にもいかんけんど、アシに何ぞ出来るがか？この世界のこと、まだ何ちゃあ分かっちゃあせんに子供抱えるゆうのもどうながぜ。

『北上さん』

『北上さん』

『ちょっとちょっと！』

「何ぜ、妖精さんよ。あ・・・」

「母さん、私、いらない子なの？」
　いやまった！どうするぜ！泣かせるつもりは無かったに、泣かいてしもうたが。
『北上さん！』
『どうするんですか！』
『泣かしたー！』
「どどど！どうするち、どうすらあよ！」
「わっ、私、い、ヒッ、いらない、子っ、なの？」
『北上さん！』
『母さん！』
『カーチャン！』
　うおおおおぉっ！いかんいかん！爆発寸前やが！
「違う違うがよ！ちっと考え事しよっただけながよ！」
「ほ、ホント？私、い、いらない子、じゃない、の？」
「ほうじゃ、いらん子と違うがぜ」
『そうですよ！』
『大和さんは！』
『いらねー子じゃねーです！』
「ホント？」
「おう、ホンマじゃホンマ！」
「ヤッターー！」
　な、なんとかなったかよ。一時はどうなるか思うたが、泣き止んだき良かったが。
　そいで、なんで大和がアシをカーチャンち呼んだかは、あれよ。刷り込みゆうやつやろうとゆう事よ。
　分からん？言われたちのう、子供の説明を元にして妖精さんらと出いた結論が刷り込みながやき、どうしようもないが。分かるがは、こいたもアシと同じで気付いたらこの小島に居ったゆう事じゃな。そいで、黒ぼっこに襲われゆう時にアシらが来たということながやと。
　都合が良い話やが、まぁかまんか。この感じやと謀らぁ出来んろうしのう。

これ！猫やないがやき髪を引っ張りな！

「よっしゃ！大和よ、タモ持ってき！」
「はい、母さん！」
うしゃしゃしゃしゃ！何や知らんが大漁やが！さっきまでの坊主が嘘の様じゃ！
『やりました』
『これで！』
『飯抜き回避！』
飯抜き回避はええがやけんど、おかしいのう。こんな岸で釣れたかや？秋刀魚。
もうちっと沖で獲れる筈やないか？かまんか、一辺、秋刀魚の刺身喰うてみたかったしの。
「母さん！黒い縞々のお魚！」
「おう、石鯛かや？こらは鍋で煮よか」
取り合えずは、飢えて死ぬがは回避出来そうじゃのう。
『北上さん』
『河豚が』
『釣れました！』
「しゃっしゃと、放しや。噛まれなよ」
三人で一本の竿を持って釣った河豚ぶら下げゆうが、アシは河豚は捌けんがよ。たしか、養殖もんは毒が無かったがやったか？
関係無いけんど、ナイラゲ喰いたいのう。酢締めにして胡瓜と和えて日本酒もええけど、押し寿司もええなぁ。酢飯にゃ胡麻と生姜入れて、酢をこじゃんと効かいたのがええにゃあ。
けんど、アレも沖に出なあ獲れんしにゃあ。ああ、無いもん程欲しいゆうが、まっことそれやが。
「ほいたら、程々のとこで置こうや」
「はーい！」
『今夜は』

『ご馳走』
『ですね！』
「そうやの。大和よ、その丸い蟹は喰えんき放し」
「はーい」
　大和が、岸に居った蟹を和え回しよったが。その蟹は喰えん、喰うたら死ぬやつやが。
　さて、小屋に去のうかの。ん、どいたぜ、大和？
「母さん、このお魚どうするの？」
「ん？秋刀魚は刺身に焼き物、石鯛は炊こうか」
　醤油も味噌も無いき素材の味だけやけどの。げにまっこと、人ゆうがは無いもん程欲しなるなぁ。
「何ぞ、塩でも欲しいのう」
『そう』
『ですね』
『ありますよ、塩』
「『『はぁ？』』」
　何言うた、この饅頭三号。

「したらこれで、沸いたら完成か」
　あの後、何ぞ言い始めた饅頭三号を一号二号が締め上げて分かったがやけんど、あの煙突機械に塩やら何やらが入っちょったがよ。
　しかもよ、煙突から出す時は妖精さんサイズやにアシに手渡したらアシのサイズになりよったが。不思議ともんやぜ。
『この野郎！』
『許さねーです！』
『グワー！』
「妖精さんよ、三号しばくがはそればあにして、器用意しいよ」
『『はーい』』
『ゆ、許されたです』

「許されちゃあせんが」
『え？』
「おんしゃあ、酒も隠いちょったなあ」
『いや、その・・・』
「おまんは、あら汁のあらだけにゃ」
『マイガー』
　んな顔したちいかんちや、調味料だけやったら許いちゃったが、酒やら缶詰めまで隠いちょったがは許されんがよ。あらだけでも有りがたく思い。
「母さん、缶切りってどう使うの？」
「早から開けゆうかや、ちっと待ちより」
　大和が煙突から探り出いた缶詰めを開けようしゆうが、缶切りをよう使わんみたいじゃの。
「ほれ、その短いがを縁に掛けて刃を入れて回しや」
「ん、こう？」
「ほうじゃ、ゆっくりやりよ、缶切りの刃は思ったより斬れるき」
「うん！」
　何を開けゆうか思いよったら、乾パンかや。氷砂糖が目当てながやろうけんど、その缶詰めにゃあ入っちゃあせんが。
『北上さん』
『鍋が』
『ワキマシタ』
「したら、味噌入れて完成じゃ」
　あら汁も出来たし、飯にしようか。秋刀魚の刺身に塩焼きに石鯛のあら汁、贅沢なもんやが。
「ほいたら、飯にしようや。大和、乾パンは脇に置いちょき」
「はーい」

　秋刀魚の刺身が余ったにゃあ、どうするぜ？あら汁も塩焼きも大和が全部喰いよったが、刺身は余ったがよ。

そういや、味噌が有ったにゃあ。生姜とネギが無いがはしゃあないか。
「妖精さんよ、しゃもじか板を取っとうせ」
『板？』
『しゃもじ？』
『ナニスルデス？』
「酒の肴を作るがよ」
刺身を叩いて細こうして、味噌と混ぜてまた叩いてええ具合になったら、妖精さんが持ってきたしゃもじに塗って囲炉裏で軽うに炙ったら、なめろうの出来上がりよ。
「こんなもんかにゃあ、生姜とネギが無いがが残念やの」
『北上さん北上さん！』
『私達にも！』
『プリーズ！』
「やるき、ほたえな。大和が起きるろうが」
大和は食べ終わったら直に寝よった。アシの上着を布団代わりにしゆうけんど、「煙草臭い」言われたが。この娘は中々言うがよ。
「妖精さんよ、明日はどうすぜよ？」
『ん～』
『海に』
『出てみます？』
海かよ、この島に居ったちしゃあないしのう、出てみるかや。
「町に行き着いたら、仕事も捜さにゃあいかんし行くか」
何やかにやで、養い子抱えたしのう。仕事があったら、町に住むゆうがも悪うないの。
仕事、何ぞあるろうか？戦争しゆうがやったら、あると思うけんど、嫌な予感がするのう。

三日目

大和を拾うた次の日によ、町に行こうゆう話をして町に行く事にしたがやけんど、どうやって行くがやろ？

船も無いに、歩いていくがか？

妖精さんらが言うには、自分らに任せろ言いよるき任せたけんど、ほんにどうやって行くがやろ？まあ、かまんんか。

「ほいたらよ、妖精さんよ。頼むぜよ」

『了解です！』

『アイアイサー！』

『缶を回せー！』

妖精さんらが、アシが背負うちゅう煙突缶の中でバタバタほたえ始めた思うたら、煙突缶がたいてエライ音を出して黒い煙を吐きはじめたがよ。何しゆうが？

『缶内圧力正常！』

『出力を巡航出力に設定！』

『艤装を本体に接続！』

「あっづ！」

おおの！ビックリしたが！いきなり背中にビリッてなったが。

「いきなり何しゆうがな！びったろうが！」

『あ』

『すいません』

『北上さん』

「何ながな、いったい？」

『海を歩く為に』

『艤装を北上さんに』

『接続しました』

「ほ、ほうか、それやったら、何ぞ言うてや。ほんにびったがよ」

『すいません』

『でも、これで』

『海の上を早く動けます』

ほうかよ、ならええが。そいたら、行こうかや。
「母さん、どこ行くの？」
「おう、大和。町に行くがよ、行くかや？」
「町？行く！」
気を取り直いて、町に行こうかや。つか、ほんまに海を歩けるがか？何や心配になってきたが。
「行かないの？母さん」
「行くがよ、おまんは何故アシの背に乗っちゅうがな？」
大和がアシの背にある煙突缶に乗っちゅうけんど、何しゆうがね？
「私、これ無いもん」
「そうかや、そいたら乗っちょき。けんど落ちなよ？」
「うん！」
『それでは』
『大和さん缶は危ないので』
『北上さんの肩にどうぞ』
「はーい！」
「乗るはかまんがよ、髪を引っ張りな。犬の紐やないがやきに」
大和が煙突缶からアシの肩に移って来たけんど、髪が邪魔ながか引っ張りよる。メンドイしのう、町に着いたら切ろうかにゃあ？
「したら、行くぜ。掴まっちょきよ」
浮ける かどうか分からんけんど、妖精さんらが浮けるゆうがやき浮けるがやろ。
お？おうおう、浮けるにゃあ！水の上に浮くらあ初めてやよ。
スケートみたいに行けらあ、こら楽しいが！
「あ！母さん。アレ！」
「おう、何ぜ？」
『お？』
『アレは』
『町だー！』
「思ったより、近かったがやな」
砂浜に堤防、すぐ後ろに家があって山があるゆうことは、日本や

にゃあ。日本よな？
「したら、到着っと」
　着いたはかまんが、えらい静かやにゃ。まだ、海辺やきかも知れんが、にしたち、静か過ぎらあよ。何ぞ、あったがか？
「ちくと、ブラブラしよか？」
「うん！」
　大和よう、威勢ように返事するはかまんけんど、アシから降りや。髪を引っ張りな！

「大和よ、そっちはどうぜ？」
「ここも、誰も居ないよ」
『北上さん』
『こっちも』
『誰も居ません』
　どうなっちゅうがな、まだ一時間も回っちゃあせんけんど、誰っちゃあ居らん。
　こらぁ、おかしいにゃあ。
「何ながな、こら？道に人が居らんのは分かるけんど、店まで誰っちゃあ居らんはおかしいろう」
『どう』
『します？』
『北上さん』
　どうするかにゃあ、コンビニどころか交番まで人が居らんがは、予想外やが。
「母さん母さん！」
「ん？どういたぜ、大和」
「こっち！こっち来て！」
　えらい慌てゆうが、何を見つけたがな？
「これ！これ！」
「何じゃあ、こらぁ・・・」

どうなっちゅうがな、装甲車、よな、これ。それがなんでこがぁに、ボロボロになって町中にあるがな。
「この車、穴開いてる！」
「確かに、穴が開いちゅうにゃあ」
後部座席は横から一直線に何かがぶち抜いていったがやろうか、向こう側が見えゆう。
それよりも、何ながな、これ？
「歯形、かや？これ」
運転席は、何かに食い千切られたみたいになっちゅう。何ぜ、鮫でも竜巻に乗って飛んで来たがか？そんな訳、無いわな。
鉄、食い千切るような生き物らぁ聞いたことないが。しかも、運転席をバックリいくような奴なんぞ、って、おぉうわ・・・
「妖精さんよ、大和連れて他を見て来とうせ」
『？、!!』
『はい、大和さん』
『あっち見てみましょう』
「え？あ、うん」
『それでは』
『北上さん』
『行ってきます』
「おう、気ぃつけよ」
妖精さんらが大和を連れて行ったにゃあ。流石にこらは、見せれん。
「ナンマンダブナンマンダブ、成仏せぇよ」
多分、四人かにゃあ？運転席は『上』が無い、助手席は『右半分』が無い、後部座席はちっと分からん。
足が二人分あるがは分かるけんど、他がわやくちゃになっちゅうきに、四人以上かは分からんが。
分かるがは、助手席の奴は運転席の奴が喰われるのを見てから、喰われたゆうことか。
うわ、目ぇ合うた・・・

「何ぞ分からんが、車ごと人をバックリいけて大穴開けるような奴が居るゆうことか」
こら、別れたがはやまったろうか。へんしも、四人と合流せにゃあの。
そいで、早いとこ町から去のうか。最悪、何ぞ得物を調達して自衛せんとのう。
鉈と如雨露銃と『妙な筒を束ねた板』だけじゃあ、何があるか分からんしなあ。
「予備の煙草やるき、どうか成仏しとうせ」
わかばやが、かまんろ？セッタがええとか言いなよ。

三日目昼～夕方

どうなっちゅうがな？
四人に合流したいがよ、この町は様子がおかしすぎらあよ。
「此処もかや？」
人が居らん。それだけやない、何ぞから逃げたみたいに家の中がわやくちゃやが。
後は・・・
「最近、逃げたゆう訳やないのう。こら」
ちっと、お邪魔して調べさせてもらいゆうけんど、箪笥と置物に埃が積もっちゅうがは普通よにゃあ。
けんど、テーブルと椅子にも埃が積もっちゅうがはおかしいろう。人が住んじゅうがやったら、埃がこれっぽあ積もるはおかしいきにゃあ。
それだけやない、廊下も床も埃だらけやが。どういたがな、こらぁ？
1日2日じゃ、こうはならん。軽く年単位は経っちゅうにゃあ。
「どうすらぁよ、人が居らにゃ話も聞けんが」
まあ、ええわ。今は、四人と合流するがが先よ。
そっからでも、遅うはないわな。
「あ、いかんが」
あの四人が、何処に行ったかアシ知らんちゃ。
「困ったちゃ」

困り果て、煙草を吹かす北上。紫煙が右へ左へユラユラ揺れながら、消えていく。
その様子を静かに見ている者が居た。
「ん？」
黒い、鳥とも飛行機ともとれる奇妙な者。それは北上が居る居間から見える庭の真ん中で、此方を観察するかの様にホバリングをしていた。

そのレンズの様な目と、北上の据わった目が合った。
「なんぜ?・おんしゃ」
言い終わるか終わらないかのその瞬間、翼と思われる部分から光が放たれた。
「どわぁっ!」
放たれた銃弾による破壊、北上はそれを別室に飛び込む事で何とか回避する。
止まぬ銃弾と破壊の音を聞きながら、北上は新しい煙草に火を着け、紫煙を苛立たしげに吐き出した。
「あんの、鳥飛行機がぁ!・人が何ちゃぁしてないに、パカスカパカスカ景気良う撃ってきよって、腹立つにゃあ!」
そう叫ぶやいなや、北上は飛び込んだ和室の壁に立て掛けられた折り畳み式の卓袱台を掴み、弾幕の切れ間を縫って卓袱台を思い切り投げ付けた。
「当たれやにゃぁ」
投げ付けられた卓袱台は、風切り音をたてながら回転し鳥飛行機に向かうが、難なく避けられ庭の塀に当たり砕けた。
だが、その砕けた卓袱台の破片が当たり、相手は体勢を大きく崩した。
それを見逃す北上ではなかった。
「くたばりや!」
瞬時に家から飛び出し鉈を降り下ろす。
しかし、素早く体勢を立て直した鳥飛行機は、それをかわし上空へと上がっていく。
「逃げな!・かかって来い!」
地上で喚く北上。それを嘲笑うかの如く、頭上を二、三回旋回した後、何処かへと飛び去ってしまった。
「がぁぁっ!・腹立つにゃあ!・何ながな、あいたぁ」
「母さん!」
「あぁ!?・・・なんぜ、大和かや」
『北上さん』

『いったい何が』
『あったんですか？』
「何があったたち、変な黒い鳥飛行機に喧嘩売られたき、買うたらあいた逃げよったがよ」
『黒い鳥飛行機？』
『北上さん、たぶんそれ』
『敵です』
「あぁ？敵つか」
「え？敵居たの」
あらぁ敵やったがか。まあ、問答無用で撃ってきたがやき、敵ながやろうにゃあ。
つかよ、アシら艦娘が戦いゆうがは深海棲艦、戦艦ながやろ？どういて、飛行機が居るがな。
訳が分からんわ。
まあ、かまんか。どっちにしたち、敵とは戦わなぁいかんがやきに。
アシも死ぬがは嫌じゃ。やっぱり何ぞ、得物を調達せんといかんにゃあ。
それだけやない、移動の足も用意せんと徒歩で移動はたいそいがよ。
後は、水と食糧も探さないかん。
「妖精さんよ、何処ぞにええとこあったかや？」
『北上さん』
『あっちに』
『ホームセンターがありました』
「よっしゃ！そこに行くぜよ」
デカイホムセンなら、何ぞ食いもんもあるろうしの。
生物は無理やろうけんど、缶詰めやらカップ麺があるろ。
水は、ペットボトルのヤツがあったら何本か拝借しようかの。この町の状況やと人は居らんろうし、かまんろ。
得物は、鍬の柄にでも山菜ナイフなり剣鉈なりの刃を括り付けて槍にでもするか。後は、斧に掛矢に・・・

やっぱり、車が要るにゃあ。軽トラ、幌付きがえいわ。
もっと欲言うたら、ワゴン車、キャンピングカーらぁあったらえいにゃあ。
あー、でも、それやったらガソリンが要るかや。
人が居らんがはこの町だけとは思えんし、途中でガス欠はキツイ。
金もようけは無いし。
「母さん？」
「どういたぜ」
「もうすぐ夕方だし、早くホームセンターに行こうよ」
「んー、それもそうやの。とっとと行くかや」
あ、いかんが。煙草も調達せな。もう後、一箱しか無いわ。
「母さん、私魚食べたい！」
「生は無理やき、缶詰めがあったらえいにゃあ」
「え～、お刺身が良い」
「我が儘言いなよ、今の状況で海に行くがは面倒な事になりそうやき」
『北上さん』
『私達は』
『焼き鳥が食べたいです』
「おんしらは、自分らで調達し」
『ガーン』
『出鼻を』
『挫かれた』
「私も焼き鳥食べたい！」
「ほうかほうか、有るとえいにゃあ」
「うん！」
焼き鳥か、アシも食いたい。酒があったら、七味でも軽く振って冷酒でキュッといきたいにゃあ。
いや、ビールも捨てがたいのう。
いかんわ、酒が呑みたい。冷えたがが呑みたい。
今日は疲れたき、グッといきたい。

三日目夕方～夜

「おうおう、こらデカイのうし」
流石、お町のホムセンは違うの。平屋やないが、二階建てやぞ。屋上の駐車場入れたら三階建てやが。
しかし、こらぁほんまに何があったがな？
店先はボロボロ、駐車場には車が幾つも乗り捨てられちゅうがよ。
・・・どれか、動くろうか？動くがやったら、貰うて行こうかや。
「そいたら、入ろうか」
「うん」
『ホムセン！』
『工具！』
『貴方の町の武器庫！』
物騒な事言いなや。まあ、今から武器になるもん探すがやき、あながち間違うてはおらんか。
「探すがは、武器になるもんだけやないぞ。飯も探さんといかんきにゃ」
「ご飯、何があるかな？母さん」
『飯～』
『腹へった～』
『おうどん食べたい』
うどんか、ええにゃあ。天ざるとか食いたいにゃあ。
んで、余した天ぷらで冷酒をキューっといきたいわあ。
「何かあるとえいにゃあ、大和」
「そうだね、母さん」
ほんまに何かあるとえいがやけどのぅ。
この店先の様子からじゃと、だいぶ荒らされちゅうみたいやの。
何ぞのパニック映画で見たにゃあ、こんな風景。
おうおう、役に立ちそうな物は根刮ぎいっちゅうにゃあ。
何ぞ残っちゃあせんかや？
『北上さん』

『一階には』
『飯ねぇです』
「母さん、ご飯無いよ」
「飯だけやないが、他も探しよ」
どうやら、一階には飯は無いみたいやの。
「いたら、四人で二階を見てき。二階にはあるかもしらん」
「うん！」
『ひゃっはー』
『二階を探索だー』
『目星と聞き耳ロールだー』
何ぜそら？
ほたえるはかまんけんど、転けなよ。
・・・行ったか。
うし！そいたら、探すかよ。
ナイフやら長物の柄を探すやったら、園芸とかそっちのコーナーやの。有ったら、えいけどのう。
「何ぞえいがは有るかや無いかや～っと、有った有った」
鍬の柄に手斧と手鎌に山菜採り、見た感じはこのコーナーは手付かずみたいやの。お、鋸もあるかや。斧の替刃も有るのう、この柄と組んじょくか。
次は、工具のコーナーを見に行ってみるかの。
「大漁大漁と、次行くかの」
手斧に長柄斧、気分はバイキングの海賊よ。
ハイホーハイホー、つか。ん？こら、違うかや？
つかよ、大和は大丈夫ながやろうか。饅頭三人組を付いて行かしたけんど、饅頭じゃしなぁ。
工具を漁ったら、アシも二階に行くとするかや。
おう、カセットコンロがあるの。ボンベは無いがか？有るやないか。

「妖精さん、そっち何かあった？」
『無いです』
『干からびた酢昆布発見！』
『ダメだ！』
　う～、ダメだ～。何にも見つからないや、缶詰でもあったら良かったのに～。
　何にも無いよ、全部無くなってる。
「母さんに何て言おう・・・」
『大和さん大和さん』
『まだですよ』
『まだ倉庫があるです』
「・・・うん」
　そうだよね、まだ倉庫があるもんね。
　まだ何かあるかもしれないもんね。
「行こう、妖精さん」
『マム』
『イエス』
『マム』
　薄暗くて恐いから行きたくなかったけど、ご飯があるかもしれないから、私がんばる！
「おじゃまし～す・・・」
『誰かー』
『居ますかー』
『居ないでー』
　うわー、カビ臭いよここ。薄暗いし、何か出てきそう。
　あ！乾パンの缶詰だ！しかも、氷砂糖入り！
　やったー！
『ツナ缶！』
『コンビーフ！』

『お湯で温めて作る炊き込みご飯！』
「『『『大漁だー!!』』』」
一個二個じゃなくて、いっぱい！いっぱいある！
いっぱい！いっぱいだよ！いっぱい！
あ、どうしよう？こんなに沢山、私持てないや。
「うぉーい、大和ー妖精さんよー。何処に居るがなー」
母さんだ！
「母さん、こっちー！」
「そっちかー？」
『北上さん』
『こっち』
『こっちですー』
「おう、ここに居ったか。で、収穫はどうぜ？」
「ばっちり！母さんも？」
「大漁も大漁よ」
『ツナ缶、コンビーフ』
『乾パン』
『炊き込みご飯』
「釣った魚から、いきなり豪勢になったにゃぁ」
「うん！私がんばったよ」
「んで、水はあるかよ？」
「『『『あ・・・』』』」
やっぱりの、こればあ荒らされちゅうがやき、水はありそうに無いのう。
「ど、どうしよう、母さん」
「大和、水道はあったかや？」
「水道？」
「もうちっくと、奥に行ってみるかや」
多分、休憩室的なとこに水道ばぁならあるろうし。あれやったら、風呂とまでは言わんきシャワーでもあればえいににゃあ。
しっかし、荒らされちゅうにゃぁ。盗みにあったゆうたち、こらぁ

あんまり事やよ。
「大和、そこ気ぃ付けよ。棚が倒れちゅうき」
「うん」
『あ！チョコレート発見！』
『お口で溶けて』
『手で溶けない』
「見付けるはかまんけんど、どうやって持っていくか考えゆうか？」
『『『あ〟』』』
仲良いのぅ、こいたら。鞄かリュック、最悪はずだ袋でもかまんき、入れもんは無いろうか？
ん？何ぜ、こら。新聞？古新聞かや？
「どうしたの？」
「古新聞があったがよ。薄暗ぁてよぉ読まんにゃぁ、ライトライトは何処に、あったあった」
さぁて、何が書いちゅうろうか。何があったか、書いちょったらえいけんどの。

『連合軍、太平洋決戦にて深海棲艦に敗北』
『艦娘による反抗作戦失敗』
『日本政府は太平洋沿岸の一部地域を放棄』
『海軍の一部将校による艦娘への虐待が発覚』
『艦娘によるクーデター、各地の海軍施設にて勃発』
『艦娘を擁する独立部隊『鎮守府』を各地に設立』
『人権擁護団体『艦娘保護の会』によるクーデター勃発』
『ワレアオバ！』

ボロボロで読めんとこばっかりやったが、イヤぁな事しか書いちゃあせんがよ。
最後のは、何か知らんけんどの。
言うたら、こうかや？
深海棲艦に国が喧嘩売って思っくそコテンパンに負けて、今度はア

シら艦娘で仕返ししようとしたらまた負けて、その腹いせに艦娘苛めたら仕返しされて、そいたら艦娘に独立されて、したらよぉ分からん団体が暴れて、ワレアオバ！

言う事かや？いや、ワレアオバち何ぜ？分からんわぁ。

「母さん・・・」

「ふん！大和、先ずは飯よ」

「う、うん」

『北上さん』

『あっちに』

『水道あったです』

「生きちゅうかや？」

『ばっちり』

『生きてます』

『ジャゴバー！』

「ゆうことよ、大和。先ずは飯よ、飯喰って寝て、それからの事よの」

「うん！母さんと一緒なら大丈夫だよね」

「はっ、任いちょき。アシが喧嘩で負けるか」

もし、喧嘩を売られたら買うだけよ。やけんど先ずは取り合えず、身を隠す算段を付けにゃぁいかんの。

鎮守府やら艦娘保護の会やらが、うるさそうやしの。

大和の服も考えにゃならんか。この格好やと、何か艦娘ちじきにバレそうやが。

一階に上着とズボンが有ったき、それ着せちょくか。

「母さん、これどう使うの？」

「あ～、待ちよ」

やらないかん事が山の様に増えたわぁ、まあ、明日の事よ。

あ、待ち言うたろ！

ほれ、そこのツマミを押して待ちよったら直に点かぁよ。

少しの間は、ここを仮拠点にして動くとしようかの。

あれやったら、見付けたもん持ってあの小島に帰るのも考えよくか。

アシは艦娘やが、アシはアシよ。戦っちゃる義理は無いきの。
「母さん、何かクルクルするのが付いたミョンミョンした棒見付けた！」
「そら、釣竿やが」
それに、大和も艦娘じゃ。こんな子供戦わせる訳にはいかんわ。

四日目朝

「母さん、このズボンおっきいよ？」
「あ～、いたら、こらどうぜ？」
　ホムセンに隠れて一晩経って朝になったき、一階の服売り場で大和の着替えを見ゆうが、サイズが無いのう。
　どうすらあ。
「これも、ブカブカ～」
「裾捲ったちいかんかや？」
「ダメ～」
『北上さん』
『これは』
『どうです？』
「ん、かまんがやないかや」
「あ！これ丁度だ！」
　思いの外、すっと見つかったわ。そいたら、今日はどうすぜよ？
　あの新聞に書いちょった事が本当やったら、艦娘として出歩くがは、マズイろうにゃぁ。
　下手に出歩かんとに、この町の周辺をブラついてあの小島に戻るゆうがも手ぇやにゃ。
「母さん、どうしたの？」
「ん？何ちゃあ無いわ」
　それやったら、町で要るもん手に入れてどっかに隠れるがも有りかや。
「母さん母さん」
「あ？どういたぜ？」
「首がベタベタする」
　確かに、風呂入っちゃあせんき。ベタつくわな。
　しかし、風呂か。どうすらあよ、風呂桶らあ無いし、シャワーち上等なもんも無いわな。
『北上さん』

『こんなの』
『あったです』
「お、何ぜ？」
『働く男の臭い消し』
『除菌抗菌』
『ウェットタオルです』
　おうおう、良いがあ見付けてきたにゃあ。
　やけど
「おんしら、アシが男に見えるつか？」
『いやいやいやいや』
『まあまあまあまあ』
『それはそれは』
「お？どうながぜ？あ～・・・」
「母さん、どうしたの？」
　今思うたら、こいたら、見分け付かんにゃあ。
同じ顔と服着いちゅうき、どうすらあよ。
「母さん？」
　見分けが付かんかったら、あれよな。目印でも付けるかや。
　何が良いろうか？
　・・・ほうよ！あれが、あらあな。
「大和よ。そこのマジック取っとうせ」
「マジック？　・・・母さん、これ？」
「ほうよ、それよ」
『北上さん』
『いったい』
『何するです？』
「ええき、そこに順に並び」
　うし、並んだにゃ。いたら、右から順にメットに
「1　2　3と、の」
　番号書いて
「うし、これからおまんらは、右からカズ、ジロ、サブにゃ」

『お？おお！』
『名前』
『名前付いたです！』
いい加減、饅頭饅頭言うがもたいそいき。名前付けちょこうか思うて付けたけんど、こればあ喜ばれるらあ予想外ちや。
ん？何ぜ大和。
「もうちょっと、カワイイ名前が良かった」
「ほうかよ。いたら、どんなが良かったよ？」
「イチ、二、サン！」
『『オウフ』』
子供ゆうがは、残酷やよ。まさか、名前が番号とは思わだったわ。
まあ、かまんか。
「いたら、さっさと体拭こうかや」
「うん」
そいたら、服脱いでと。
頭も痒いいにゃあ。どうすぜ？
水道は生きちょったき、水道で流すか。
ん？大和よ。どいた？
「母さん、お腹カッコいい！」
「あ？アシの腹がどういた？」
『おおう』
『なんて見事な』
『シックスパック』
腹が割れちゅうがは、仕事しよったらこうならあよ。
やき、あんま見なよ。流石に、恥ずいわ。
「ほれ、へんしも早ように拭きよ。まだ、頭も洗わにゃいかんがやきに」
「うん！」
体拭いて頭洗うて、それでどうすらあ。
さっきも同じ事考えよったけんど、ここらをぶらつくよりは、島に帰ったがマシかもしれん。

それやったら、舟が要るにゃあ。拾ったもん積んで行けるやったら、アシが背負うて行くよりかは積めるしの。
戦争らあ、知った事か。戦いたかったら、勝手に戦いよったら良いがよ。アシを巻き込むなや。
鎮守府？提督？知るかよ。艦娘を指揮する書いちょったけんど、尚武の国の女を嘗めなよ。
アシは、アシが従ごうてもかまんち思うた相手にしか従わんぞ。
「母さん母さん、紙が真っ黒になった！」
「そしたら、新しいのと替えてき」
「うん、分かった」
饅頭の話やと、大和も艦娘らしいき。アシが鎮守府に行ったら、大和も戦う事にならあよ。
こんな娘に戦わせるらあ出来るかよ。
戦うがやったら、アシが戦うわ。
「母さん母さん、背中背中」
「ほいほい」
大人が子供に武器持たいて戦わせよったら、それはどうにもならんなるわ。
行くとこまで行って、戻れんくなる。
『北上さん』
『髪は』
『どうするです？』
「水道で流す。石鹸かなんかあったろ？」
そうならん為にも、アシが戦うしかないわな。まあ、戦う事らあ、そうは無いと思うがの。
「大和よ、髪洗うたら飯にしよか」
「やった！今日は何？」
『大和さん大和さん』
『牛缶』
『牛缶あるです』
「ほいたら、今日はそれにしようか」

「牛缶牛缶～」
「大和、缶切り使うてみるかや？」
「うん！缶切り使う！」
「ほうか、手切りなよ。カズ」
『北上さん、どうしたです？』
「大和見よってや。ジロとサブはアシと来い、荷物纏めるき」
『了解』
『アイアイサー』
何があるか分からんき、要るもん持って早いとこ島に帰るか。
お、シャベルがあったか。これで、あの小川深あに掘って水汲み場にするかよ。
「母さん、缶開いたよ！」
「おう、いたら飯にしよか」

五人が居る街から離れた海上に、幾つかの人影があった。
その何れもが、青白くどこか人から離れた姿をしていた。
「ヘエ、変ワッタ奴ガ居ルンダナ」
「ドウスルンダ？」
「私ハパス。興味ナイシ」
一人が戻ってきた黒い鳥形から話を聞き興味を示し、一人は興味無さげに岩場に凭れる。
「鉈デ戦ウ、砲ヲ撃タズニ付近ニアッタ物ヲ投ゲル。私達ガ知ル艦娘共トハ違ウ」
「ドウスルンダ？タ級」
一人、黒い四つの口を従えたタ級に、黒い大きな口を持つ何かを

被った者が問う。
「少シ、見テクル」
「艦娘共ニ見付カラナイ様ニシロヨ。私ハ助ケニ行カナイゾ」
「コノ辺リハ雑魚シカ居ナイカラ大丈夫ダ」
そう言うと、タ級と呼ばれた白い人影は五人の居る街へと向けて歩き出した。

四日目昼

「よいよいっとにゃぁ」
北上は独特なリズムを刻みながら、髪から石鹸の泡を流し水気を拭き取っていた。
誰も居ない街、その街にあるホームセンターが今の五人の拠点となっている。
粗方、水気を拭き取り終えた北上はちらりと陽当たりの良い場所を見る。そこには、先程洗った若草色の作業着の上着とシャツが干されていた。
「まだ、乾いちゃぁせんか。しゃあない、このまま居るか」
タオルを肩に掛けたまま、陽当たりの良い場所で寝転ぼうとするが、北上の耳にある音が届いた。
ーー何ぜ？　この音は？ーー
気になった北上は寝転ぶのを止め、音のする方へと歩いて行く。
念の為、北上は今上半身全裸である。一応、肩にタオルを掛けているから、重要な部分は見えていないが、六つに割れた腹筋や逞しい背筋に腕は丸見えである。
「おう、おんしら何しゆうぜ？」
北上が向かった先では三人の妖精、カズ、ジロ、サブが北上が拾い集めた斧やナイフに鋸を、小さなハンマーで叩いていた。脇には、何かを分解したのか部品が散らばっている。
『これはこれは』
『北上さん』
『妖精加工です』
「妖精加工ち、何ぜ？」
『妖精加工というのは』
『これで深海棲艦と』
『戦える様にするやつです』
妖精加工、妖精が持つ不思議な力で深海棲艦の装甲を貫通し辛い武器でも、幾ばくかの資材を消費しダメージを負わせる事が出来る様に

する加工である。
「ほうかほうか、言う事はよ。アシの鉈も、その妖精加工済みかや？」
『そうですけど』
『北上さん』
『服、服着るです』
妖精三人が振り向けば、そこには上半身全裸の北上が居た。
髪を洗っていたのだろう。普段は三つ編みに纏められた髪は解かれ、軽くウェーブを作って水気を帯びている。
これだけなら美人の類いに入るのだが、この北上の目付きの悪さとくわえ煙草に逞しい筋肉が、美人の感を若干台無しにしている。
妖精三人の服着ろコールに北上は、平気な顔をして腰に提げている鎚鉈を抜いて刃を見てながら、こう言った。
「んあ？　下履いちゅうきかまんろ」
『いやいや』
『そうじゃ』
『なくてですね』
これには妖精三人も困った。
目の前の北上はズボンは履いていて、タオルを肩に掛けて、重要な部分は隠れているが、それでも上半身全裸には変わらない。
積まれていたブロックに腰掛け、店内から見付けて来たのであろうシャープナーで鎚鉈の刃を研ぎ始めた。
カズ、ジロ、サブの三人には為す術が無かった。
平然とした顔で煙草を燻らせ、鉈を研いでいる北上に誰か何か言ってくれ。
妖精三人は手斧の加工を止めて、何処へともなく祈った。
「母さん、リュックとカバン見つけた！」
その祈りが通じたのか。
対北上用決戦兵器大和がリュックと肩掛けカバンを見付けて現れた。
大和は、上半身全裸で鎚鉈の刃をタッチアップする北上を見るや否や、叫んだ。

「母さん！　ちゃんと服着ないとダメでしょ！」
　これには北上も困った。
　今、自分の服は乾かしている最中であり、だから上半身全裸なのだ。
「いやにゃぁ、大和よ。アシの服はいま乾かしゆうがよ？」
「なら、他の着て！　誰かに見られたら、どうするの?!」
　北上は唸った。
　北上自身は見られようが、何かが減る訳でも無いから別に構わない。
　だが、大和の様な子供にそう言われると弱い。
　仕方なく、北上はまだ少し生乾きのシャツと上着を着る事にした。
「うぇ、まだ湿っちゅうわ・・・」
「日当(ひなた)に居たら乾くから、ね」
　うんざりした顔で紫煙を吐き出す北上を宥める大和、その横で妖精の一人、ヘルメットに1と書かれたカズが口を開いた。
『北上さん北上さん』
「ん？　どういたぜ、カズ」
『缶の燃料の事です』
「燃料がどういたぜ？」
『燃料が尽きたら、海の上移動出来ないです』
「マジか？」
『マジです』
　北上は二本目の煙草に火を着け紫煙を吐き出し、大和は艤装と北上を交互に見合わせ、カズとジロとサブは頭を悩ませる。
　二本目の煙草が半ばまで燃えたところで、北上がカズに問うた。
「カズよ、今の燃料はどれ(どれ)っぱ(だけ)ぁあるよ？」
『今はほぼ満タンあります』
『けど、もし戦闘になったら長くは保たないです』
　カズとジロが言う様に、燃料確保は急務である。
　安定した状況下であれば、燃料確保を急ぐ心配は無いが、今は安定した状況下ではない。
　何時、何が起こるか分からない状況なのだ。

「カズ、其処らの車からガソリン移(うつ)いたらいかんか？」
『え～と、それは、サブ？』
『ダメじゃねぇですけど、燃費メチャクチャ悪くなるですし、下手したら缶が壊れるかもです』
「ガソリンはいかん、か」
　三本目の煙草に火を着け、北上は天を仰いだ。
　ホームセンターの屋根と青空が見える。
　艦娘の艤装には専用の燃料が必要だ。その他の燃料でも代用は出来るが、燃焼効率が格段に下がり最悪は艤装が破壊される恐れもある。
　専用の燃料を手に入れるには、鎮守府等の艦娘を起用する機関に所属する必要があるが、北上達にとって鎮守府等は訳の分からない集団であり、そこに接近するのも所属するのも情報が集まるまで避けたい。
　しかし、それでは燃料確保が出来ない。
　どうするべきかと、北上は紫煙を吐きつつ頭を悩ませる。
　ーーどうすぜよ？　鎮守府ゆうがに行くか？　うんにゃ、録な事にならん気がするき無しじゃにゃ　・・・!!ーー
　三本目の煙草が燃え尽き、四本目に火を着けようかと北上がポケットに手を入れた時、北上が目を見開き日当の方角、駐車場に振り向いた。
「か、母さん、どうしたの？」
　大和の問い掛けに返事をせず、脇に置いていた鎚鉈を掴む。
　その目は油断無く開かれ、腰は落とし気味に鎚鉈を何時でも振り抜ける様に構えている。
「大和、煙突缶持ってき」
「う、うん」
『北上さん』
『どうかしたです？』
　カズとジロが問い掛けるが、北上は駐車場を睨み付けるだけで返事はしない。

大和が持ってきたサブが乗った艤装を黙って背負い、全員に指示を出す。
「カズ、ジロ。荷物纏めぇ、何ぞ嫌な気配がすらぁ」
『気配って』
『なんです?』
「分からん、こんなが初めてやよ。大和も荷物持てるだけ持ちよ」
「うん」
「急ぎよ、嫌な感じじゃ」
大和がリュックに店内で見付けた水筒や缶詰等を詰め込み、カズとジロは肩掛けカバンに加工を済ませた斧やナイフを入れていく。
『北上さん、缶の動作確認終了です』
「アシに繋ぎ」
北上の背中の中央、背骨に初めて艤装を背負った時の痺れる様な感覚が走る。
気が張っているからだろうか?
嫌な何かが徐々に近付いて来るのが分かる。
「母さん、終わったよ」
『こっちも』
『終わったです』
「カズ、ジロ缶に乗り、大和は急いで着いて来(き)いよ」
肩掛けカバンを持ち、準備を終えた北上達は急ぎホームセンターから離れた。
北上が察知した気配は、ゆっくりゆっくりと迫って来ている。
まるで、彼女を値踏みするかの様に。

四日目　接敵

北上達は走った。舗装の剥げた道路、倒壊した家屋とその路地裏を縦横無尽に走り、背後から迫る謎の気配から少しでも離れようと全力で走った。

しかし、背後の気配は離れる様子を見せず、付かず離れず一定の距離を保ち、北上達を追っていた。

「しわいにゃあ！　何時まで追って来るがな?!」

「母さん！　何が来てるの?!」

「分からん！　分からんが、たいてえらそうなが来ゆうが！」

遅れだして脇に抱えた大和が北上に問うが、北上にも何が迫って来ているのか分からない。

分からないが、今の状況で追跡者に追い付かれるのはマズイ。

北上は煙突缶を背負い、大和を脇に抱えながら全力で大地を蹴った。

「カズ！」

『敵影未だ見えず！』

煙突缶の中央辺りに立つアンテナにも似た物見矢倉に登ったカズが、北上の全力疾走による揺れで振り落とされない様、柵を掴み双眼鏡を覗き報告する。

『右方敵影未だ見えず！』

『左方同じく！』

続いて、ジロとサブが左右を報告する。敵の影は未だ見えず、その気配だけが五人を追っている。

北上は迫る気配から逃れようと全力で走った。

ーーどうもならんにゃぁ、こらぁ！ーー

全力疾走を行ってはいるが、今の状況では充分な加速を得られない。右脇に荷物を背負った大和を抱え、左肩には得物の入れた鞄を提げ、金属の塊である煙突缶を背負っている。

幸い、煙突缶も大和も北上の予想よりは軽い。

だがそれでも、北上一人より重量がプラスされている事は確実で、

その分の加速が失われているし、北上の体力も確実に失われている。
舗装が剥がれ不安定な道路、倒壊した家屋の隙間に路地裏と、人一人に荷物を抱えて縦横無尽に走り回り、背後からの圧力に削られ、北上の無尽蔵とも言える体力も確実に消耗していた。
「母さん！」
「あんま喋りな！　舌噛むぞ！」
「前！　道無いよ！」
大和がガクガクと揺られながら指差す先には、崩れ半ばから途絶えた橋とその瓦礫が浅い水路を塞いでいた。
北上は大和の声に急速な方向転換を行いながら、崩れ意味を成さなくなった橋を見た。
「何ぜこら?!」
その橋はまるで『巨大な何かが無理矢理押し通った』かの様に上流目掛けて中央のみが抉れ、左右に瓦礫が押し退けられていた。
一体何が通ったのか？
思わず思案し脚が緩んだ北上だったが、今はそれどころではないと、再び加速を始める。
ーーこらぁ、向こう岸に渡るは無理やにゃぁーー
水路沿いに走る北上は逃走ルートを脳内で組み上げ、下流へとひた走る。
狙いは海、追跡者が何者なのかは分からないが、一度海に出て、追跡を振り切ろうと北上は考えた。
しかし、その思案は突如降り注いだ轟音によって遮られた。
轟音、衝撃。北上達をその二つが打撃し、その衝撃で北上は体勢を崩した。
耳鳴りがする。息が荒い、心臓が早鐘の如く鼓動する。
舞い上げられた瓦礫と土砂が降り注ぎ、視界が塞がれる。
「ぐ、ぬ」
北上は立ち上がり頭を振る。自分の状況を確認、目眩有り怪我無し、手足は動く。自分に被害は無し。
「いたた」

『な』
『何が』
『あったです？』
　大和達にも怪我は無い。拾った斧やナイフが幾つか鞄から飛び出して散乱しているが、すぐ手の届く範囲にある。
　北上は即座に体勢を立て直し鎚鉈を構えた。
「大和、逃げえ」
「でも、母さんは？」
「ええから、早よう逃げえ！」
『北上さん』
『奴は』
『戦艦です！』
　衝撃で未だ視界が定まらない北上の前に、四つの尾を持つ白い頭の先から足元まで白い女が居た。
　あれはヤバイ
　北上の本能が警鐘を鳴らす。この体になる前、記憶にある山での仕事中に熊に出会った時に似た焦燥感。
　瓦礫を踏み締め、四つの尾の先にある歪な口が蒸気を吐きながら此方を威嚇している。
　あの肌色だけでも人間からはかけ離れているのに、腰から化け物染みた尾を四つ生やしている。
　北上の鎚鉈を握る手に力が籠る。
　目の前の白女は北上を見て、嫌らしくニタリと笑った。
「アア、アア、良イワ。貴女本当ニ面白イワ」
「ああ？　何がな？」
「砲デモナク魚雷デモナク鉈、原始ノ闘争ノ匂イガスルワ」
「・・・？　人をいきなり原始人扱いたぁ、ええ度胸しちゅうやないか、このパンツ丸出し白女がぁ！」
　北上は白女に踊り掛かった。北上の脳内にあるのは先手必勝一撃離脱、兎に角目の前のヤバイ格好のヤバイ女の首でも腹でもどこでもいいから、露出している箇所に鎚鉈で一撃を加えて逃げる。

妖精三人組が奴は戦艦とか言っていたが、北上にそんな事が分かる訳がない。
兎に角一撃入れて逃げる当て逃げ戦法を選んだ北上だが、その目論見は脆くも崩れ去る事となる。
「何ぜ、そら?」
「フフフ、本当ニ良イワネ。軽イ軽巡洋艦ノ一撃トハ思エナイワ」
「ぐだぐだ喧しいわ！　このボケがぁ！」
北上が振るった鎚鉈の一撃は平然と白女の腕に阻まれた。
人や生物等、柔らかい物に当てたとは思えぬ硬く重い感触、第一、鉈という硬く鋭利な重量物が当たって、痛みも傷も無いのはおかしい。
北上は即座に空いた左拳を白女の顔面目掛けて叩き込む。
「かったいのぅ！」
「・・・ネェ、貴女?」
「あ?」
「私ガコンナ事ヲ今更言ウノハ何ダケド、初対面ノ女ニ鉈デ斬リ掛カッテ顔面ニ拳を入レルナンテ、何考エテイルノ?」
これ以上無い正論であった。
それに対し北上は、独自の理論で反撃に出た。
「知るかボケ、アシはおんしみたいな白うて(しろくて)尾っぽ四つも生やいちゅう女知らんがじゃ！　つかよ、おんしゃ人かや?!」
「エェ・・・?」
これには白女、戦艦タ級もこれには参った。
この軽巡洋艦娘はあろうことか、自分を知らないと言うのだ。これでは、先程格好つけた自分が馬鹿みたいではないか。
いやしかし、自分も全ての艦娘を知っている訳ではない。第一、艦娘なんて連中はバーバリアンメンタルでウホウホ言っている様な連中だ。
もしかしたら、自分を知らない艦娘も居るかもしれないと、戦艦タ級は北上に問い掛けた。
「・・・ネェ、貴女。深海棲艦ッテ知ッテルカシラ?」
「知らん!!」

タ級は思わず自分の額を叩いた。

四日目　開戦

戦艦タ級は思わず自分の額を叩き、天を仰いだ。
まさか、自分を知らないだけではなく自分達深海棲艦すら知らない艦娘が存在するとは、夢にも思わなかったのだ。
ーーイヤ、嘘デショ？　デモーー
目の前の女、断言する自信が無くなったが恐らく軽巡洋艦娘の筈なのだが、チラリと先程鉈の一撃を受け止めた右腕を見る。
軽く力に乏しい軽巡洋艦娘とは思えぬ重い一撃、未だに衝撃が芯に残っている。拳も危うく顎を抜かれそうになった。軽巡洋艦娘とは何だったのか、やはり艦娘とはバーバリアンメンタルでウホウホ言ってる連中なのだろう。
チラリと右腕から目の前の女に視線を移す。
「何な？　ボケ」
此方に対する警戒は薄れていない。それどころか、メンチ切りながら、いつの間にか鎚と一体になった変わった鉈から長柄斧に得物を持ち替えている。しかも両手持ち。
ーー殺意ガ凄イワ～ーー
兎に角殺意が凄い。
殺る気に満ち溢れている。
一体、自分が何をしたのか。
ただちょっと、殺る気になって追い掛けて砲を撃っただけだ。
・・・ああ、これは殺る気スイッチ入る。
何せ、見ず知らずの謎の美女に追い掛けられて町中逃げ回って、仕舞いには砲撃で危うく吹っ飛びそうになったのだ。
それは、鉈で斬り掛かるし初対面の美女の顔面に拳を叩き込むし斧二本持ちなる。
ーーアア、美女ハ譲レナイトモーー
脳内で生意気パーカー小娘が「馬鹿ジャネーノ？」とか騒いでいるが、美女である事は事実なので譲れない。
しかし、どうするべきか。こちらは見に来ただけで、ちょっと

ちょっかいかけたら直ぐに帰るつもりだったのだが、あちらは殺る気スイッチが入っている。

──今ノ装備デハ相手シキレナイナ──

砲弾も殆ど積んでいないので、徒手による格闘戦になるが、このおさげ女に格闘戦を挑む気にはなれない。何をしてくるのか分からないし、面倒だ。

なら、報告するかと思ったが、それも面倒だ。

第一、あの中枢棲姫は何様のつもりだ？

ふっと現れたと思ったら、自分達を戦争に巻き込んでいつの間にか、自分達のトップに居座っている。

確かに、人間は最近調子に乗ってヘイヨーヘイヨー言っているが、人間程度がやる事だ。

割りとどうでもいい。

しかし、何だか腹が立ってきた。

このおさげ女で憂さ晴らしをしようと、夕級が構えた瞬間

──アラ？　コンナ目ノ前ニ斧ガ？──

おさげ女、北上が持つ斧が顔面目掛けて降り下ろされた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

──先手必勝！──

北上は鎚鉈から、リーチと重量に勝る長柄斧に持ち替え、目の前のヤバイ格好のヤバイ女に降り下ろした。

否、格好だけではなく、恐らくだが頭の中もヤバイ女。

格好も頭の中もヤバイ女、自分が『シンカイセイカン』なるものを知らないと言ったら、いきなり額を叩いて天を仰いだと思ったら、何かしらブツブツと呟き出した。

第一、へそ出しセーラー服擬きにニーハイブーツ?、極めつけは際どいパンツ丸出し。

こんな格好で廃墟同然とは言え町中を彷徨き、自分達を追い回し、何か知らないが道路を爆発させるとか、危険人物以外の何者でもない。

と言うか、『シンカイセイカン』とは何だ？

確か、小島で戦った黒ぼっこを饅頭組がそう呼んでいた気がしないではないが、あれとこのヤバイ女とでは姿が違う。

ーーん？　待ちよ。いたら、そういう事かやーー

北上は重大な過ちに気付いた。

奴の言う『シンカイセイカン』とは隠語であり、その意味する事は

「のう、あっちにホムセンあるき。そこで履きもん身繕うたらどうぜ？　なんやったら、案内しちゃるき」

追い剥ぎにあい、身ぐるみを剥がされた者達の末路。

恐らく、このヤバイ女は元はヤバクナイ白くて尾が四本生えているだけの女だったのだろう。

白くて尾が四本生えているだけでもヤバイが、この際それはどうでもいい。これがこの世界の常識なのだろう。

目の前の女は身ぐるみ剥がされて、自暴自棄になり自分達に襲い掛かってきた哀れな奴なのだ。

こんな町一つが廃墟同然になる様な世界、こういう事の一つや二つあるだろう。

情けは人の為ならず、北上は降り下ろした斧を寸前で止め、出来る限り優しく声を掛けた。

「ハ？」

「やからの？　んな、パンツ丸出しで放り出されたき、腹いせでアシら追い回して来よったがやろ？」

「えっと、母さん？」

「待ち待ち、大和よ。こら、おんしにゃ難い（むずかしい）問題やき」

『いや』

『あの』

『北上さん？』

夕級が呆気に取られ、大和と饅頭組が何を言っているのかと北上に

問うが、北上はまあ待てとそれを制す。
町一つが廃墟同然になる様な世界の被害者だ。何かを間違えたら、自分達もパンツ丸出しのへそ出しで町中を闊歩する事になっていたかもしれないのだ。
なら、その悲劇の先達に自分の出来る事は一つ。
何があったのか、それを詳しく聞かずにそっとズボンを与える事だけだ。
なんかこう、持ってる奴は持ってない奴に分けようみたいな事を聞いた覚えがある。
「作業着ばぁしか無いけんど、今のそれよりかはなんぼかマシにならぁよ」
だから、北上はその通りにしようと声を掛けたのだが、白女の様子がおかしい。
なんかワナワナしている。何か気に障る様な事を言ったのか？
北上は思わず構えたが、それが好を奏した。
「・・・コレガ私ノ正装ダ！　バカァ！」
「ぬおっ?!」
体の前で交差させた長柄斧が軋み、衝撃が体を突き抜け弾き飛ばされる。
妖精加工による強化のお陰か、長柄斧は軋みこそすれど折れず曲がらず、北上に直撃する事を防いだ。
「いきなり何するがな?!」
「ウルサイワバカァ、モウ！」
「母さん！」
タ級の一撃を防ぎ体勢を崩した北上に更なる追い討ちの前蹴り、それを避けようとする北上だが体勢が悪い。
下手に避ければ直撃する。
だから北上は息を吐き出し腹筋を全力で固めた。
「ぬぅっ！」
「・・・イヤ、貴女本当ニ軽巡洋艦？」
「やっかましいわ！　ダボがぁ！」

衝撃が芯に抜ける。内臓に響く骨身が軋む。
だが、それだけ。致命傷には至っていない。
なら、反撃に出る。長柄斧を半ばに持ち直し振り抜く。狙いはタ級の露出した腹、北上の勘ではタ級のセーラー服擬きには刃が通らない。だから、セーラー服擬きに覆われていない腹を狙う。
しかし、刃は通らず弾かれる。返す刀で左の斧をタ級の首目掛けて降り抜く。
「本当ニ容赦ガ無イワネ!」
タ級は降り抜かれる斧を捌き、左の掌底を北上の顔面目掛けて打ち込む。
戦艦級の力で打ち込まれる掌底、たかが軽巡洋艦娘に耐えられるものではない。
避けるか逃げるかしたところを、尾で打ち倒す。そう決めた。
しかし、そこでタ級はある事に気付いた。
ーーソウ言エバ、コイツ何故子連レナンダ?ーー
艦娘は人間ではない。元が人間の艦娘も居るから、厳密には全ての艦娘が人間ではないという訳ではないが、この軽巡洋艦娘は謎が多すぎる。
何故、戦艦級に一撃を通せる。
何故、戦艦級の一撃を耐えれる。
何故、戦艦娘の『子供』を連れている。
分からない。分からないが、心当たりが一つある。
何時だったか、まあまあ最近、あのいけ好かない中枢棲姫が取り乱していた事があった。
タ級にしてみればどうでもいい事だったが、「何故?」「こんな事が?」「あの子が産まれなかったから?」とか何とか言っていた気がする。
もし、それとこの謎艦娘を繋げるなら、中枢棲姫が何かに失敗したその結果、コイツがという事になる。
ーーイヤ、ドウデモイイカーー
タ級はそこまで考えて、興味を無くした。

あの中枢棲姫が悩もうが何しようが知ったことではない。至極どうでもいい。
良ければ、勝手に死んでくれても構わない。タ級の望みは、どちらかと言えば合理的な深海棲艦としては変わっている。
死ぬなら戦いで戦士として死にたい。
永く海で在り、人を歴史を見てきたタ級が胸に抱いた望み。戦いの場で生きていた人間は、誇り高く死ぬ時は決まって、笑いながら死んでいた。
タ級はそれを美しいと感じた。無論、美しさだけではない事は理解している。
到底、認められない死に方をした者も居る。
獣の様に無惨に討ち果たされた者も居る。
謀略の果てに殺された者も居る。
しかし、タ級はその戦いの場で死にたい。
否、もっと正確に言うなら、戦い笑って満足の内に死にたい。
だが、あの中枢棲姫が用意する戦場はタ級が望む場ではなかった。
誰も彼もが逃げ惑い、たまにまともな相手が出てきたと思ったら、そいつらも大したことがなかった。
しかしどうだ。今自分の目の前に居る軽巡洋艦娘は。
「ふんが!」
戦艦級の艦娘も吹き飛ばす自分の掌底を、あろうことか額で受けてみせた。
嗚呼、素晴らしい。その一言に尽きる。
「ナラ、コレハドウカシラ?」
「ぐぬ・・・!」
尾による四連撃
一発目、長柄斧で防御
二発目、これも防御したが、斧が限界を越え折れる
三発目、回避、背後にあった鉄筋コンクリート柱に当たる
四発目、回避不可直撃、尾が直撃し抉れた柱に激突、艤装が中破、黒煙が上がり始める。

「コレデ最後カシラ？」
「舐めなよ、白女・・・！」
血の混じった唾を吐き捨て、北上は立ち上がる。
正直な話、かなり辛い。前蹴りも掌底も耐えられたが、あの尾の一撃で全てが引っくり返った。
恐らく、肋が折れた内臓も幾つかやられた。得物も折れた。鎚鉈を抜く余裕も無い。
だからどうした。
今ここで諦めれば死ぬ。
なんだかよく分からない内に、よく分からない世界に居て、またよく分からない内に連れが出来て母と呼ばれ、よく分からないなりにこの世界で生きていこうと決めた。
だから、諦めない。この世界で諦めるという事は死ぬという事だ。
自分だけではない。連れのよく分からない饅頭三人組、自分を母と呼ぶ自分と同じ小島に居た娘、自分が諦めれば、この四人も巻き添えで死ぬ。
ーー生きちゃる。徹底的に生きちゃらぁーー
生きて、生きて、生き延びる。
その為には、目の前の白女が邪魔だ。
逃げる力は無い。立っているだけでやっと。
だが、諦めない。生きてやる。
「コレデ終ワリヨ」
タ級が尾を振り上げ北上に止めを刺そうと迫る中、所謂走馬灯とでも言うのだろうか、北上の視界はとてもゆっくりと流れていた。
ーー死ねん、死ねるか！ーー
迫る死、それを目前に北上は身を回し回避するが、背負った艤装を忘れていた。
尾はなんとか避けたが、背後にあった鉄筋コンクリート柱に思い切り艤装をぶつけてしまった。
「んぎっ！」
艤装が北上の背中に激突する。走る痛みとは別に、北上の背中に走

るものがあった。
背骨を駆け上がる電流にも似た感覚、北上はそれが何なのか本能で理解した。
「がっ嗚呼嗚呼嗚呼ああああぁぁぁぁぁぁっ!!」
背に手足に力が通う、血が肉が沸き立ち沸騰する。
背の艤装から黒い排煙が噴き出す。
艤装が燃料を燃やし、熱を蒸気を力に変える。
伝わる力は人間の比ではなく、正しく軍艦の力そのもの。
それをもって北上は、背後の身の丈を遥かに越える鉄筋コンクリート柱を右脇に抱え、力任せにへし折った。
吐く息は白く、三白眼を見開き見据えるは戦艦タ級。
「チョッ！　貴女ソレハ?!」
「アシは・・・生きちゃる・・・！」
腰を落とし、体を捻る。狙うは戦艦タ級、振るうは決意の一撃。
「誰が、何言うてきたち知るか！　アシらは生きちゃらぁ!!」
体を前に倒す様に踏み込み、周囲を巻き込み振るう。
タ級は眼前に迫る破壊力に笑みを作り、北上に対する違和感に納得する。
「アア、成程ネ。貴女ガ・・・」
ーー神秘の結晶体ナノネーー
瞬間、激突、衝撃。北上が振るった一撃の後にはタ級の姿は無く、崩れた瓦礫ともうもうと煙る土煙のみであった。
「ぬ、あ・・・?」
「母さん!」
右脇に抱えた鉄筋コンクリート柱を落とし、その場に崩れ落ちる北上に駆け寄る大和。
戦いは終わった。
だが、北上は倒れ目を覚ます兆しは無い。
「母さん。ど、どうしよう・・・?」
『大和さん』
『兎に角』

『この場を離れるです』
「うん！」
なんとか四人で北上を支え、付近の崩れていない家屋へと向かう。
支える北上の体は熱く、息も荒い。
不安もある、未来は見えない。
だが、初戦を彼女達は生き延びた。
戦いに勝った北上の顔は晴れやかなものだった。

世界は廻るよ、何処までも

寂れ埃や汚れが目立ち、雑草が庭先を覆った民家。
その持ち主を失った民家の居間にて、高らかに鼾をかく女が寝ていた。
女の名前は北上。元々は違うが、本人も何が何だか分からぬ内に、この軽巡洋艦娘の北上になっていた。
「んがぐ・・・」
高らかにかいていた鼾が止まり、包帯が巻かれた右手で腹を掻く。
あまり他人には見せられぬ寝姿だが、本人は一向に気にしないのだろう。
六つに割れた腹筋をそのままに、また鼾をかき始めた。
「ぐぐがぐ・・・」
「・・・もう、母さんったら。またお腹出して寝てる」
「ぐがっ」
「んしょっと」
大和が北上がはだけた布団を直し、溜め息を一つ。
「母さん。いつ起きるのかな?」
北上は夕級との戦いの後、二日間起きる事無く眠り続けている。
息はしているし、食べ物や水も口に持っていけば勝手に食べるが、眠ったまま起きる気配が無い。
『大和さん。缶詰見付けてきたです』
「ありがと、カズちゃん」
『北上さん、まだ起きないです?』
「うん。ジロちゃんとサブちゃんは?」
『二人なら、艤装の修復してるです』

ジロとサブの二人は頭を悩ませていた。
『どうして』
『こうなってるです?』

先の戦闘で破損した北上の艤装を、町中で拾い集めた金属製品を潰して加工して修復していたのだが、肝心要の動力部で問題を発見した。
否、問題と言うよりは奇怪なものだ。
『なんで』
『動力機関が二つあるです？』
通常、一つの艤装に一つしかない筈の動力機関が北上の艤装には二つあった。
戦闘中は必死で気が付かなかったが、今思えばおかしい点が幾つも北上にはあった。
相手は戦艦タ級であるのに、一介の軽巡洋艦娘である筈の北上が力負けをせず、かつ強度でも負けていなかった。
実際にはそれは有り得ない事だ。
戦艦級に勝てる力を持つ者は居ない。戦艦とは、絶対の力と装甲で戦場を擂り潰す、何者にも真似する事の出来ない存在、それが戦艦なのだ。
なのに、北上はその戦艦級でも上位に当たるタ級と、互角の力勝負をした。
サブは思い出す。
戦っている最中の北上、そしてその艤装。
そうだ。艤装の動力機関は回転を上げ、北上に戦う力を既に送っていた。
しかし、ある一瞬、北上の力がはね上がった。
あの時、動力機関は全力で稼働していた。
だが、北上が吼えた瞬間、もう一つの動力機関が稼働し始めた。
それはまるで、北上が求める力を求めるままに与えるかの如く、北上の要求に応えたかの様であった。
『う～ん』
『どういう事です？』
二人は更に頭を悩ませた。
第一、自分達の事もよく分かっていないのだ。

何時かは覚えていないが、自分達妖精は消えかけた。
と言っても、うすらぼんやりとした感覚的な記憶に過ぎない。
だが、自分達はこの世界から存在が消えかけた。
何が原因かは分からないが、『とてつもない何か』が産まれようとしていたという事は分かる。
あれが何だったのか？
それは分からないが、あれはきっと良くないものだ。
『考えても分からない事はしょうがないです』
『戻ってテレビ点くか試してみるです』
『ジロ、サブ。テレビ点いたです』
「テレビって凄いね。遠くの事も分かるんだもん」
『何やってるですかね？』
『見てのお楽しみです』
『って、え？』
「なに、これ・・・」
考えても分からぬと思案を中止し、二人は居間に戻り物は試しにと点けてみたテレビを見て、愕然とした。

本日未明、佐世保第二鎮守府が深海棲艦による侵攻で壊滅しました。
侵攻した深海棲艦は、第一第三佐世保鎮守府により討伐されましたが、佐世保第二鎮守府とその周囲の生存者は居ないとの事です。
暫定政府はこの事を受け、佐世保に現存する第一第三両鎮守府の戦力増強を発表。
対深海棲艦用戦車並びに対深海棲艦用強化外骨格の配備を決定しました。
同様の侵攻はラバウルでも発生しており、暫定政府は追加戦力の増強と配備に頭を悩ませる結果になっております。
ーーはい、は？　只今入ってきた情報です！
たった今、艦娘保護団体『夜明けの水平線』が武装蜂起をしたと入ってきました！

犯行声明は無く、舞鶴第三鎮守府が占拠されたとの事です！
生存者及び負傷者の情報はまだ入ってきていませんが、当局によると可能性は絶望的との事です！
情報が入り次第、追って・・・

「皆、これって・・・」
『ヤバイです』
『深海棲艦に』
『負けてるです』
深海棲艦の侵攻に艦娘保護団体なる団体の武装蜂起、テレビではまだ絶望的なニュースが流れ続け
「ごぐぁ・・・」
そんな事は知らぬ北上の鼾だけが、薄暗い居間に響いた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「フウ、疲レタワネ」
「オ？　タ級。ボロボロジャアナイカ」
「アラ、レ級。何シテルノカシラ？」
「暇ダッタカラナ。中枢ノクソ女ノ配下ヲカラカッテ遊ンデタ」
「フフ、アマリヤリ過ギテハダメヨ。アノ女ハネチッコイカラ」
「分カッテルヨ。ソレヨリモタ級、随分満足ソウジャナイカ」
「分カル？」
「分カルサ。デ？　何ガアッタヨ？」
レ級のその言葉にタ級は、埃に塗れた髪を払い白い頬を上気させ身を捩った。

その様子はまるで、恋に恋する乙女の様であるが、実際は似ても似つかぬものである。
「嗚呼、嗚呼、私ノ念願ガ漸ク叶ウカモシレナイノヨ」
「アア、戦イノ中デ死ニタイダッタカ？」
「正確ニハ戦イノ中デ満足シテ笑ッテ死ニタイヨ」
「コレマタ、相変ワラズ拗ラセテルナ」
身を捩らせ歓喜に打ち震えるタ級を他所に、レ級は感心した様な呆れた様な態度で、襤褸切れの様になった『何か』を放り捨てる。
その間にも、タ級の昂りは止まる事無く、歌劇の如く高らかに滔々と身振り手振りを加えて歌い上げていた。
「嗚呼、アレコソ正ニ原始ノ闘争！　私ガ長年求メタ真ナル闘争！」
「戦イナラヤッテルジャナイカ。ソレジャダメナノカ？」
「ダ、メ、ヨ！　彼奴ラガヤッテイルノハ戦争、私ガ求テイルノハ闘争！　嗚呼、違ウワ、違イ過ギテ頭ガオカシクナリソウッ！」
「ハイハイ、分カッタ分カッタ。落チ着ケッテ、マタヲ級ニ杖デ頭ドツカレルゾ？」
「ドツクナラドツケバイイジャナイ！　甘美ナル闘争ガ私ヲ待ッテイルノヨ！」
コリャダメダ
レ級は呆れて溜め息を一つ吐いて、自慢の尾を海面に叩き付け、襤褸切れになっても蠢く『何か』が四散した。
「アラ？　良カッタノ？」
「ン？　アア、動カナクナッタシ良イカナッテ」
「ソウ。ア、ソレヨリモ聞イテヨ。モシカシタラ、彼奴ハ神秘ノ結晶体カモシレナイワ！」
「神秘ノ結晶体！　マジカヨ！」
「エエ、ソウデナクテハ私ト互角ニ戦エル訳無イジャナイ」
「ナアナア、俺モソイツト遊ンデイイカ？」
「ダメヨ、マダダメ」
「ナンダヨ、ケチダナ」
「彼女、マダ目覚メテナイミタイダカラ、モウ少シ待タナイト」

ソレカラヨ、オ楽シミハ
タ級とレ級は笑う。
来るべき邂逅を夢見て、静かに凄惨に笑う。
「ア、ソウイエバ、中枢棲姫ガ次ノ侵攻ニ加ワレッテサ」
「ソ、無視シマショウ」
「ソウダナ」
「アラ？　ソウイエバヲ級ハ？」
「ン？　ヲ級ナラ中枢ノ配下ガ五月蝿イッテ潰シニ行ッタゾ」
「ジャア、モウスグ帰ッテ来ルワネ」

港と船乗り

空からは太陽が容赦なく照り付け、海から吹き抜ける潮風を余計に温く湿っぽく感じさせる。
そんな温く湿っぽい潮風が吹き抜ける港では、大型の貨物船から幾人もの男衆が重機にクレーンを駆使して貨物を運び出していた。
「ほら、あんた達！　ちゃっちゃと終わらせな！」
そんな男衆に、肩にジャケットを羽織った女が檄を飛ばす。
その顔には、額から右頬へかけて右目を潰す大きな傷が、本来左腕があった位置には大型の義腕があった。
「作業が遅れてんだ！　モタモタしてると、飯抜きだよ！」
形の良い唇から飛び出す言葉は威勢良く、男衆の作業を促す。
薄く色の抜けた髪を潮風に遊ばせ、女は義腕に持った分厚いファイルを捲っていく。
「ん？」
分厚いファイルの中程のページに目を合わすと女の手が止まり、眉間に皺が寄る。
前のページと見比べ、目の前を運ばれていく貨物を睨み付け、煙草を取り出し火を着けた。
紫煙が潮風に運ばれていく。
「なあ、おい。提督さんよ」
女が呼びつけた年若い提督と言う男、周囲で働く男衆とは違い、頭の先から爪先までキッチリとした仕立ての軍服を身に纏い、顔立ちもそれに劣らぬ美丈夫と言える。
女はその美丈夫を睨み付け、ファイルの一ページを手で叩きながら提督を問い詰める。
「なぁんで、燃料費が支払いに入ってないんだぃ？」
「ああ、その事か」
「ああ、その事か、じゃあないんだよ。資材運ぶのもタダじゃない。燃料、弾薬、飯に水、細かく言やぁまだ経費が懸かってんだ。これっぽちの支払いじゃあ、話にならないんだが？」

女の仕事は資材運搬を主にする貨物船の船長であり、男は資材を下ろしている港を所有する鎮守府の提督だ。
女は男に詰め寄り、ファイルを突き付ける。
「契約じゃ、報酬は経費込み。そして、成功報酬に加えての無事運搬出来た資材量に応じた額、と言う話だった筈だ。忘れたとは言わせないよ」
「忘れたと言ったら？」
提督が女に挑発的な笑みを見せる。
提督には確信があった。
彼は国を守る軍人であり、今のこの世界を脅かす敵〝深海棲艦〟に対抗出来る存在〝艦娘〟を指揮する立場だ。
所謂〝英雄〟、多少の値引き程度でとやかく言われる謂れは無い。
〝守られている者〟は〝守っている者〟の言う通りにしていればいい。
それがこの提督の持論であり、若い提督がよく陥る初歩的なミスだ。
特に、彼のように功績を立てている者に多い。
そして、こう言った機会に学ぶのだ。
「柳瀬（やなせ）！　今下ろした資材、全部船に戻しな！」
そんな事知ったことかと、言える人間が居るという事を。
「船長、どうしたん？」
柳瀬と呼ばれた者が重機から顔を覗かせ、何処か間の抜けた雰囲気がある訛りで女に問う。
「どうしたもこうしたもないよ。どうやら、この若い提督さんは、金が無いらしい」
「あちゃ～、そらあかん。そんなん、ウチらタダ働きですやん」
「つう訳だ。あんた達！　倉庫に運んだ分も、燃料一滴弾薬一発、鋼材一枚残らず引き揚げな！」
女の突然の暴挙に呆気に取られる提督だが、そんな事は関係無いと、女の指示に男衆は運び込んだ資材を貨物船へと積み直していく。
「な・・・　勝手な事をするな！　民間人の分際でっ・・・あっ！」

正気を取り戻した提督が女に詰め寄り、資材の運び直しを要求しようとした瞬間、彼の視界が一気に引き上げられた。
「なあ、提督さんよ。アタシらはさ、慈善事業やってる訳じゃないんだよ」
「な、にを・・・？」
軍人である提督よりも頭一つ低い女が、義腕で軽々と彼の胸ぐらを掴み吊り上げる。
それにより苦し気に抗議する提督だが、女には意に介した様子は無い。
「生きるには金が要る。そんな事が解らない訳じゃないだろう？」
「それが、どう、したと？」
提督は手足を動かし拘束を解こうとし、女はそれを意に介さず溜め息を一つ吐いた。
柳瀬はそれを確認すると、苦笑いで重機で作業を続ける。男衆も同じだ。
「嘗めんじゃないよ、ガキが！　こちとら、テメエの下の毛が生え揃わない内からこの稼業やってんだ！　金が無い？　支払いをまけろ？　嘗めた口聞いてんじゃないよ！」
「俺が、お前達を守ってやってるんだぞ！」
「はっ、守ってやってるだぁ？」
提督が絞り出した言葉を女は鼻で笑い飛ばす。
「笑わせてくれるじゃないか。あんたがどうやって、アタシらを守ってるってんだい？」
「それ、は・・・」
「そら見な、そこで艦娘を指揮してって、言えないようじゃお話にならないね」
「この・・・！」
論破され咄嗟の反論も出来ず、提督は自分を吊り上げる女をただ睨むしか出来なかった。
「船長、積み込み終わりや」
「出航準備しな。柳瀬、ちゃんと〝準備〟しなよ？」

「分かってますわ。確り準備は出来てますわ～」
「いい子だ。今日の晩飯に、さっき仕入れた果物付けてやる」
柳瀬が猫を連想させる細目でそう告げると、女は提督を放した。
そして、彼を一瞥もせず、羽織ったジャケットを翻し自らの城である貨物船へと乗り込んでいく。
「こんな事をして、ただで済むと思っているのか?!」
「どうしてくれるってんだぃ?」
提督の言葉に女は不敵に笑う。
「まさか、港から出さないなんて言うんじゃないだろうね」
「だとしたら、どうする?」
提督は下卑た笑みを深くし、海へと視線を向ける。
その視線の先には、出航の準備を進める貨物船があり、船員達が慌ただしく動き回り、柳瀬と呼ばれた中性的で男か女か判らない者が指示を出していた。
「そう言や、提督さん。艦娘、特に潜水艦娘ってのは、随分と耳が良いんだね」
「・・・いきなり、なんの話だ?」
「いやね、アタシもいい年でね。聞き取れない音なんてものもある。しかし、あの潜水艦娘共は聞き取れない音が無いって言うじゃないか」
提督は女が何の話をしているのか解らなかった。いや、解りたくなかった。
そう、仮にも先日の九州侵攻で少なくない貢献をし、武功を立てたのだ。女の言葉が何を意味しているのか、理解出来ない訳が無いのだ。
その証拠に、貨物船にあるクレーンから垂れ下がる鎖の先に、見覚えのある姿が幾つか見える。
「貴様・・・!」
「あの娘らには、耳栓でも渡しといた方が良いかもね。アタシらみたいな、深海棲艦と殺り合う事もある連中相手にゃ、あの娘らは弱点が多すぎる」

「俺の部下を今すぐ、解放しろ！」
「キャンキャンキャンキャンと、喧しいガキだね」
女は提督へと向き直り、もう一度義腕で胸ぐらを掴み、今度は義腕の出力任せに跪かせる。
そして、下がった整った顔に紫煙を吹き掛け言った。
「いいかい、坊主？　アタシらは慈善事業はやってないし、あんたらが負けようが知った事じゃないんだ。あんたらが負けても、アタシらは別の取引先を探す。それだけさ」
だからね
「ちょっとばかり上手い事やっただけで、調子に乗るんじゃないよ？」
言うと女は提督を放し、貨物船へと戻って行った。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「あ～ぁ、くそったれ。折角の稼ぎがパーだ」
「いやいや、船長。解ってやってましたやろ」
「おや、柳瀬。なんでそう思うんだぃ？」
港を出た貨物船の船長室では二人が書類とにらめっこの最中であった。
女船長がぼやく通りに、ここ最近では大きな実入りが無く、今回の仕事は久々の大口だっのだが、支払いを渋る相手に当たってしまい稼ぎは殆ど無い。
「前から噂が流れてましたやん。九州方面の提督の一部が罷免させられるって」
「あぁ、そうだったかね」
「嫌ですわ～、船長」
「まあ、あれはいいとして、あの娘共は？」
「魚雷やらなんやら引き剥がして、港向けて放り捨てましたわ」
「ならいい」

今回の取引相手はあの提督だったから、潜水艦娘達にはてを出していない。ただ、潜水艦娘にしか聞き取れないバカでかい音を聞かせて一時的に耳を潰して、拘束しただけだ。
引き剥がした装備品は有り難く頂戴している。売り飛ばすなり、深海棲艦の迎撃なり、同業者との争いになり利用させてもらう。
「次でこの在庫、掃かせないといけないねぇ」
女船長が呟き、椅子に身を深く沈める。
少し遅れて柳瀬が立ち上がり、茶を淹れようと給湯器へと向かう途中で内線が鳴った。
「こちら、船長室」
『あ？　柳瀬か？　船長居るか？』
「居ますよ、どうしましたん？」
『ちょっと、甲板まで来てくれねえか？　見てほしいものがある』
当直の見張りからの内線は、女船長に甲板まで来てほしいと言うものだった。
どうやら、何か見つけたようだ。
「船長、お呼びですわ」
「聞こえてた。入野（いの）の奴は、声がデカくて聞き取り易いからね」
船長室を出て、呼ばれた甲板へと向かう。
もうすぐ夕暮れ、見張り役には嫌な時間が近付いてきている。とは言え、この付近の海路は比較的安全が確保されているし、大きな港も無い。
有るのは、深海棲艦の侵攻によりこれからの安全が絶対ではなくなり住民達に棄てられた〝棄て町〟が点在するだけだ。
後は、深海棲艦の攻撃か発見だが、その場合はこれ程悠長にはやってられない。直ぐ様、迎撃か逃走か選び、実行に移さなければ全員死ぬ。
「一体、何があったんだい？」
「あ、〝五十嵐〟船長、あそこ。あれ、見てください。あれ」
見張り役の入野が望遠鏡を渡し指差す先は、最近〝棄て町〟となった町だった。

「入野さん？　棄て町がどうしましたん？　何も、変わり無いですやん」
「バッカ、柳瀬。よく見てみろ、ほらあそこ。こっからでも見えてた建設途中の柱が有っただろうが」
「無いですやん」
「そう、無いんだよ。でだ、ちょっと周りを見たんだが、あそこ、小屋が潰されてるとこ。なんか妙じゃねえか？」
　入野の指差す先に五十嵐は望遠鏡を向けて見ると、何かに薙ぎ払われた跡と、その終点に転がっている鉄筋コンクリートの柱があった。
「柳瀬、あれ、何だと思う？」
「単純に考えたら、深海棲艦ですわな。でも、態々陸に上がって鉄筋コンクリートの柱折って振り回す暇人はおりませんやろ」
「だろうね」
　入野と柳瀬は五十嵐の口角が上がるのを見た。
「柳瀬、入野。〝脚付き〟の準備しな！明日、あの〝棄て町〟に上がるよ」
「船長、まさかですけど、行くつもりです？」
「暇なんだ。ちょっと見に行くくらい良いじゃないか」
　こうなった五十嵐は止まらない。柳瀬と入野は大人しく、彼女の指示通りに船内へ指示を伝える。
「格納庫、〝脚付き〟の準備しろ！　〝杭打ち銛（パイルハープン）〟もだ！　明日、〝棄て町〟に上がるぞ！」
「杭打ち銛、要りますのん？」
「知らねえのか？　あの町の河口付近は連中の砲雷撃戦で水深がかなり下がってる。〝クジラ〟くらいなら隠れられるくらいにな」
　慌ただしく準備を始めた二人を他所に、片腕義腕の女は少し様子の変わった町を見ながら呟いた。
「火事場泥棒は趣味じゃないが、ちっと気になるしね」
　己の直感に従い、明日町に上がる。
　そして、この決断が彼女達にとって、後々とんでもない分岐点となる事を、この時点では誰も予想出来なかった。

七日目

「んが・・・　朝か」
朝陽が差し込む居間で、眠りっぱなしの北上が目を覚ました。体を起こしバリバリと頭からフケを掻き出し、ゴキゴキと派手な音を首から鳴らす。
体に痛みは僅かに有るが、思ったより影響は無さそうだ。
北上は欠伸を一つして、枕元に畳まれ置かれていた上着から、煙草を取り出し火を着けた。
「お～、どれぐらいばぁ眠っちょったか知らんけど、ヤニが回るのう」
行儀悪く紫煙を吐き出し、周囲を確認する。
見覚えの無い天井に居間、状況はよく解らない。
近くの卓袱台にあった灰皿に、短くなった煙草を押し付ける。
「んあ？」
腹の虫が鳴る。腹が減った。周囲を見渡す。
何も無い。
思い出せば、あの白女との戦いで殆んどの物資が吹き飛んだ。
ーーあの白女が、次は容赦せんーー
そう決めるが、今は空腹を満たす方が大事だ。
北上は布団から出て、食料を探し始める。
「アシのズボンは何処行ったがな？」
肌着にパンツ一枚という、何とも言い難い格好。背中が痒いのか、台所にあった鍋の蓋を開けながら乱暴に掻いている。
暫く台所を捜索するも、何も無いと分かり二本目の煙草に火を着けた。
「大和、カズ、ジロ、サブ」
連れ合いの四人の名を呼ぶが、返事は無い。
さて、どうするか。
先ずは、ズボンだ。

〃〃

「〝脚付き〟の準備はいいか?」
「ああ、船長。出せて三台だな、こりゃ」
「・・・あれかい?」
「ああ、〝あれ〟。この間の〝夜明けの水平線〟だかなんだかのせい」
　貨物船の格納庫の中、五十嵐と機関長の前には、正方形を前後に段差を付けて、二つ組み合わせた下に蟹の脚を六本取り付けた鉄塊が鎮座していた。
「あの、テロリスト共が・・・! 追い返すだけじゃなくて、叩き潰しておくべきだったか」
　〝多脚型戦闘装甲車輌〟通称〝脚付き〟
　今現在の軍での主力の一つであり、艦娘以前から使われている兵器でもある。
　簡単な換装であらゆる局面に対応する事が出来、専用の換装を行えば海上戦闘も可能となる。
「それやっちまったら、奴等と戦争でしょうよ。ただの運び屋風情にゃ、テロリスト相手はしんどいですぜ」
「まったく、面倒な話だよ」
　五十嵐達が保有するものは型遅れの払い下げ品を独自に改修したものを使っていおり、五十嵐達では整備性と生存性を重視している。
「船長、ほんまに行くんです?」
「柳瀬、アタシの楽しみを邪魔する気かい?」
「いやいや、そんなつもりは無いですわ～。やけど、何でそんなに行きたいんで?」
　柳瀬の問いに五十嵐は、懐から煙草を取り出すが、格納庫は禁煙だと思い出し、口の端にくわえるだけにした。
　そして、紫煙を吐く代わりに顎を撫でながら、五十嵐は柳瀬の問いに答える。
「ん～、何て言えばいいのかねえ。何となく、行かなきゃいけない気が

するのさ」
「ははぁ、左様で」
柳瀬も五十嵐に付き従って長い。彼女の勘はよく当たり、それで全滅を免れた事も一度や二度ではない。
船員は皆、彼女を信じており、彼女が行かなきゃいけない気がすると言うなら、黙って準備を進める。
「入野、アタシの〝シオマネキ〟出しときな！」
「いや、あの、船長？」
「なんだい？」
「〝シオマネキ〟、壊れてます」
「・・・予備があったろ、予備が」
「予備はまだ船長用に調整中ですよ」
なのでと、入野は続けて
「〝脚付き〟の指揮席で大人しくしててください」
入野の言われて義腕ではない右腕で、五十嵐は少しだけ雑に頭を掻いた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

寂れた、傷だらけの町を一人の小さな影がコソコソと動いていた。
まだ午前中、隠密には向かない時間帯だが、その小さな影にはあまり意識はしていなさそうだ。
「なにか、ないかな？」
その小さな影は、民家や商店に入っては出てを繰り返していた。
後ろに結んだ髪を揺らし、入った民家を物色する。犯罪だが、もうこの民家には誰も帰って来ないという事は解っている。
『大和さん』
『もうすぐ、お昼です』
『一度、帰るです』

「うん」
反応から察するに、あまり収穫は無かった様だ。
もう既に、全部持ち去られた後なのかもしれない。
「皆、なにかあった？」
『いやはや』
『こっちは』
『缶詰一個です』
大和はやって来た自分より小さな三人を背負ったリュックに乗せて、民家を後にする。
あの白い女に追われてから、三日目。ホームセンターから持ち出した食料は底を尽き、今は隠れている民家の近所から探し出した缶詰等の保存食で食い繋いでいる。
一度ホームセンターに戻ろうと思いはしたが、北上と一緒に滅茶苦茶に逃げ回った為に、今自分達が何処に居て、ホームセンターが何処に在るのかが分からなくなっていた。
「母さん、大丈夫かな」
大和が母と呼ぶ北上は、あの戦いから三日間目を覚まさない。息もしているし、口に何かを持っていったら食べるから生きている。
『大和さん』
『北上さんなら』
『きっと大丈夫です』
リュックから顔を出した三人が、肩を落として歩く大和を励ます。
しかし、一抹の不安もあるのは事実だ。自分達の中で戦えるのは北上だけ、今の状況でまた襲われたら一堪りもない。
「うん、そうだよね。じゃあ、早く帰ろう」
リュックを背負い直し、前を向いて歩き出した大和に、三人は胸を撫で下ろして、辺りの警戒を続ける。
『あ、大和さん。そっちの道がいいです』
「こっち？」
『そっちです』
サブが指し示す道は、民家と民家の間にあり多少狭く入り組んでい

るが、大和なら問題なく通れる道だ。
北上は敵の艦載機とも戦闘をしていた。なら、出来る限り空からこちらが見えない様に移動するべきだ。
そして、狭い裏路地を抜けて、広い通りに出ようかという時、ジロがカズに聞いてきた。
『カズ、カズ』
『なんです？　ジロ』
『何か、変な音しなかったで・・・す？』
「もう、ジロちゃんやめてよ、え・・・？」
聞いてきたジロが固まり、大和が恐る恐るジロや他二人が見ている方向に振り向くと
「えぇ・・・？」
なんだか四角い、脚の生えた何かに乗った人間が、半身を乗り出し驚いた顔で固まっていた。
「逃げるよ皆！」
大和は即座に回れ右で裏路地へと戻っていった。
後ろから待って待ってと聞こえるが、今までの新聞やテレビのニュースでは、艦娘が人間に係わると録な事にならないと偏った学び方をした大和達は止まらない。
兎に角、今は逃げて北上と合流を目指し、大和は裏路地を縦横無尽に走った。

七日目

腰に鎚鉈を提げた作業服姿の女が、煙突が付いた奇妙な機械を背負って無人の町を歩く。
口の端にはしわくちゃに曲がった煙草が挟まれ、紫煙が風に乗って漂っている。
「あいたら、何処へ行ったがな」
紫煙を燻らし、欠伸混じりに天気の良い町を歩く。
どうにも、疲れというか気怠さが抜けない。
真夏の昼寝直後の様な倦怠感が纏わり付いて離れない。
「たいそい（しんどぃ）のう。こういう日は、酒呑んで寝よりたいわ」
しかし、その肝心の酒が手元には無い。
欠伸を噛み殺し、新しい煙草に火を着ける。
酒も欲しいが、今は飯も欲しい。魚、缶詰缶詰では、どうにも腹の座りが悪い。
兎に角、白飯を掻き込みたい。
「腹、減ったのぅ」
空を見上げて、北上は呟いた。
見上げた空は何処までも青く、雲の合間に紫煙が流れていった。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「いやぁ～、久々の地面だよ」
「船長。つい最近、港下りとったやないですか」
「言葉の綾に決まってるだろう？　柳瀬」
左の義腕を空に翳して、五十嵐が笑みを浮かべる。
船の上では眩しく照り付けてくる太陽だが、地上だとそれに加えて暑く感じる。
義腕が作る影の下で、五十嵐は残った左目を細めた。

「船長、無理はせんでくださいよ？」
「分かってるよ」
「〝シオマネキ〟の修理が弾倉交換だけで済んだいうて、無理したらまた壊れますわ」
柳瀬が苦言を呈すると、五十嵐は自分の左腕を見る。
自分の上半身よりも大きい機械の腕、その前腕部は肘が大きく突き出し、半ばには六発装填の輪胴弾倉が内蔵されている。
片腕だけが異様に大きく見える事から、蟹の〝シオマネキ〟と同じ呼び名で呼ばれる義腕。普段使っている義腕も同じ系列だが、この〝シオマネキ〟は軍用だ。
出力も強度も段違い、負荷も強いが軽巡級なら装甲を抜ける。
「こないだみたいに寝込んで、入野さんに怒られても、ウチは知りまへんで」
相も変わらず、胡散臭い喋り方をするものだ。五十嵐は柳瀬が何処の出身か知らない。それは柳瀬本人もだ。
何処かの港町で船員が拾ってきた戦災孤児の生き残りが、この柳瀬だ。
「入野に叱られるのは勘弁願いたいねぇ」
五十嵐の船員にまともな出身の者はほぼ居ない。海に陸に空に、訳の解らない化け物がわんさと湧いてくる御時世の海で、海運業に就いている人間だ。
その脛には、大なり小なり多かれ少なかれ傷がある。
そんな連中を拾い集め、港から港へ物資を送り、深海棲艦や同業者、軍人崩れの海賊に傭兵共とやり合いを繰り返し、気づけば随分な大所帯になった。
「先に町に下りた連中からは、何かあったかい？」
「今んところ、何もありませんわな。でも、あの柱があった場所には砲撃跡があったらしいですわ」
なんだかんだと色々あったが、艦娘とはやり合った事は無い。やり合う事になれば、国と戦争する事になる。
いくら、この国が疲弊し形を保っているだけで精一杯とは言え、国

は国だ。一介の海運業者が歯向かうには大きすぎる。
「船長、〝脚付き〟出しますよ！」
船から出したボートに積み込んであった〝脚付き〟のハッチから髭面の入野が顔を覗かせて、五十嵐と柳瀬に声を飛ばす。
重々しいエンジン音を響かせ、〝脚付き〟がゆっくりとボート内の格納庫から歩み出す。
「入野さん、どうです調子は？」
「ん？　ああ、脚部モーターを新品に入れ換えたばっかだからな。少しばかり、動きが固い気がする以外は問題無しだ」
言うと入野は、操縦席にてレバーで操作し、モーターを新品に入れ換えた脚を掲げて見せた。
蜘蛛や蟹を思わせる機械の脚、その先端は姿勢保持用の爪と移動用のホイールが太陽光を鈍く反射している。
「入野、杭打ち銛は積んだのかい？」
「替えの銛と装薬含めて五発ですがね」
「ま、そんだけあれば上等かね」
五十嵐は言うと、義腕で〝脚付き〟の縁を掴み、そのまま出力任せに体を持ち上げ後部の指揮席へと乗り込んだ。
「船長、無理しとるとまた肩の継ぎ目が痛い言うて、夜中に唸る事になりまんで？」
「そんときゃ、また痛み止の出番だねえ」
五十嵐に続き、副操縦席に乗り込む柳瀬が忠告すると、五十嵐は何処吹く風と痛み止を飲むと言う。
柳瀬は中性的な顔を僅かに歪めて嘆息する。
五十嵐は快楽主義で刹那主義な面もあるが、経営者に必要なセンスやカリスマも持ち合わせている。まあ、そうでなければこの御時世に片腕の無い女が率いる海運業者に、人が集まる訳が無いのだが。
「船長、その痛み止って、酒でしょう」
「ったりまえじゃあないか、入野。海の上じゃ、酒と飯しか娯楽が無いんだ」
五十嵐の部下の中でも最古参の入野が、慣れた様子で笑いながら五

十嵐に言えば、彼女も笑いながらそれに返す。
「まあ、そりゃそうですがね。飲み過ぎんでくださいよ」
「深海棲艦の上位個体が出た海で、操舵任せられるの船長だけなんやから。と、入野さん。出せますで」
信頼する部下の中でも最も信頼する二人に含められ、五十嵐は苦笑するしかなかった。
「よっしゃ。入野、出しな」
「アイアイマム」
五十嵐は脚付きの後部ハッチから半身を乗り出し、車体と共に加速する風を楽しみながら受けた。
この面子となら、何をするにも楽しくて仕方がない。
まるで子供の様な笑みを浮かべて、五十嵐はふと思った。
「艦娘、雇うってのも面白いかもね」
「んあ～？　船長、何や言うた？」
「なんもないよ」
海を自由自在に走り、深海棲艦と真っ向から立ち向かえる存在。海を仕事場とする五十嵐達にしてみれば、喉から手が出る程の逸材だ。
五十嵐の場合は、ただ単純に面白がって雇おうとしているだけだが、一人でも居れば仕事は更に面白くなるだろうと考えている。
――酒が呑めれば、更に面白いだろうねーー
もし、この町にあの柱をへし折って振り回した奴がまだ居て、そいつが艦娘なら雇ってみるか。
深海棲艦ならさっさとトンズラだが、話が解って酒が呑めて細かい事を気にしない艦娘が居れば雇う。
仮に人間だとしても雇う。
海沿いを走る脚付きの上で風を受けながら、五十嵐はまだ見ぬ出会いに胸を踊らせた。
「船長、先行してた奴等から、子供が居たって報告があった！」
「子供？　何だって、子供がこんな所に居るんだい」
「どないします？」
「連中と合流するよ」

そして、この先に待ち受ける出会いが、五十嵐達を奇妙な運命と世界の命運的な何かを賭けた大騒ぎに巻き込んでいくのは、また別のお話。

七日目　邂逅

「来た来た来たよ！」
『野郎！』
『これでも』
『くらうです！』
　狭い路地を小さな影が駆け抜けていく。その影は頻りに後ろを気にしており、振り向いては己が背負っている鞄に乗っている小さな三つの影に指示を出していた。
「ぐおっ?!」
「ちょっ！　嘘だろ!?」
　小さな影がなにやら、路地に打ち捨てられていたガラクタを纏めていた縄を引くと、縄が解けガラクタが崩れ落ちる音と悲鳴が聞こえた。
「次は何処を曲がるの?!」
『次の十字路を右に！』
『さっき隠れた時に仕掛けたのが！』
『残ってるです！』
　四人は逃げては隠れを繰り返し、狭い路地の至る所に簡易な罠を作っていた。
　ガラクタを手持ちの縄や、落ちて朽ちかけていたビニール袋らしきもの等を結び合わせて繋いだもので纏めて、解けば崩れるだけのものだが、この狭い路地では有効な手段だった。
　だがそれも、長続きはしない。
　子供とそれよりも小さな者達が動かせるものなど、高が知れている。
　徐々に大和達は追い付かれていた。
「待って！　大丈夫だから！　何もしないから！」
『信用出来ねーです！』
　徐々に追い付いてきた体格のよい男が、狭い路地で身を捩らせガラクタを避けながら叫ぶ。

相手は小さな子供、周りには釘が刺さった角材や割れた塗炭板、下手に手を出して転ばしでもしたら大怪我は確実だ。
そうなる事は避けたい。今の御時世、まともな医者にかかるには多額の金が要る。ヤブ医者やボッタクリもかなりの数に増えた。
中には、慈善で診てくれる医者も居るが、そういう医者程患者を抱え込んで、すぐには動けなくなっている。
「兎に角、話を聞いてくれ！　頼む！」
それに、堅気の子供に怪我をさせたと五十嵐に知られたら、なにをされるか解ったものではない。
時には荒事、人死にが当たり前なヤクザな稼業な手前、陸で生活をしている堅気の市民には、あまり迷惑は掛けたくない。
「うわ！　お前ら、〝脚付き〟でこの先の道塞げ！　早いとこ捕まえて保護者が居るなら渡さねえと！」
しかし、なんだって深海棲艦の出没圏内ギリギリの町に、あんな子供が居るんだ?!」
「知るか！　早くしろ！」
多分だが、子供特有の旺盛な好奇心で町に潜り込んだのだろう。
この路地に張り巡らされたトラップを、走りながらどうやって仕掛けているのかは解らない。だが、子供が誰かと話している様子と聞こえてくる幾つかの声から、こちらからは姿が見えないが、他に誰か居るのだろう。
「次の十字路を右に曲がった先を塞げ！」
不確定な事が多い。だが、それは自分達のいつもの仕事と同じだ。
海を相手に荷物を運び、いつ現れるか判らない海賊や深海棲艦に同業者を警戒し、なにかあれば一戦を交える。
「船長達が来る前にケリ付けるぞ！」
男が叫び、周囲が動き出した。
そして、大和達もより速く駆け出す。
「早く、母さんと合流しないと・・・！」
熱を帯びて熱くなってきた足を懸命に回しながら、大和は何とかして男達を撒こうとする。

この狭い路地なら、体の小さな自分達が有利だ。
追手が中々追跡し辛い道も、自分達ならすり抜けられる。少し息が辛くなってきたが、まだ余裕はある。
兎に角今は走り抜いて、北上と合流して逃げる事だ。
北上が眠っている間に、四人がまだ動いていたテレビや落ちて風に巻かれていた雑誌や新聞で見たこの世界。
それは、自分達艦娘には厳しい現実だった。
〝艦娘は人間ではなく、使い捨ての兵器又は簡単に取り換えの利く兵士である〟
〝艦娘は人間ではなく、天から神が遣わした御使いである〟
他にも幾つかあったが、大和が一番怖いと思ったのは、この二つだ。
そのどれも、自分達を見ている様で見ていない。
幼い大和にはよく理解出来なかったが、まるで自分達が〝人間でも生物でもないナニカ〟と言われているみたいで、自分の〝大和〟という足元が崩れて無くなっていく様な感覚を覚えた。
だが、そんな不安も簡単に消してしまう音が聞こえた。
艤装使用の反動からか、眠りこけている北上の鼾だ。
ご、とも、が、ともつかない鼻についた濁音が聞こえた時、大和が得ていた錯覚は最初から無かった様に消えていた。
己が母と呼ぶこの女性も、自分が何者なのか定かではないと言っていた。もしかしたら自分よりも不安を得ている筈なのに、そんな様子は微塵も見せない。
足元どころか、自分すらも定かではないかもしれない彼女は、それらを容易く笑い飛ばし前へ前へと進んでいく。
彼女は言った。
ーーアシらは生きちゃる・・・!ーー
「諦めるもんか・・・!」
自分の母がそうなのだ。その娘である己が、一番に諦める理由は無い。
大和は足に力を籠め、前へと駆け出した。
「諦めてやるもんか・・・!」

背後から最後の罠の音がした。
『大和さん！』
『前！』
カズとジロが叫び、前には脚の生えた巨大な鉄の箱が道を塞いでいた。
「私は、私達は、生きるんだ・・・！」
身を低く倒し、更に強く足を踏み込んだ。
向かうは箱の脚と脚の間、そこに滑り込んでそのまま逃げる。
大和は鉄の影の向こう側に見える光に向けて、一気に滑り込んだ。
「あ？　なんだい、このガキは？」
「あ、五十嵐船長！」
滑り込んだ光の先には、左腕を巨大な機械に代えた顔に傷のある女が立っていた。
「あ・・・」
「ふん？　あんた達、まさかじゃないけど、こんなチビッ子を〝脚付き〟で追い回してたんじゃないだろうね？」
「いや、船長違いますって！」
女は左の義腕で男の頭を掴むと、容易く吊り上げ詰問する。
「いつもいつも、言ってるだろう？　堅気に手ぇ出すんじゃないよって」
「あ～、船長？　それよりも、なんで子供がこんなとこおるのかが大事ちゃいますん？」
「それもそうだね」
男か女か判別に困る猫の様な顔立ちが、箱から半身を乗り出して、船長と呼ばれた女に言うと、女は男を下ろして大和に視線を合わせる。
「まあ、腕と顔は勘弁しておくれや。で、だ。お嬢ちゃん、どっから来たんだい？」
「えっと、その・・・」
右へ左へ視線を泳がせる大和に、五十嵐は首を傾げる。
この町は〝棄て町〟になってからまだ日が浅いとは言え、人が住ん

でいる町から距離がある。
一番近くの町からでも、はっきり言って子供の足では無理だ。
だとしたら、
「なあ、お嬢ちゃん。あんた・・・」
五十嵐が疑惑を口にしようとした時、道を塞いでいた〝脚付き〟が突然動き出した。
「なんだい!?」
『大和さん今です!』
「サブちゃん!」
動き出した〝脚付き〟から聞き覚えのある声がした。
身を隠していた妖精三人組が、搭乗員の居なくなっていた〝脚付き〟に乗り込み、不慣れながらも操作したのだ。
「まさか、妖精かい?! という事は、お嬢ちゃん艦娘か?!」
五十嵐が叫び、左の義腕を盾代わりに掲げる。
五十嵐の言葉に大和が一瞬だけ反応を見せたが、五十嵐にしてみればそれが答えだ。
「艦娘なら話は早い。お嬢ちゃんと妖精よ。話をしようじゃあないか」
「船長、それどころじゃないやろ! はよ離れな!」
「いいじゃないか柳瀬! こんな機会早々ないよ!」
五十嵐が柳瀬の言葉を振り払い、口を弓に吊り上げた笑いを作った。
五十嵐の悪い癖が出たと、柳瀬は舌打ちする。
彼女は大局を見る力はあるが、ときたま刹那的な行動をとる事がある。
今回は今それが出た。
「話なんて無いよ!」
『そうです』
『早く逃げるです!』
「まあ、そう言わず、いいじゃないか!」
どうしても、鎮守府以外で出会った艦娘と話をしてみたい五十嵐は

義腕を振り上げアピールする。
だが、人間を信用しきれない大和達は、〝脚付き〟に乗り込み逃げようとする。
周囲もそれを押さえ込もうとする柳瀬が乗る〝脚付き〟や、五十嵐を引き離そうとする男達で混乱の一歩手前？そんな時だった。
「おう、そこの人。げにまっことすまんけんど、長く伸ばいた髪結んだ子供見んかったかよ？」
若草色の作業着に頭に巻いたタオル、そこから垂れる長い三つ編みにくわえ煙草の目付きの悪い三白眼。
艤装を背負った北上が現れた。

七日目　交渉

北上には不可思議に思っている事がある。
この体になる以前、所謂前世若しくは記憶にある己が、いまいちはっきりしないのだ。
山で仕事をしていたという事と、今の自分が空想のキャラクターの姿になっているという事は覚えている。
だが、その仕事が何だったのか、何をしていたのか、それらが思い出せない。
それだけでなく、己が女だったのか男だったのか、はたまたその中間だったのか、若かったのか老いていたのか、それすらも思い出せない。
思い出そうとしても、霞がかかったかのようにして、記憶が朧気になり、当たり障りの無さげな風景が浮かぶだけだった。
これがどうにも、足元が不安定な気分になり落ち着かなくなる。正直、自分探しの旅でもするかと思いはしたが、そんなものは見付からないと確信があったし、自分は一人ではない。
同じ様に、自分が何者なのか解らない者達と一緒に居る。
自分と同じ様に、気付いたら今の体で、気付いたらそこに居た。
そして、今自分達が居る世界は、そんな自分達に容赦はしない世界だった。
人間ではない自分達、人間でもなければ自分達とも違う者達、そして、
「いやはや、まさか艦娘と面と向かって話が出来るとはね」
ただの人間。名を五十嵐と言った顔半分を覆う傷と、巨大な弾倉を備えた鋼の義腕が特徴の女。
「そらええけどよ。話するちなんぜ？　アシらにゃ、もう無いが」
「特に決まった話は無いさ。さっきも言ったが、艦娘と話す機会なんざ、早々ないからね」
空き家に上がり込み、居間に堂々と座ると、柳瀬という男か女かいまいち解らない者が淹れた茶を啜る。

大和達を背に隠した北上も、目の前の湯飲みを傾けると、薄い白湯に近い茶だった。
「柳瀬、薄い」
「茶葉が無かったんですわ。それが限界ですわな」
「けっ、疎開するなら茶葉くらい置いてけっての」
「滅茶苦茶言うにゃあ」
北上も負けじと、煙草に火を点ける。
見れば大分少くなり始めている。何処か手に入れられる場所を探さねば、問答無用で望まぬ禁煙生活が始まる。
それを避けたい北上が紫煙を吐き出すと、五十嵐が再度切り出す。
「で、だ。あんた達は艦娘で間違いないね？」
「ほうよ。アシらは艦娘よ。何ぞ文句あるがかや？」
「無い無い、ああ無いさ」
顔の傷のせいか、引き吊れた笑みを浮かべる五十嵐。
何回か頷いた後、それを見ていた柳瀬が冷や汗を流す。
柳瀬は知っている。この後、五十嵐が言うであろう言葉を、柳瀬は嫌と言う程知っている。
「なあ、あんた達。家で働かないかい？」
「あ？」
予想通り、スカウトに入った。
「ちょい待ち、船長」
「なんだい柳瀬？」
「艦娘雇うて、あんた何考えてんねん？」
五十嵐の悪癖。それは、面白そうな奴は一度スカウトしてみるというもの。
今までも、問題はありながらそれでやってきたが、今回ばかりは話が違う。
北上と大和は〝艦娘〟なのだ。
「軍から目付けられんで?!」
「いいじゃないか。というか、この二人は自分で艦娘だと言わなきゃ解らんさ」

「いやまあ、ウチも〝北上〟と〝大和〟ゆう艦娘は初めて聞きますけんど」
「お？　他にアシらが居(お)るがか？」
　指に煙草を挟んだ北上が、いまだに五十嵐達を威嚇している大和の頭を撫でながら、柳瀬に問うた。
「あ～、あんたらと同じ艦娘は居らんよ。ウチが言いたいんは、あんたら二人を聞いた事が無いゆう事や」
「ますます解らんわ。もうちっくと解りやすうに話しや」
「仕方ないね。柳瀬の話を簡単にすると、アタシらは数多くの艦娘は知ってるが、あんた達二人の名前を聞いたのは、今日が初めてって事さ」
　五十嵐と柳瀬の言葉に、北上は頭に巻いていたタオルを解き、頭を乱暴に掻いた。
　細かい事はどうにも苦手であり、二人が言っている事もよく理解出来ないが、今の自分達が奇妙な立場に立っている事は理解出来た。
　そしてそれらを、この世界で手に入れた情報と示し合わせれば、嫌でも答えは見えてくる。
「言うたらあれかや？　誰っちゃあ聞いた事の無い、見た事の無い、アシらを欲しがる連中が居るがやな？」
　北上の言葉に、彼女に抱き着いていた大和が身を固くした。
　大和は、北上が眠っている間も情報を集めていた。その中には、艦娘を集めるだけ集めて使い捨てる人間が居るというものもあり、大和達は人間を信用出来なくなっている。
　その人間が、自分達を聞いた事の無い珍しい艦娘だと言った。それが何を意味するのか、解らない大和達ではなかった。
「落ち着き、大和」
「でも、母さん」
「こいたらが何ぞする気やったら、もうしちゅうわ」
　煙草を灰皿に押し付け、北上が紫煙を吐き捨てる。
「まあ、こっからする気やとしても、アシが全員はりまわすだけよ」
　言うと、五十嵐が笑みを深め柳瀬が上着に手を入れる。

北上が新しい煙草に火を点ければ、背後に置いていた艤装を妖精三人が動かし、大和がそのベルトを北上に渡した。
「出来るのかい？」
五十嵐が笑みを浮かべたまま、細巻き煙草を口に噛む。
「出来る出来んやないわ、やるがじゃ。アシらが生きるのを邪魔する奴等は、残らずはりまわす」
五十嵐が俯き、紫煙が空中を漂う。
次第に、その体が揺れ始め、くぐもった笑い声が聞こえてくる。
北上がその笑い声に怪訝な顔をすれば、上着に手を入れていた柳瀬が溜め息を吐いた。
「あ～、北上はん？」
「なんな？」
「家は軍と取り引きする事はありますけど、軍とべったりいうわけやないんで、そこら辺は安心しといてや」
「あァ？」
「まあ、あれですわ。ウチんとこの船長、こうなったら梃子でもうごかへんのです」
柳瀬が指差す五十嵐はまだ笑っていたが、勢いよく顔を跳ね上げ、北上達に改めて高らかに言った。
「いいじゃないか！　生きるのを邪魔する奴等はぶっ飛ばす！　その生き方、アタシは大好きさ！」
「お、おう？」
「じゃあ、改めてだ。あんたら、アタシの船で働かないか？　対偶は応相談、なんだったら読み書き算盤をそこの嬢ちゃんに教えてやる」
「え？」
大和達が呆気に取られると、柳瀬が外に声を飛ばす。
「入野さん〝脚付き〟準備、船帰るで」
「あいよ」
額の広くなった中年男が、気の抜けた返事を返す。
「おい、アシはまだ・・・！」
「ここに居たって、何時かは軍に追われる。だったら、アタシらと来な

よ。あんたらみたいな面白い奴等を、軍にくれてやるのは惜しい」
それに
「生きるんだろう？　なら、あんたらだけじゃなく、アタシらとも生きてみないかい？」
五十嵐が義腕ではない右手を差し出す。
北上と五十嵐を、大和と妖精三人が交互に見る。北上は一度目を伏せ、半分程残った煙草を一息に吸いきり、濃密は紫煙を大量に吐いた。
そして、据わった三白眼で五十嵐を見据え、その手を取った。
「酒と煙草と金に飯、出し渋ったら容赦せん。あと、大和に読み書き算盤をちゃんと教ええや。何処に出いても恥かかんばあにの」
「任せな。それじゃ、アタシ五十嵐勇奈（いさな）率いる〝五十嵐水運〟へようこそだ」
この日、この世界で、後の世に名を残す二人が出会った。
それが何を意味するのか、今はまだ解らない。

七日目　乗船

「しかし、えらく素直に着いてきたな？」
「おん？」
　大和にしがみつかれている北上に、声が掛かった。
「いや、な。俺達人間を信用してないんだろ？　なのに、よく暴れもせずに着いてきたなってな」
　声の主は、六脚が特徴的な車輌〝脚付き〟の助手席から、半ば身を乗り出し、〝脚付き〟上面装甲に座る北上達に話し掛けていた。
　男は広くなり始めた額を後ろに撫で上げ、北上達の返事を待つが、一向に返事が返ってくる気配が無い。
　男がそれについて、何かやってしまったかと目をやると、眉間に皺を寄せた北上が首を傾げていた。
「おまん、誰ぜ？」
　北上が問い返すと、男は笑いながら額を叩く。小気味良い音が響き、男は北上をもう一度見る。
「悪い悪い、俺は入野。五十嵐水運で甲板長をやってる。一応、家じゃ古株だ」
「ほうかよ、アシは北上よ」
「聞いてる。で、そっちの嬢ちゃんだが」
　入野が北上の背中に隠れる大和に目をやると、大和は北上の艤装に隠れた。艤装からは、点検していたジロが工具を振り回して威嚇している。
　入野はその様子に苦笑する。
「嫌われたなあ。ま、あれだけ追われれば当然か」
「あ？　アシの娘追い回したがか？」
「家の若い連中がな。〝棄て町〟に子供が居るってな。嬢ちゃんを思っての事だ。あまり言ってやらんでくれ、は無理か？」
「・・・しゃあない、煙草寄越し。後、菓子、上等なやつの。それでチャラにしちゃらあや」
「煙草は、しんせいだがいいか？」

「かまん」
「菓子は船に着いたらな。確か、上物のチョコレートが積み荷にあった筈だからよ」
入野が煙草の箱を北上に投げ渡す。中身の半分程減ったそれを、手の中で軽く振れば、フィルターの無い両口煙草が一本飛び出す。
北上は煙草を歯で噛み、火を点ける。
「かぁーっ、舌にくるのうし」
「母さん、煙草臭い」
「おお、済まんのう。ま、我慢し」
「むぅ・・・」
むくれる大和の頭を撫でていると、風に潮の匂いが混じりだした。
天気は快晴、実に気分の良い日和だ。
「見えてきたな。あれが、俺達の船だ」
入野が指し示す先、少し離れた沖に大型の貨物船が停泊していた。
「名前は？」
「〝宗谷〟、なんでも大昔にあった幸運艦の名前なんだと」
北上がいつもより香りの強い紫煙を吐いていると、先頭車輛が大型のボートに乗り込んでいくのが見えた。
「あれで船に行くがか？」
「そうだ。この〝脚付き〟は水陸両用なんだが、今回は水上用のセッティングじゃないんでな」
入野が細かく説明をする。北上が見る洋上に浮かぶ船は、遠目から見ても北上の知識にある貨物船より、幾分大きかった。
「よし、降りてくれ。ボートに乗るぞ」
「あいあいっと」
大和を伴って〝脚付き〟から降りると、大和は船員達から身を隠す様にして、また北上の後ろに隠れる。
嫌悪は無いが、警戒が続く。
その事に、若い船員達は苦笑するしかなく、中には手を合わせて頭を下げる者も居た。
「お前ら、船に帰ったら詫びに上等な菓子持って、嬢ちゃんに謝れよ。

あ、勿論自腹な」
「うげ！　給料日前なのに・・・」
「あんな子供追い回した馬鹿が悪い」
　北上はその様子を見ながら、ボートに乗り込み若い船員に拳骨を落としていた入野に言った。
「そう言うたら、えらく素直に着いてきたち、聞いてきたのう？」
「おお、そうだった。で、なんでだ？」
　入野の言葉に、北上は短くなった煙草を指で弾き、海に捨て、据わり目ではっきりと言った。
「信用はしちゃあせん。けんど、信用しちゃってもえいかもしれんと思うたき、着いてきただけよ」
「そうかい。んじゃ、ご期待に応えないとな」
「信用出来んち分かったら、船底ぶち破ってでも出ていくきにゃあ」
「それは勘弁してくれ」
　入野が言うと、他の船員達も揃って頭を縦に振る。
　北上達とは違い、彼らは人間。水上を歩けない。
　なので、北上が言う通りに船底に穴を開けられると、海に沈むか、今乗っているボートで宛の無い旅をする事になる。
　実際は、開けられたら塞げばいいのだが、この北上は塞ぎようの無い大穴を開けそうだった。
「ま、船長が船で待ってる。込み入った話は、それからでも遅くないさ」
　煙草を口に挟んだ入野が苦笑混じりに言えば、ボートを影が覆い尽くす。
「遅いぞ入野！」
「勘弁してくれよ、船長」
　大型貨物船〝宗谷〟後部のハッチが開き、北上達が乗るボートが搬入されていく。
　〝脚付き〟が次々に降りれば、次に北上が降りる。そして、その先には義腕を付け替えた五十嵐が待ち構えていた。
「さっきぶり、どうだい、私の船は？」

「デカイのう」
「そうだろうそうだろう！」
機嫌良さげに頷く五十嵐、一頻り笑い満足したのか、北上に一つの長方形の包みを手渡す。
「約束の煙草だ。洋モクだが、いいかい？」
「わかばがえいけんど、まあええわ」
「なら、よし」
手を打ち鳴らし、五十嵐の声が船内に響く。
「あんた達、今日から新しい奴が入る！　艦娘の北上と大和、そして妖精の三人だ！　後で自己紹介も兼ねて、歓迎会をやるよ！」
「まだ入るち決めちゃあせんぞ」
「いいじゃないか、気分だよ」
北上が言えば五十嵐が笑う。大和達はまだ警戒して、北上から離れないが、僅かずつ船員達に顔を見せる様になっていた。
「歓迎会は食堂でやる。柳瀬、北上達を部屋に案内してやんな」
「はいはい、ほんなら皆さんこっちです」
柳瀬が手招きして、北上を先導して船内を進む。
貨物船という事もあり、船内通路は基本狭いが、人とすれ違うくらいには余裕があった。
「いや～、家の船長強引やろ？」
「まあ、の」
「女だてらに、運び屋の長。中々居らんよ？　あんな変わり者」
猫の様な細い目を更に細めて、格納庫を含む作業区画を抜けたのを確認、居住区となっている船内中央区へと歩みを進めていく。
「変わり者かや？」
「そうやで。ウチみたいな行き場の無いもん拾って、読み書き算盤叩き込んで、帳簿任せる人やで。変わり者も変わり者や」
けんどな。
「見捨てるとか、使い捨てるとか、そういう事は絶対せん人や。そこだけは信用したってや」
柳瀬が言い、真剣な目を北上達に向ける。

人間だから信用出来ない。そういう判断で見るのだけはやめろ。そう言われている気がした。
「まあ、それは仕事してからやの」
「それもそやねっと、着いた。ここがあんたらの部屋や」
柳瀬が示す扉のネームプレートにはなにも刻まれてなく、内装も二段ベッドと簡素な机が一つとロッカーのみ。
必要最低限の家具が揃った部屋、北上が背負ったままの艤装を下ろすと、妖精三人が飛び出る。
「必要なもんは後から自分でって事や。あ、嬢ちゃんの勉強道具は後で揃えて渡すよって、歓迎会の時に」
ほな、また後で。柳瀬がそう言い残し、部屋の扉をゆっくりと閉じる。
扉が閉じ、足音が遠ざかってから、カズが口を開いた。
『北上さん、信用するです?』
「あれじゃの、今はじゃ。なんぞあったら、アシが暴れて逃げたらえいわ」
「母さん、怪我したらやだよ」
「はっ、任しちょけ。アシが喧嘩で負けるかよ」
大和達四人が見詰める中、北上は大欠伸を一つし、歓迎会までの間、眠るかどうかを考えた。

七日目　縁会

賑わいを見せる食堂の中央にて、白の泡の層を浮かべた琥珀色の液体を満たしたジョッキを傾ける女が居た。
女は、己の顔以上のジョッキを飲み干すと、酒精の熱を勢いよく吐き出した。
「アシの勝ちじゃのう」
「北上の二十人抜き！　次！　次居ないか!?」
次の挑戦者を求める声に、新たな挑戦者が手を上げ、並々と満たされたジョッキを掴む。
「そろそろ、限界じゃねえのか？」
「んあ？　ハンデでも欲しいがか？」
「・・・上等っ！」
額に青筋を浮かべた男がジョッキを干せば、北上もひといきにジョッキを干す。
二度三度四度、それを繰り返し繰り返し、北上が酒精のゲップが出す時、男がテーブルに突っ伏し、北上の二十一人抜きが宣言される。
「さて、酒の肴は、と」
新たなジョッキを片手に、北上がテーブルに並ぶ皿の中から選んだものは、狐色に揚がった小粒。
それを箸で摘まみ一口に噛めば、衣の軽い歯応えと濃厚な貝の旨味が溢れる。北上は即座にジョッキに口をつけ、麦酒を喉に流し込み、満足げな吐息を吐き出す。
「カキフライ、えいのう」
続けて一粒、タルタルソースに着けて噛む。タルタルソース独特の酸味がまた良いと、麦酒を煽る。
「大和！　大和、こっち来（き）、おまん牡蠣食う事ないろ？」
娘の名を呼べば、物陰に隠れていた大和が、妖精三人を乗せた頭を出す。
船員達から避けつつ、北上の側に来ると、小皿に分けられたカキフライを見る。

「かき？」
「牡蠣、貝よ」
「貝って、あの岩場に居た固いの？」
「おうおう、あのつぶ貝とは違うけんど、この牡蠣も貝よ」
大和が首を傾げながら、カキフライをフォークでつつく。不思議なものを見る様にして、カキフライを暫く眺め北上を再度見上げる。
「かき、固くないの？」
「殻無いきの。貝も中身まで固（かと）うないわや」
北上の言葉に、フォークを挿してカキフライを口に運ぶ。二度三度噛んで、北上を見る。カキフライを見る。
交互に見ると、小皿に乗っていたカキフライを瞬く間に平らげた。
「気に入ったかや？」
「ん、ん！」
「ほれ、おんしらも食い」
『『『ヒャッホー』』』
北上に対する返事もそこそこに、一心不乱な様子でカキフライを頬張る。
その様子に船員達が微笑むが、それに気付いた大和はまた北上の影に隠れる。
「かっははは！　まだ恥ずいかや」
「やってるね」
「船長」
半目で周囲を威嚇する大和達に笑っていると、義腕で酒瓶を幾つか纏めて掴んだ五十嵐が、入野と柳瀬を伴い現れた。
五十嵐は酒瓶を北上の前に置くと杯を二つ、一つを北上に手渡す。
「呑もうや」
「おう」
柳瀬が杯に酒を満たし、二人同時に杯を干した。
傍らにあった干し肉を噛む。呑む。
塩気を流し込む。鼻から酒精の混じった息を吐き出す。
「北上、あんたの初仕事だが、まだ少し先になる」

「さよか」
「あとね、荒事になる、かもしれない」
その言葉に杯を傾け、一気に呑み干す。
不安げに見詰める大和の頭を撫で、カキフライの隣に盛られていたエビフライをソースに着けて、大和の口に放り込む。
「おう、すまんけんどよ。そこの刺身盛っちゃってくれや。サビ抜きぞ」
「なんだ、嬢ちゃん。エビフライ食った事無いのかい？」
「アシの娘は無い無い尽くし。やき、これからよ」
軽い調子で笑う北上に、五十嵐を含めた船員達が苦い顔をする。
まだ警戒しているが、目の前で北上に隠れて刺身を頬張る大和は子供で、しかし牡蠣が貝であり、食べられるという事も知らなかった。
これが人間の親子なら、北上の不足を責める事になるだろうが、この二人は違う。人間ではなく艦娘、話に聞けば血の繋がりは無く、目覚めた小島で出会ったという。
人間の道理が通じない血の繋がらない親子、自分達も脛に傷がある者ばかり、何か言える口は無い。
「嬢ちゃん、大和だったか？　甘いのは好きか？」
「・・・カンパンの缶詰の氷砂糖は好き」
「なら、調度いい。入野」
「はいよ」
しかし、船員達が黙っていると、五十嵐が入野に何かの包みを持ってこさせた。
黒い包装紙に包まれた正方形の薄めの箱を、入野は長身を屈めて大和に目線を合わせて渡す。
「ほい、約束のチョコレートだ」
「ちょこれーと？」
「開けてみな」
首を傾げる大和が入野に促されるまま、おそるおそる包装紙を破く。
黒い包装紙の中には黒い箱があり、その蓋を取ると茶色の小さな板

が、十二個規則的に並んでいた。
「・・・食べ物？」
「ああ、食い物だ。甘いぞ」
大和が茶色のそれを、警戒しながら口に運び、一口噛んだ瞬間、目を見開き入野と箱を、北上と次に手に取ったチョコレートを交互に見る。
「どういたぜ？」
北上が笑みを作って問えば、
「甘いよ！　中からトロッて！　スゴいよ！」
「ほうかほうか」
纏まらない言葉で、北上に味を伝えようとする。
北上と五十嵐はくつくつと笑い、船員達も顔見合わせ笑う。
その様子に、また警戒して隠れようとした大和だったが、北上に襟首を摘まれ、立ち上がった入野の前に出される。
一体何なのかと、大和と妖精三人が北上を見ると、北上は得心がいったと手を打った。
「そういうたら、おんしはこういうの初めてやったにゃあ」
「なに？」
「ええかや？　こういう風に、誰ぞに物貰うたら、礼を言わないかんがぞ」
ほれ、と大和の小さな背中を軽く押し、入野の前に出す。
箱と入野、背後で杯を傾ける北上を見て、大和はぽつりと口を開く。
「・・・・・ありがとう」
「ま、嬢ちゃん驚かせた詫びだしな。あんまり気にすんな」
入野が笑いながら、大和を撫でようとすると、瞬時に北上の影に隠れて威嚇する。
どうやら、まだそこまでは警戒を解いてはいないようだ。
「入野さん、顔厳ついよって」
「お前なら良かったか？　柳瀬」
「はいはい、そこまで。今後の予定だよ」
笑っていた五十嵐が手を打ち、その音に船員達が注目する。

「さっき言った通り、次の仕事までは少し余裕がある。だから、先に補給と船の整備を済ませる。つまりは休みさ」
「休みかよ？」
「そう、休みさ。だけど、あんた達は覚えてもらう事があるから、休みとは言えないかもね」
　まあ当然かと、北上が納得していると、柳瀬が一枚の紙とペンを差し出す。
「取り敢えずの契約書ですわな」
「取り敢えずかや？」
「まあ、お二人がこれからどうするか分からへんし、取り敢えずのですわ」
　北上がそれにサインしていると、思い出した様に五十嵐が口を開いた。
「あ、そうだ。補給利用して、あんたの艤装を見てもらうか」
「誰にぜ？」
「家の機関長にさ」
『北上さんの』
『艤装は』
『私達が見るです』
　椅子で組んだ北上の足に飛び乗った三人が、五十嵐にそう宣言する。
　その様子に、五十嵐は感心した様に声を出した。
「ほお、このちっこいのに、よくあんな複雑そうなもんを。しかしまあ、あんた達の仕事を取りはしないさ。だが、顔見せはしといてくれ」
『何故です？』
「家の機関長は、船から〝脚付き〟まで、宗谷に積んである全部の機械を見てる。・・・もしもがあった時の保険さ」
　まあ
「『もしも』なんざ、起こさせる気はないけどね。荒事がある仕事だ、保険は多い方が良い」
「そらそうじゃ」

『あまり』
『納得は出来ないけど』
『従ってはやるです』
大和含め警戒心強く、五十嵐の提案に了承する。
五十嵐は苦笑を酒と共に呑み下し、北上達に向き直る。
「荒事だのなんだの、下心が無いなんて口が裂けても言えないけどね。アタシはあんた達を雇いたい」
「そら、次の仕事次第よにゃ」
「そうだね」
二人揃って杯を呑み干し、テーブルに打ち付ける様にして置く。快音が食堂に響き渡り、それが静まった頃、柳瀬が新しい酒瓶の封を開ける。
「明日も早いんやし、ここらで最後にしとき」
「新しいの開けて言う台詞じゃあないね」
「これ一本でやめとき、言う話やったけど、呑まんの？」
「まさか、呑むに決まっちゅうわ」
北上が杯を差し出し、五十嵐もそれに続いた。

十日目　補給と

「なぁにやってやがる?!　小娘!」
晴天直下の青い海に、嗄れた怒声が鳴り響く。
白地に油汚れの黒を斑に染め付けたツナギを着た老人が、低い水柱へ紙で作ったメガホンを向ける。
「テメェ、何度言ったら解りやがんだ?!　あァ?!」
ボートから怒声を飛ばせば、海面に空気の泡が幾つも浮かんでは割れる。
次第に泡が勢いを増し、一本の腕が海面から飛び出し老人が乗るボートの縁を掴む。
そして、浮かび上がった人物は〝海面に立つ〟と、垂れてきた前髪を、含んだ海水と共に後ろへ掻き上げる。
「やっかましいわ!　人が馴れんもん使いゆうに、横からギャンギャン騒ぎよって!」
「儂の作品を使う奴が、細けえこと言うな!」
「やったら説明せえや!　大体なんなあれ?!　何が悲しゅうて、アシが海で独楽みたいに回らないかんがな?!」
北上は上着のポケットを探り、煙草の箱を取り出すが、中までしっかりと湿気ており、しかもビニールフィルムが海水の排水を拒んでいる。
北上はこめかみの辺りに太い血管を浮かせると、海水漬けの煙草を海面に叩き付けた。
「はぁ、ほれ」
「おう、で?　幸蔵爺(こうぞう)、これはなんながな?」
北上は幸蔵から受け取った煙草を吹かしながら、己の両腰横に取り付けられた、縦長の楕円状の機具を指差す。
その機具の最下部は、四角く切り取られた様になっており、突き出した翼状のパーツに挟まれ、噴出口の様になっていた。
「勇奈(いさな)からな、オメエから艦娘っぽさを少しでも減らせねえかって言われてな。ガス燃料式推進器を取っつけてみた」

「馬鹿かおんしゃあ！」
北上が叫び、背に背負った艤装から水浸しの妖精達が飛び出す。
『こ、この人間、この野郎！』
『なんてもの、いきなり取っつけてる?!』
『死ぬかと思った！』
「左右の出力バランスが悪かったからな。馬鹿力の北上が面白い様に振り回されたんだ。中心から少し外れたお前ら凄かったろうな」
『この人間、反省の色がねえ！』
妖精達が工具片手に叫べば、ボートの縁に片肘をついた幸蔵が、悪びれもせず艤装内の予測を口にし、紫煙を吐き出す。
サブがスパナを振り回して抗議をするが、今はそれよりも、
「いいのか？　浸水してんだろ？」
海中に沈んだ北上の艤装から、海水を掻き出すのが先だ。
『この人間！』
『後で覚えてやがれ！』
「へいへい、覚えとくから、お前らも推進器のレポート忘れるなよ」
幸蔵が手で追い払う仕草をしていると、艤装下部の排水弁が開き、内部に貯まった海水が排出されていく。
だが、他の細かい部分にも海水は貯まっているらしく、妖精達がバケツを使って海水を海に戻していく。
「しかし、北上よ」
「なんな？」
「オメエさんも変わった奴だな。儂が知る限りだと、艦娘一人に憑いてる妖精は一人だけだってのに、オメエは喧しいのが三人。どうなってんだ？」
「アシが知るかや」
過去に軍に所属していて、艦娘の艤装整備に関わっていた事もあった幸蔵。彼が知る限りではあるが、艦娘一人に憑いてる妖精は一人だけであり、幸蔵の言う通りなら三人も妖精が憑いてる北上はおかしいのだ。
そして、それを言えば、

「あの嬢ちゃんもだ。艦娘だってのに艤装は無し、妖精も憑いてねえ」
「そら、建造やらで生まれた連中の話やろ？　アシらは建造されちゃあせんし」
「建造されずに生まれた艦娘なんざ聞いた事ねえよ」
「そらアシらよ」
　どうでもよさそうに、北上は煙草を右手に嵌めた海水に濡れた手袋で揉み消す。
　僅かに熱が伝わってくるが、海水を多量に含んだ手袋はその熱をすぐに冷却する。
「目が覚めたら見ず知らずの小島に居て、訳も分からず母親に、か」
「文句あるがか？」
「文句もなにも、謎が多すぎて文句のつけようがねえよ」
「さよか」
　幸蔵が腕時計を見ると同時に、アラームが鳴り響く。
　北上がボートに乗り込み、艤装を下ろす。幸蔵はそれを確認すると、ボートのエンジンを掛けて、その海域から離れる。
「不便やにゃあ」
「仕方ねえよ、民間が艦娘雇ってるなんざ、面倒だからな」
「やけど、他にも居るがやろ？」
「まあな。軍から逃げ出した奴、鎮守府も信用出来なかった奴、捨て駒にされても生き残ってはぐれた奴。数は多くないが、そんな話は数えたらキリがねえ」
「世知辛いもんじゃのうし」
　二人が乗るボートは岩場を抜けて、大型船舶が停泊する港へと近付いていく。軍艦めいた船や、旅客船の様な豪奢な船もある。
　それらから少し離れた港に、巨大な貨物船が停まっていた。
　クレーンが忙しなく動き、貨物のコンテナを船内へと積み込み、人々が慌ただしく動いている。
「補給も、もう少しで済みそうだな」
「やっぱ、ようけ物が要るにゃあ」
「家みたいな大所帯になりゃあな。水だけでも、とんでもない量にな

る」
　ボートはその貨物船を避け、すぐ側にある船着き場へと向かい、十分に近付いた時、ロープを持った北上がボートを降りて、陸へと引き寄せる。
「よいっと」
「小型でも人と荷物乗せたボートを、片腕で軽くか」
　ボラードへロープを巻き付け、ボートを固定し終えた北上が、背から艤装を降ろし上着を絞っていると、船の方が何やら騒がしくなっていた。
「ん？　おい、どうした？」
「幸蔵爺、あらなにしゆうがな？」
「なにって、なにやってんだあいつら」
　幸蔵が煙草の火を揉み消しながら見る先には、五十嵐水運が所有する装甲貨物船〝宗谷〟の前で、言い争っている船員達が居た。
「なにしてんだ？　お前ら」
「あ、幸蔵爺。いやさ、こいつらが急に値上げするって言い出してさ」
「値上げぇ？」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「それはまた、いきなりな話だねぇ」
　〝宗谷〟船長室にて、片腕義腕の女が書類を片手に溜め息を吐く。
　本当にいきなりな話だと、書類から視線を外し正面を見る。
「・・・五十嵐さんには、本当に世話になっている。だが、今のままだとこっちが干上がっちまう」
　禿頭の中年が申し訳なさそうに言えば、五十嵐の隣に座っていた柳瀬が帳簿と睨み合う。
「あかんわ、船長」
「ダメかい？　出来る限りは、なんとかしてやりたいんだが」

「まるっきり無理やないけど、港湾組合の希望額は無理や。家が破綻するわ」
「そうか。幾ら払える？」
五十嵐が問うと、
「よくて三割増し、今後の事を考えると二割が限界ですわな」
「という事だ、組合長」
「感謝します」
「言うても、毎回は無理やで？　今回みたいに余裕があるならなんとかなんねん。けど、次回もとは限らんわ」
「それでも助かる。正直、組合員達の給料も怪しかった」
本当に感謝する。組合長が再度頭を下げる。
五十嵐は、書類にサインしつつぼやいた。
「しかし、海賊か。厄介な話だね」
まったくと、二人が同意し、柳瀬が支払いを済ませる為に金庫へ向かう。
五十嵐と組合長の間のテーブルには、海賊による被害額が記載された書類が数枚あった。

十五日目　授業と

静かな一室で、紙に鉛筆を走らせる音が聞こえる。
規則的に続くそれは、止まったり走りを繰り返し、鉛筆を手繰る手が止まる。
「出来た！」
「んじゃ、採点だな」
頬骨の張った厳つい顔立ちの大男が、少女の差し出す紙を受け取り、赤いインクのペンを走らせる。
その音が暫く続き、男が紙を大和に手渡す。
「六十点だな。計算ミスと字の書き間違いがまだある」
「うぅ・・・」
「しかし、すぐにここまで来たんだ。あとは簡単だ」
大男、入野の言う通り、大和の学習速度は凄まじいものがあった。
五十嵐、柳瀬、入野、北上、今はこの四人が代わる代わる受け持ちで教えている。と言っても、北上は感覚で教えてくるので、柳瀬辺りがフォローに入る。
「まあ、ミスの大半は、ここで計算式を省いているとこだな。まだ、基本中の基本なんだから、無理にやらなくてもいいんだがな」
「・・・でも、柳瀬さん出来るもん」
「ははは、そりゃそうだ。五十嵐水運の帳簿は、あいつが握ってるからな。算盤片手に凄まれたら、船長でも黙るしかねえ」
小気味良く笑う入野、出会って二週間以上となり、大和達は入野や柳瀬達の事は信用し始めていた。
「そうなんだ」
「そうそう、算盤と帳簿持たせて、何がどれだけ要って、どれだけ使うかを計算させたら世界一さ」
入野の授業は基本座学だ。陸で仕入れた参考書やドリルを用いて行う。
甲板長という、忙しい立場でもある入野が、大和の授業を受け持っているのには、理由がある。

一つは、五十嵐水運で唯一大学を卒業しているという事。
「さて、直しが済んだら、外に出てみるか。理科の授業で実験してなかったしな」
もう一つは、体験主義であるという事。
これは入野もそうだが、五十嵐達にも当てはまる。
「なにするの？」
「ペットボトルが余ってるからな。ペットボトルロケット、高く飛んだ方が勝ちな」
ニヤリと笑う入野、彼の授業はこういった子供が好きそうな交えて進めていく。
柳瀬は完全に座学オンリーだが、軽く仕入れに関わらせたり、五十嵐に至っては操船を教えている。
この間、船の航路がいきなりズレたので、何事かと操舵室に向かうと、五十嵐が北上と大笑いしながら、大和と一緒に宗谷の舵を取っていた。
何故、初めはボートとかにしなかったのかと、柳瀬達が問い詰めたが、五十嵐は入野以上に体験主義である為、
『やらせてみないと、判らんだろう？』
と言って、聞かない。
突っ込もうにも、柳瀬が自分の仕事に大和を関わらせているのは、五十嵐も知っていて、
『お前だってやってるんだ。アタシがやっちゃいけない道理はないね』
と、返してくる。
紛れもない事実なので、取り合えずはボートや小型挺の操舵を、五十嵐が教えるという事になった。
「私が勝つよ」
「さあて、そいつはどうかな？」
大量のペットボトルをビニール袋に詰め、二人が甲板に出ると、港の方が何やら騒がしい。
何かあったのかと、入野がそちらに目をやると、人だかりの中で、柳

瀬が苦い顔で帳簿と睨み合いをしているのが見えた。
「お、どうしたよ？」
「ああ、入野さん。どうしたもこうしたもあらへんわ。あれ」
柳瀬が指差す先は、五十嵐水運に割り当てられた区画であり、外海からは見えない位置にある。
そこから、実に聞き覚えのある怒声が二つ聞こえてきた。
「だあから！　どうして外す?!　目ぇ付いてんのか?!」
「やっかましいわ！　それっぱぁ、言うがやったら、当てれるもん作れや！」
入野が納得して、柳瀬に向き直る。
「北上と幸蔵爺か」
「ああ・・・　今は割りと財布はカツカツやのに、あんな新しいの作って・・・」
五十嵐水運の財布事情に余裕は無い。正直な話、補給を終えた今、港に停泊せずに出港し、次の仕事をするべきなのだ。
だが、今現在は五十嵐水運、絶賛休暇中である。
「諦めろ、今回の航路は」
「解ってますわ。・・・はあ～、海賊早よ沈まんやろか」
柳瀬が盛大に溜め息を吐いて、帳簿の角でこめかみを押す。猫の様に細い目は、誰が見ても不機嫌に歪められており、今の柳瀬に関われば小言の山が口から飛び出てくるだろう。
「かいぞく？」
「ん？　おお、大和ちゃんやんか。海賊ゆうんは、海の厄介者の事や」
「深海棲艦は違うの？」
「ある意味、あれより厄介者やな」
北上が大暴れしているのを横に見ながら、柳瀬と入野は過去の記憶を遡る。
一番古いものは二人違うが、最近ではつい二ヶ月前、〝夜明けの水平線〟を名乗る者達の襲撃を受けた。
被害は少く、怪我人のみで死者は出なかったが、あれで少くない損害が出ている。

「船長が〝シオマネキ〟で、敵船の横っ腹に風穴開けなかったら、ヤバかったかもな」
「けど、あれで〝シオマネキ〟も〝脚付き〟も壊れて、修理費がバカにならんわ」
「お金、無いの？」
　大和の心配そうな声に、柳瀬は苦笑と共に返す。
「まったくやないけど、今が続くと陸で干上がる」
「在庫を切り売りしたり、人員の貸し出しで食い繋いでいる訳だな」
「そうなんだ」
「ま、心配する必要はねえさ。こんな事は、何回もあった」
　薄くなり始めた髪を撫で付けて、入野が笑う。
　柳瀬も同意と笑えば、港から破砕音が響く。
「んっがぁー！　殴った方が早いやいか！」
「せっかく作った銃の意味がねえだろうが！」
　どうやら、北上が射撃用の的を殴って粉砕したようだ。
　幸蔵の怒声と北上の咆哮が港に響き、柳瀬が溜め息を吐いた。
「的もタダやないのに・・・」
「諦めろ」
「こんな所に居たのかい」
　柳瀬が何度目か分からない溜め息を吐いた時、左の袖を風に靡かせた五十嵐が、煙草を燻らし甲板に現れた。
「船長、義腕は？」
「肩が凝ったから、置いてきた。それより、仕事だよ」
「早いな。海賊は討伐されたんで？」
　入野が問えば、五十嵐は紫煙を吐いて太い笑みを見せる。
「どうやら連中、河岸を変えたみたいだね。動くなら、今だ」
「確証は無いんで？」
「連中に確証なんざ、意味無いさ。〝キタ〟！」
　五十嵐が港に向けて叫べば、同じ様に返事があった。
「なんな、船長！」
「初仕事だ！」

「ようようかや！」
「明日の朝には港を出るよ！　あんた達も準備しときな！」
　五十嵐の言葉に、船員達がにわかに忙しくなる。
「ねえねえ、船長」
「お？　どうしたよ、嬢ちゃん」
「なんで、母さんの事、〝キタ〟って呼ぶの？」
　五十嵐だけが、北上の事を〝キタ〟と呼ぶ。
　それは何故かと、大和に問われ、五十嵐はニヤリと笑う。
「キタと嬢ちゃんは艦娘、だったらバレない様にしないとね」
「船長、本当は？」
　苦笑いの柳瀬が問えば
「思いの外、語感が良かったからさ」
　笑って、そう返した。

二十日目

月夜の洋上にて浮かぶ鉄塊、その頂上にて、青く厚い布地のポンチョに覆われて、小さな機材を弄り、それを覗き込む姿があった。
「北上、どうだ？」
「六分儀、初めて使うたが、よう出来た道具じゃの」
単眼鏡に分度器に似た部品が取り付けられた機材を、海に向けて、空いた手で紙に数値を書き込んでいく。
「ほれ、替わってみ」
「ほいよ」
北上が入野に六分儀を渡し、代わりに入野が使っていた双眼鏡を受け取る。
星空の下、装甲貨物船〝宗谷〟頂上見張り台にて、北上と入野は見張りと天測を行っていた。
「ん、初心者にしちゃ上等だ」
六分儀と紙を見比べ、入野が頷く。
「ほうかよ」
「ああ、中々、親子揃って器用なもんだ」
入野が白い息を吐き、北上に笑みを向ける。
夜空は透き通り、雲一つ無い星空が広がっている。
「しかし、冷えるのうし」
「深海の連中が現れて幾年、奴等のせいかは知らんが、気温が地球単位で下がってる」
季節は初秋、冷えるとしても息が白くなる事は無い。
しかし、二人が吐く息は白い。陸地では感じなかったが、洋上では寒気を強く感じる。
「だが、今日程冷えるのは珍しい。何も無けりゃいいんだが」
「冷えると、なんかあるがか？」
双眼鏡を覗きながら、北上が問うと、入野は六分儀を片付けながら答えた。
「生まれて四十と少し、船に乗る様になって三十年近い。こう、季節外

れに冷える夜は不吉の前触れなんだよなぁ」
「大ベテランの経験則かや」
「まあ、何も無い事もあるんだがな」
　そう言い、入野が煙草を差し出す。
　北上はそれを受け取ると、白くなった息とは違う白を吐き出す。
「禁煙やなかったか？」
「躊躇いなくいっといて、よく言う。ま、大ベテランから新人への、深夜当直手当とでもしといてくれ」
　入野も白を吐き出すと、もう一つ双眼鏡をポンチョから取り出し、北上とは違う方角を眺める。
「んで、北上。六分儀なんつう、アナログを使う理由だが、俺の趣味じゃないぞ」
「正直言うてみい、趣味〝も〟あるじゃろ？」
「まあな、俺がアナログ人間でそういうのが好きだってのも、大いにある。だが、一番の理由は違う」
　入野が煙草の吸い口を親指で擦る様に弾き、燃え尽きた灰を落とす。朱色の火口が露になり、紫煙が帯を引いて夜風に消えていく。
「深海棲艦が現れてから、レーダーやらＧ．Ｐ．Ｓやらの性能が子供の玩具みたいに低下した。どうやら、連中が出してる電磁波みたいなもんが関係してるらしい」
「そいで、今のご時世で帆船でもないに、天測かよ」
「詳しい事は俺も知らんがな。お陰さまで、連中は海から好き放題に現れて、軍艦が人の姿でゲリラだ。ガキの頃に見たが、ありゃ悪夢だったぜ」
　吸い口しか残っていない煙草を携帯灰皿に押し付け、腰のベルトに取り付けてあるポーチから、棒状の携帯食料を取り出しかじる。
「艦娘ってのは、連中の気配が解るって話を聞くが、お前さんはどうなんだ？」
「さあのう。アシは艦娘言われたち、いまいちしっくりきちゃあせんしのう。あ、そういうたら、あの町で嫌な気配感じたけんど、それかの？」

「俺は艦娘に詳しくないから、それをお前に聞かれても、なんともな」
北上が入野から携帯灰皿を受け取り、煙草を押し込む。
口には既に携帯食料が放り込まれており、乾燥した味気の無い甘味が広がる。
「こういう食いもんは、不味いち決まっちゅうがやろうか」
「まあ、旨いもんじゃねえわな」
モソモソと、喉が渇く携帯食料を咀嚼し飲み込む。
今は台所事情に余裕が無いので、出来る限り質素倹約に務めている最中だ。
「だがこれも、この仕事が終わるまでだ」
「荷を港に卸いたら、かよ?」
「そうだな。それまで、何も無い事を祈ろうや」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「嬢ちゃんよ、無理して起きてなくてもいいだが?」
「かあさん、もどってくるまでおきる」
他の船室より、比較的物が多い船長室で、大和は船を漕いでいた。
何時もなら、既に寝ている時間、ほぼ寝ながら大和は北上の帰りを待っていた。
『大和さん』
『北上さんは深夜当直です』
『早く寝るです』
「チビ達も寝ないのかい?」
『たりめーです』
『まだ、信用した訳じゃ』
『ねえですから』
妖精三人組からの言葉に、五十嵐は苦笑しながらも仕方ないと納得もしている。

五十嵐水運の船員に、艦娘に対して悪感情を持っている者は奇跡的に居ないが、世間はそうではない。
この業界に居れば、嫌でも目にするものがある。
「艦娘の扱いに関しちゃ、アタシもねえ」
艦娘の扱いは悪くはないが良くはない。一般的な認識はこうだ。
だが、事実は違う。五十嵐が知る限りではあるが、まともな運用をしているのは、英雄と呼ばれる者が居る鎮守府か、良識のある指導者が率いる一部の団体だけだ。
他は酷いものだ。使い捨ての消耗品に近い。身寄りの無い少女や居場所の無い女を、二束三文で買い集め、初代提督とやらが遺した技術で艦娘に仕立てる。
艦娘化と艤装のアシストにより、争いとは無関係だったやんごとなきご令嬢でも、ちょっとした講習に近い訓練を短期間施すだけで、一端の兵士になる。
今のご時世、戸籍の無い少女や身売りをして日銭を稼ぐ女、それすらやりたくない〝元〟ご令嬢は、掃いて捨てる程居る。
早い話、下手な男の兵士を、一から育てるよりコストが安いのだ。
安く育ち、人間より頑丈で長持ちする。そして、軍やそういった団体は男社会であり、何故か艦娘は見目麗しい少女や女しか居ない。
その艦娘の元になった者の出自もあり、男尊女卑の仕組みの元、兵士ではなく〝愛玩動物〟として扱われる事も多い。
「胸糞悪い話だが、アタシらはそこまで落ちちゃいない」
五十嵐が聞いた話だが、幼い少年ならば、艦娘化処置が行えるらしい。業の深い話だ。
そして、考え過ぎかもしれないが、その業の深い技術を生み出したという、初代提督とやらは薄気味悪くて仕方がない。
突如表舞台に現れ、深海棲艦を都合よく研究し、これまた都合よく〝艦娘技術〟を生み出し、自分は行方を眩ます。
まるで、世界がこうなると、初めから解っていたかのような手際のよさだ。
「チビ、あ～、ジロだったかい？」

『なんです?』
「そこの棚に毛布がある。嬢ちゃんに掛けといてやんな」
この世界で生きる者としては、いきなり現れた部外者が、いきなり自分達の理解の外にあるものを残して消えた。
そして、周りはその理解の外にあるものを、有り難がたく使っている。
「あとついでに、冷蔵庫にちょっとした菓子が入ってる。摘まむなら摘まみな」
三人組が顔を見合わせるのを見ながら、五十嵐は思案する。
自分は、二人の艦娘と三人の妖精を抱える団体の長だ。
北上の艦娘としての戦闘能力を、期待してスカウトしたのは事実だ。だが、北上にだけ頼る訳にはいかない。
北上が、話に聞く艦娘よりも強く頑丈だとしても、頼りきりでは限界がくる。
「何も無けれりゃいいんだがねぇ・・・」
不吉の前触れ、季節外れによく冷える夜に、五十嵐は呟いた。

二十三日目

この世界には、機動殻と呼ばれる兵器がある。
簡単に言ってしまえば、機械の鎧だ。
並の攻撃では傷付かぬ装甲、人間では到達出来ぬ力、それらを纏う事の出来る、人間が深海棲艦に対抗する為に生み出した技術の一つ。
それが機動殻である。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「荒れてきたね」
五十嵐が舵輪を取り、窓に打ち付ける雨粒を見ながら言った。
大型船である宗谷を揺らす程ではないが、窓に打ち付ける雨粒の勢いが増している。入野からの報告にもあったが、外洋で季節外れの冷え込みと悪天候。
恐らくだが、深海棲艦が近場に居る可能性が高い。
「柳瀬、キタはどうしてる?」
『今は、幸蔵爺と一緒に格納庫で装備点検やな。なんでも、新装備を作ったとか』
「はっ、出番が近いかもと伝えときな。お前は嬢ちゃんと船室に待機」
『はいはい』
無線を切り、左の義腕で舵輪を掴み、空いた右手で海図に印を付けていく。
「ナオ、以前の海図はどうだい?」
「以前は勢力圏外ですな。・・・連中の縄張りが広くなった、ですかね?」
「さあ、そりゃ解らん。だが、奴等が出てくる時は、大体前日に海が荒れる」
次第に波の揺れを感じながら、五十嵐は舵を面舵に切る。

目的の港まではそう遠くないが、この海では港に入る事は出来ない。
「停泊はしたくないし、回るとするか」
溜め息と共に、五十嵐は舵を回した。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

宗谷船内中央船室にて、柳瀬と大和が荷物の固定を行っていた。
船室の外もにわかに騒がしさが増しており、嵐が来るという事を否応なく伝えてくる。
「大和ちゃんは寝台に掴まっとき。いざ、なにか起きたら、船長は中の人間の事考えへんから」
「母さんは?」
「入野さんらと格納庫。嵐に紛れて、邪魔もんが来るかもしれへんから」
備え付けのテーブルをゴムロープで固定し、柳瀬は猫の様な細目を更に細めて、大和を見る。
――不安やろね――
柳瀬達が聞く限りではあるが、北上と大和達には己を支える背骨となるものが無いに等しい。
気付けば、人一人居ない小島に居て、訳も分からず駆け抜けてきた。
艦娘の事は柳瀬には解らない。だが、柳瀬が知る限り、艦娘は人間が成るものであって、何も無いところから湧いて出るものではない。
「ま、なんとかなるやろ」
呟き、天井を見上げれば、先程よりも強く証明が揺れていた。
今、自分達に出来る事は、この嵐が過ぎるのを待つだけだと、柳瀬は息を吐いた。
「嵐になるの?」
「せやなぁ。船長の予想より早いみたいや」

〃〃〃

後は何も起きん事を祈るだけだ」
入野が薄くなり始めた頭を掻く。
彼の背後には、見慣れた機械の蜘蛛に似た蟹が、脚部に足鰭の様なものを着けていた。
「あれで浮くがか？」
「今より荒れない内はな。これ以上荒れるなら、〝脚付き〟じゃ無理だ」
「だから言ったろ？　高くても、新型の〝アメンボ〟買った方がよかったてな」
「そりゃ、家の主計長（柳瀬）に言ってくれ」
入野が上層階を指差す。
「金勘定で柳瀬に勝てるかよ」
「結果出せば、頷くぜ？」
「結果出せればの」
北上が艤装を背負い、壁に掛けてあった装備の柄を掴む。
両手持ちの柄は太く、ちょっとやそっとでは歪みそうにない。
北上はそれを持ち上げると、見た目に反し軽量であるという事に気づき、幸蔵を見る。
「中身は空洞だが、仕込みがあってな。振れば解るさ」
「おん？」
北上が軽く振ると、装備の重心がズレた。
手の中で、柄が前に持っていかれる感覚に北上が握力を強める。
「横流しで手に入れた重巡級の装甲材で組んであるから、強度に関しちゃ問題無し。スイングの速度で威力が上がるからな。その馬鹿力でぶん回せ」
北上が肩にその金棒を担った時、格納庫にサイレンがけたたましく鳴り響いた。

〃〃〃

嵐の海、上下どころではなく揺れうねる海面を、暗色の鎧が駆けていた。
通常、人間が纏う鎧であるならば、足首がある筈のそれには、代わりに足首ではなく二股に分かれたフロートユニットがあった。
不規則にうねる海面を、スケートの様に滑り、赤いカメラアイが巨大な船影を捉える。
『獲物だ』
先頭を行く鎧が呟くと、後に続く者達が各々に得物を構える。
『嵐がひどくなる前に仕留める』
海面を駆ける鎧、機動殻に身を包み、宗谷に近付くのは、海賊の先見隊。
強襲し、貨物を強奪。あわよくば、船を強奪しよう。
宗谷に近付く海賊達は、装甲の下で下卑た笑みを浮かべ、波間に隠れる様にして、宗谷に接近し
「よう」
六脚の打撃を受けた。

二十三日目　始まり

丸い。

それが機動殻に対する〝脚付き〟乗員の第一印象だった。

通常、機動殻の装甲は傾斜装甲が採用されていて、海賊等が使用するそれは、大抵が軍等から払い下げられたものになる。

だが、主腕の打撃を避けた機動殻は全体的に丸い。仮に、払い下げられたものならば、改造を施していても、その装甲は箱の様な傾斜装甲からそう離れない筈。

ーー新型か？ーー

フットペダルとレバーを巧みに手繰り、六脚の〝脚付き〟を荒れた波間に立たせる。

丸い、曲面装甲を主とした機動殻。乗員の知る機動殻よりも、更に装甲を厚くしてあるのが見て解る。

新型ではない。短くない船員生活、機動殻を運んだ事も一度や二度ではない。

『これ以上荒れる前にケリつけるぞ』

『分かってるよ、甲板長』

無線から聞こえる入野の声に、威勢よく応答する。だが、嵐の海で〝脚付き〟が動ける範囲は狭い。

というより、〝脚付き〟自体が海上での運用を目的としていない。

〝脚付き〟は、海上よりも陸上。それも、市街地等の入り組んだ狭い立地で、六脚を用いた三次元機動を得意とする。

五十嵐水運が陸上が得意な〝脚付き〟を採用しているのは、単純に安く操作が容易であり、簡単な重機を操作出来れば、子供でも乗れるからだ。

クラッペから波の高さを確認し、前方の機動殻の装備を確認する。見たところ、銃器の類いは装備していなさそうだが、腰に提げた長方形の鉄板。そうとしか言い様の無いそれは、長辺の一辺の両端を残し柄とし、両端の短辺を分厚く、残る長辺を鋭く研いだ刃としていた。

暗色の機動殻が振り下ろすそれを避けながら、無線を開き入野を呼

び出す。
『甲板長、あれに見覚えは？』
『確か、水門についたフジツボやら錆やらをこそげ落とす、機動殻用の〝鉋〟だったな』
『威力は？』
『見ての通りだ』
波間を跳ねる様に滑り回避した一撃は、荒れた波を砕き飛沫を代わりに〝脚付き〟の装甲に叩き付ける。
〝脚付き〟の装甲は強固とは言い難い。機動殻の出力で、あの鉄塊を振るえば、〝脚付き〟は良くて大破、悪ければそのまま即死だ。
乗員は一定の距離を保ち、周囲を警戒する。
機動殻は鎧で、荒れ始めた海ではその波に隠れてしまう。ただでさえ、悪天候で視界が暗く、装甲も保護色となって解り辛い。
宗谷は大型艦で、ここは港前の内海が近い。母艦が何処に在るのかも不明。
船を回し続けても、いずれは追い詰められ、最悪は暗礁に座礁か、水門に激突するだろう。
『マズイぞ！』
『言われてもよ！　コイツ・・・！』
機動殻が鉋鎚を力任せに圧し込む様にして、〝脚付き〟の主腕を弾き飛ばす。
乗員も腕利きだが、機動殻の海賊も腕利き。
事態は拮抗しており、時間は残り少ない。
海賊も同じなのか、鉋鎚を振るう腕に焦りがある。
どうにかして、事態を開きたい。互いが互いに膠着した状態の中、怒声が嵐に響いた。
「かったいのう、われぇ！」
『なんだあれは?!』
人よりも遥かに重量のある機動殻が、海面を跳ね飛ぶ光景。それに仲間の海賊が驚愕の声をあげる。
『北上！　遅いぞ！』

「喧しい！　おんしらばあ、乗りもん乗りよって！　アシは歩きやぞ！」
北上が金棒を振り回し、体勢を立て直し復帰した機動殻と鍔競り合う。
だが、北上の動きが明らかにおかしい。
「ぬ？　うお！」
『北上?!』
鍔競り合いを嫌った機動殻が退くと、そのままの動きで前につんのめり、顔から海に突っ込みそうになる。
なんとか踏ん張り、海に沈むのは避けたが、反応が遅れ機動殻に押し込まれる。
『なんだお前、艦娘か？』
「蛙面が喋ったわ。中身は人かや」
『・・・殺す』
北上の言葉が海賊の何かに触れたのか、脚部推進機の出力を高め、武器の重量と機体の出力任せに北上を押し潰そうとする。
北上からしてみれば、機動殻の頭部装甲が蛙に見えただけで、中身の海賊の顔が見えたという訳ではない上に、突如殺意をみなぎらせて襲い掛かってきた危険人物に他ならない。
なので、北上は僅か一ヶ月足らずで学んだ、この世界での危険人物への対処法を実行した。
即ち、暴力（万国共通言語）で解決である。
「ぬう・・・・！」
『ちっ・・・・！』
圧し負けた機動殻が舌打ちを一つ漏らし、海面を滑り退くと、北上は海面を踏み締め、飛沫を散らし追撃を叩き込む。
『やはり、艦娘か！』
「見て解れや、ボケェ！」
海面に浮き滑る様に滑走する機動殻に対し、北上は海面を踏み締め、一歩一歩加速する様に滑走する。
そう、艦娘は海面を踏む。

二足だろうが六脚だろうが、歩行するものは面に立ち、面を踏まねば存分な力は発揮出来ない。
だが、今居るのは海面。普通は踏めず抜ける面だが、艦娘である北上は海面を踏める。
それはそのまま、艦の膂力を人型として振るえるという事になる。
荒波を踏み鳴らし、波涛を蹴散らす。海上に於ける力の権化、北上は本能からか、その力を存分に発揮していた。
『ちっ、時間だ。退くぞ！』
ぶつかり離れを繰り返し、その強固な装甲に損傷が増え始め、嵐を止み始めた時、海賊が撤退を始めるが、
「誰が逃がす言うたぁ！」
猛る北上が海面を蹴りつけ、一気に加速。追撃を加えようと金棒を振り抜く。
だが、北上の一撃は、突如うねった波に体勢を崩され、十分な威力は発揮出来ず、殿を勤めていた機動殻の鉋鎚を弾き飛ばすに留まった。
「ぬう、くそが！」
「北上、やめとけ」
弾き飛ばした鉋鎚を空中で掴み取り、海賊を追おうとするが、〝脚付き〟の搭乗口から身を乗り出した入野に制止され、金棒を肩に担う。
「連中、やけに手慣れてやがる」
「どういう事な？」
「海と港を繋ぐ水門、その近くの海域で襲ってきたつう事は、馬鹿か逃げ切れる自信がある奴だけだ」
入野が煙草を差し出し、北上が火を点ける。
既に雨足は止み、厚い雲にも穴が開き始めていた。
北上は紫煙を苛立たしげに吐き出し、金棒を艤装に追加したウェポンラックに引っ掛け、先程手に入れた鉋鎚を軽く振る。
「使いよいにゃあ。貰お」
「聞いてるか？」

「聞きゆう聞きゆう。ここらで吹っ掛けてくるがは、馬鹿で逃げ足の早い奴らだけながやろ」
「微妙に違うが、まあいいか」
言うと入野は、無線で待機していた他の〝脚付き〟に指示を出し、周囲を警戒しつつ宗谷へと戻っていく。
「んお？」
「どうした？　北上」
それに倣い、北上も宗谷に戻ろうと踵を返した時、何かの気配を感じ振り返るが、そこには嵐が過ぎた海しかない。
「なんもない」
首を左右に鳴らし、背後への警戒を強めながら、北上は宗谷へと戻っていった。

三十日目

風切り音を響かせ、北上が金棒を振り抜く。装甲貨物船〝宗谷〟甲板で、北上の剛力で振り抜かれた金棒は、内部の振り子の移動により、更に威力を増して、飛来物に打撃を浴びせる。

「かぁーっ、いかんのう！」

「いやいや、満墨ホームラン飛ばしといて、何言ってんだか」

「あっこ（あそこ）この岩場まで、飛ばすつもりやったがやけど、いかんにゃあ」

入野が古びたグローブを外し、薄くなり始めた頭を掻く。海賊の襲撃から数日、五十嵐水運は海岸と旧軍港を改造した港町に停泊している。

補給、船の整備、仕事の依頼と航路の設定、すぐには出港とはいかず、非番の者はこうして暇を持て余していた。

「暇じゃあ、町行って酒呑もうや」

「北上、今日は非番だが、一応は船に居ろよ」

「分かっちょらあや。しかし、何がどういて、軍がのう」

草臥れた煙草を口に挟み、紫煙を吐き出す。行儀悪く吐き出された煙は、僅かに吹いていた海風に巻かれて、千々に千切れて融けていく。

この町と町を守る水門は、軍が嘗て放棄し払い下げた施設を流用して作られている。そして、この町の住人はあまり軍人を好いてはいない。

「昨日も、何ぞやらかしよったがやろ？」

「ん？　ああ、調子に乗った軍人ってのは、始末におえねえな。若いのが、他の船の船員と殴り合いの喧嘩になったらしいな」

「かはは、アシも見たかったのう」

笑う北上が、金棒を肩に担ぐ。重い音を出しながら、己の肩を叩く。もし、北上がその場に居合わせたなら、間違いなく喧嘩に加わっていただろう。

約一ヶ月の付き合いで、はっきりとそれが解る。

「……しかし、この軍人嫌いの町で、何をしてんのかねえ」

「さあのう」

二人揃って、紫煙を吐き出す。自分達に町と施設を置いて、さっさと逃げた軍人。この町では、軍人は卑怯者と臆病者の代名詞となっている。

その軍人が、態々この町に来た理由。

「面倒事でなけりゃ、いいんだがな」

入野が呟き、短くなった煙草を煙缶に押し付ける。北上と大和の二人の艦娘を抱えている今、出来るだけ軍に関わる仕事は避けたい。

今より幾分下がるが、都市間の物資輸送でも、充分な収入源になる。柳瀬も苦い顔をしていたが、帳簿と睨み合いを続け、同意している。

「すまんの」

「何がだ？」

「アシらのせいで、稼ぎ減りそうながやろ」

何気無く発したのだろう。北上は入野を眇で見る。その目は、こちらの出方を窺っている獣の様だった。仮に、入野が対応を誤れば、北上は大和達を連れて、この船を飛び出すのだろう。

入野は煙草の箱を懐から取り出すと、軽く振り器用に二本の煙草を飛び出させる。そして、一本を己に、一本を北上に、火を点け紫煙を燻らせる。

「気にすんな。軍の仕事は一発はデカイが、一回で終わる事が多い。都市間輸送依頼なら、都市が交易を続ける限りは、依頼が続く」

「ほうかよ」

「それにな、お前は俺の部下で仲間だ。いいねぇ、艦娘の部下。こき使ってやるから覚悟しとけ」

入野がふざけた顔と声でそう言えば、北上は口の端を吊り上げ笑う。

「いたら、アシらはその分好きにしようかの」

「やってみな。つか、幸蔵爺がお前の艤装、弄くり倒してるがいいのか？」

「かまんろ。幸蔵爺もアホやないき」

笑う北上が、短くなった煙草を握り潰し、盛大に紫煙を吐き出した。

空は青く、〝宗谷〟から見える町の様子は、平和そのものだった。

〃〃〃

『これです』
サブが持ち上げるコードは、謎の端子に繋がるコードと同色で、幸蔵が端子側のコードを僅かに引くと、サブが持ち上げるコードにも動きがあった。
謎のコードはこの機関部に繋がっていた。
「おいおい、何だってこれに、誰も気付けなかったんだろうな？」
『意識してなかった、という話です』
『というか、このコード何処に繋がってるです？』
カズとジロの言葉に、サブは幸蔵を見ると、幸蔵もそれに頷く。艤装内での作業は三人、特にサブに一任してある。
この三人、カズは全体指揮、ジロは火器管制、サブは整備と、大体の役割が決まっている。
幸蔵はサブが掴み辿るコードの先を見ながら、端子を弄る。
分厚い作業用の手袋越しでも、はっきりと伝わる鋭さ。装備としてならともかく、背部接地面、生身である北上の背中に触れる部分に、これは有っていいものではない。
「どうだ？」
『サブ？』
『どうしたです？』
返事が無い。一体どうしたのかと、幸蔵が角度を変えて覗き込むと、件の有り得ない二つ目の動力炉の前で、サブが止まっていた。
『これってまさか……』
「お前ら、背面に蓋をするぞ。これはよくないもんだ」
謎の動力炉に繋がるコードを辿り、幸蔵は三つの端子を見る。端子は背部接地面の中央に、縦に真っ直ぐ配置されていた。
そしてその位置は、北上の背骨がある位置だった。

三十日目

軽快な音が響く。連続して弾かれるそれは、胡散臭い口調と共に、その役割を示している。
「では、願いましてはっと」
柳瀬が算盤を弾き、帳簿に並ぶ数字と睨み合い、手元の資料を確認をすると、椅子の背凭れに体を預けた。
「ふぅ、何とか黒字やぁ……」
五十嵐水運はいまだに出港出来ずにいた。
海賊の出没は一度収まり、一応の航路の安全は確保された。だが、出港許可は下りない。
海域に深海棲艦の出没と目撃証言があったのだ。
「しっかし、厳しい……」
そして、目撃証言のあった海域は、今回の航路だった。
軍による海域と港湾封鎖、まったく厄介な話だと、柳瀬は薄い代替珈琲に口を付けた。
「やっぱり、マズイわぁ……」
まだ柳瀬が幼かった頃、世界中からこの国にありとあらゆる物品に金品、文化が絶え間無く流入し、代替珈琲はその中では、妊婦や病人などの身体的に、理由がある者が飲むものだったという。
だが今となっては、国内の小売店や問屋、収集家が所有するまだ無事な品々を、一部の者が楽しめる。
「あーぁ、早いとこ海路が復活せんかな」
今現在、まだ機能している海路は少なく、その海路も何時機能しなくなるか分からない。
五十嵐水運が主とする海路も、こうも封鎖されては、何時完全封鎖されるか。この会社はまだこうして、黒字になれるだけの余裕がある。だが、他の零細と言える連中は、今頃金策に奔走しているだろう。
「干上がるで、これ」
今は町への人員の貸出と、船内余剰在庫の放出で、何とかなってはいるが、もう余剰在庫も少なく、人員の貸出でそこまでの稼ぎが出せ

る訳でもない。確実に貯金は減っている。
「封鎖を無視して突っ切る？　あかん、うちの戦力は〝脚付き〟と北上だけや。……機動殻の導入は無理やな。機殻士が居らんし、維持費もキツい」
機動殻は〝脚付き〟よりも精密で、その分整備に手間が掛かり、それを扱う機殻士も希少で、大概は軍人か傭兵だ。今の御時世、軍人が民間に出向する事は無いし、出向してくれば、そいつはロクデナシだ。傭兵も同じで、安い料金の連中は信用出来ず、高い連中は本当に高い。
その日暮らしの民間企業に、そんな連中を雇い入れ、養う余裕は存在しない。
「……もしもの時は、北上に気張ってもらうか」
軍用の払い下げ品の〝脚付き〟を改造した、五十嵐水運の機体相手に、艤装のサポート無しで張り合える。艦娘ならそうおかしくない事らしいが、艤装から推測する北上の、艦娘としての規格からは、はっきり言って異常らしい。
元は軍で艦娘のサポートもしていた、幸蔵の言によれば、北上の規格であろう軽巡洋艦娘には、そんな大出力を持ち合わせている艦娘は居ない。
ならば、北上は何者なのか。そして、娘と呼ぶ大和と本来なら、艦娘一人につき一人の筈である三人の妖精。
柳瀬は頭脳を巡らせる。
「一つ、北上と大和達は何も無い小島で目覚めた」
艦娘は軍が占有する専用の工廠でのみ建造される。これは〝初代〟と呼ばれる提督が残した技術を、軍が占有しているからだ。非合法に人間を艦娘化させる技術も有るには有るが、非常に不安定で、手術の成功率は三割以下と聞く。
艦娘は軍でのみ生まれる。故に、北上と大和は異質で異常だ。
「二つ、艦娘一人に妖精は一人」
艦娘がどの様にして生まれるのか、柳瀬は知らない。艦娘に関わっていた幸蔵もだ。
分かっているのは、妖精は艦娘を艦娘として、成り立たせるのに必

要不可欠だという事だ。
「なら、三人居るのは何故？」
特殊な装備には特殊な妖精が宿っているらしいが、あの三人は北上に宿っている。
その反面、大和には妖精が居ない。いや、あの三人がそうとも言えるかもしれない。北上に一人、大和に一人、ならあとの一人は？
そして、幸蔵達が見付けた艤装のコネクター。
北上に関しては、考えれば考える程に問題が湧いて出てくる。
「考えてもしゃあないか……」
下手に考えたところで、北上達を排斥するという選択肢は無い。この五十嵐水運は、五十嵐と入野や他の古参以外は、ほぼ全員が脛に傷があったり、居場所も帰る場所も無い者達ばかりだ。柳瀬だって、五十嵐に拾われなければ、あのごみ溜めで野垂れ死ぬか、誰ぞに買われて多少長生きしてから、ごみ溜めに捨てられ死ぬかしかなかった。
それを考えれば、北上達を受け入れる事は当たり前だった。
北上達が野垂れ死にそうかはともかく、奴等を放り出しても、関わった以上は何かしらで巻き込まれる。
そんな予感がある。
「ま、船長の事やし、なんとかするやろ」
柳瀬は冷めきった代替珈琲を飲み干し、
「……アカン、冷めたら飲めたもんやないでこれ……」
頭痛を堪える様に目を閉じ、カップを置いた。

〃〃〃

とする。
見上げる巨体は長く、鱗の様に重なり連なる甲殻は分厚く、その頑健さを視覚で伝えてくる。
「深海棲艦……、しかも蛇型か」
「えらいがか？」
「……知る訳ねえか。俺ら人間の戦線を食い破るのは、大体がアレだ。何せ、堅くてデカくて強いは強いっつう、自然の絶対法則そのままが、力任せに突っ込んでくる訳だからな」
「そりゃ堪らんにゃあ」
「この間の九州もそれでやられたらしいな」
北上達が乗る装甲貨物船〝宗谷〟と同等の巨体が、船渠に納まり、隔壁が閉じていく。
入野はそれを見届け、草臥れた煙草を、口の端に噛む北上の肩を叩く。
「戻るぞ。嫌な予感がしやがる」
「かまんがか？」
「買い出しなら済んでる。今は船へ急ぐぞ」
「へいへい」
恐らく、あの深海棲艦を、町の船渠に運び込んだのは軍だろう。何が目的かは知らないが、この軍嫌いの町によくも運び込めたものだ。
町も困窮の気配が見え始めているし、軍からの何かしら援助の話があったのかもしれない。
「最悪、強行出港も視野に入れんとな」
嘗て、蛇型に潰された町が幾つもあった。何重にも固めた戦線も、あの巨体には意味が無かった。
ただ蹂躙される。入野の故郷もその一つだった。

三十二日目

「で、状況は？」

広くはない船室だが、その中でもある程度の広さのある、船長室に数人が集まっていた。

その中の一人、五十嵐が集まっている役職者に問うた。

「……あまり芳しくはありませんな。どいつもこいつも、出港停められて、揉め事が立て続けでさ」

伸びた黒髪を後ろに束ねた男、操舵手のナオが、頭を掻きながら、自ら調べた内容を報告する。

「海路は封鎖、町は軍人が集まり、住民は警戒。……それに甲板長と北上が見たっていう、大型深海棲艦の噂が広まって、一触即発ってとこですな」

町の状況は芳しくない。元々、軍との折り合いが悪い町に、軍が深海棲艦を持ち込み、何やら企んでいる。

この様な噂が立ち、軍人が集まり出して、その噂に殊更の信憑性を与えている。何時、何かが起きてもおかしくない。

爆発寸前の危険物、それが今の町の状況だった。

「で、どうすらあよ？　出れんがやったら、このまま干物になるつもりかや？」

北上の言う通り、このままではじわじわと消耗し、金が尽きる。そうなれば、船を動かせなくなり詰む。北上の言う干物になるという事が、現実に起きかねない。

「干物になるつもりは無いで。せやけど、実際動けへんのや」

「艦娘に機動殻、後なんか知らんが、妙にデカイもんを積み込んだ軍艦が待機してる」

「なんぜ、えらい構えちゅうじゃか」

「……そういう訳だ。下手に動けば不穏分子、動かなくても干上がる。頭の痛い話だ」

五十嵐が生身の腕で、頭を掻く。どちらにしても、最悪の事態は免れない。初動の遅れが、ここにきて響いた。

最善なら、入野と北上が大型深海棲艦を目撃した日に、多少無理矢理にでも出港すべきだった。だが、五十嵐水運は人員の貸し出し、余剰物資の転売で、今現在生計を立てている。人員の契約期間、売約済み物資の運搬、それらの整理を終えたのが今日。

そして、この二日間で、海路の封鎖は完了し、港には軍艦と物資が流入している。町には軍人が屯し、様変わりした様子の港町で、大型の装甲貨物船が出港を強行すれば、直ぐ様捕縛される。

そして、このまま停泊していても、収入源を食い潰し、遠くない日に五十嵐水運は限界になり、瓦解する。

「今、現状で切り詰めて、保てて三日。それ以上やと、貯蓄切り崩して、それでも余裕を保てんのは、長く見積もって一ヶ月足らずや」

五十嵐水運の経理を預かる、柳瀬の言葉に全員が、各々に金策を練る。だが、五十嵐や入野の様に、口利きが出来るコネクションも、年季も持ってはいない。

北上に至っては、人中に出れば何が起きるか、予想も出来ない。

八方塞がり、あまりにあまりな軍の所業に、異議を申し立てた同業者も居たらしいが、門前払いを受けて、まともに取り合ってすらもらえなかったという。

「一体全体、なんだってんだろうねぇ」

五十嵐の呟きに、答えを返せる者は無く、五十嵐が咥わえる煙草の灰だけが、灰皿に積もる。

何か狙いでもなければ、こんな真似はしない筈。だが、そのある筈の狙いが解らない。民衆からの反感を得ても、何の利益も無く、町に大型深海棲艦なぞ運び込めば、下手をすれば暴動に繋がる。

現に、大型深海棲艦の噂が流れ、町には不穏な空気が充満し、入り込んでくる軍人が、それに拍車を掛けている。

「まったく、何が狙いなんだか……」

「んあ？　狙いち、簡単な話やか」

「は？」

扱いが雑なのか、何故か大体草臥れて、折れ曲がった煙草を口の端に咥わえた北上が、何の事も無いように簡単に告げた。

その発言に、全員が北上を怪訝な目で見るが、当の本人は何処吹く風と、草臥れた煙草を吹かして言った。
「自慢したいがやろ」
「キタ、自慢ってのは何をだい？」
「やから、あれよ。あのデカブツ潰いたがは、自分らやって」
「……いや待て、しかし、ええ……」
有り得ない事、ではない。深海棲艦へ決定打を叩き込めるのは、北上達艦娘であり、機動殻や脚付きではいまいち決定打に欠ける事がある。装備や戦法では、その限りではないのだが、だがやはり、それでも艦娘には劣ってしまう。
だから、軍人が軍人だけで、艦娘ですら苦戦が当然の大型深海棲艦、それを討ってみせたというのなら、北上の言う事も納得出来る。
「その運び込みよったゆうデカモノが、それやないがかや？」
「だとすると、軍の新兵器か？」
「そんな話、聞いた事ないで」
「なら、極秘裏。内陸の試験場か？」
「下手すりゃ、取り引きレートが変わるねぇ」
仮に、それがそうなら取り引きのレートが、変わる可能性が出てくる。今、軍相手に取り引きされている主な資財は、艦娘の艤装に使われる鋼材や燃料、弾薬等の資財。食料品や僅かな嗜好品が主となる。他、機動殻や脚付き等の資財も扱うが、そちらは軍が主な流通を握っている。
「で、どうすらあよ」
「どうするって？」
「船出すがか、出さんがか。どうするがな？」
北上は停滞を是としない。そんな節が希にある。悩んで足を止めるより、一歩でも先へ進もうとする。五十嵐も、それが悪いとは思わない。寧ろ、解り易くて好感がある。
だが、五十嵐勇奈個人としてはそうでも、五十嵐水運を率いる、船長五十嵐勇奈としては違う。
数十人の船員を抱える代表、その身としては、その判断は捨てるべ

きものとなる。
「キタ、一日。一日だ。今日一日待ちな」
「明日にゃ答えが出るかよ」
「ま、早めに出さなきゃ、アタシらは全員ここで詰みだ」
　そうはさせんさ。
　五十嵐はそう言い、煙草を灰皿に押し付けた。
「あんた達、兎に角準備はしておきな。出るにしろ、出ないにしろ、船を動かす事には変わりないんだからね」
「アシはどうするがな」
「キタは幸蔵爺と待機、念の為艤装も準備しておきな。柳瀬、大和の嬢ちゃんと船室に引っ込んどきな」
「あいよー、大和ちゃん最近、料理やらに興味あるみたいやから、そこら辺揃えときますわな」
「頼んだわ。アシの娘の事」
　慌ただしく動く中、北上は柳瀬にそう言うと、短くなった煙草を握り潰し、幸蔵が籠る下層区画へと向かった。
　その背を見送り、柳瀬は五十嵐を見た。
「船長、当たりはあるんで？」
「今から確証を得に行くのさ」
　上着を肩に羽織り、半分を傷に覆われた顔で、ニヤリと笑った。
「軍が喋りますんで？」
「軍じゃなくても、噂程度から話を固めてる奴ってのは居るもんさ」
　義腕ではない生身の手のひらが、柳瀬の前に差し出された。柳瀬はそれに嘆息する。
　そう、これは小遣いを寄越せと、無言の要求だ。
「……因みに、幾ら要りますのん？」
「幾ら出せんだい？」
「……四枚」
「もう一桁増やせないかい？」
「無茶言わんでや。……十枚、これ以上は無理や」
「ならそれで、後はアタシが出すさ」

五十嵐はそう言って、生身の手で柳瀬の頭を撫でた。
算盤も読み書きも、今の主計の技術の基礎は全て、五十嵐が叩き込んだものだ。
それが随分と、頼もしくなった。
「アタシら家だ。なんとかするさ」
俯く柳瀬に、そう言った。

四十日目

晴天、そう呼ぶしかない。そんな天気の下、薄い紫の煙が、一筋の柱となって潮風に揺らめいていた。
「で、どうするがな？」
「動くさ」
紫煙の柱が二筋に増え、吹いてきた潮風に揺らいでは、頼り無さげに消えていく。
ゆっくりとした時間が流れる中で、どうにも気怠い雰囲気で、頭にタオルを巻いた若草色の作業着が、片方の袖を空にしたスーツに問うた。
「もう今日で八日目やが」
「潮目が悪い」
「昨日は風が悪かったにゃあ」
「もう外に出て、次の港の筈だったんだがなぁ……」
五十嵐と北上、二人が揃って溜め息代わりの紫煙を吐き出す。晴天の空に煙が踊って消えていく。
船はいまだに出港出来ず、ただ時間だけが過ぎていく。
「んで、あれらは何がしたいがな？」
「知らんよ。自称人道主義者共（最悪の狂人）の事なんか」
五十嵐が残り少なくなった煙草を握り潰し、傍にあった灰皿に放り捨てる。まだ僅かに火種が燻っていたが、それもすぐに消えた。
甲板から見える景色は、争乱の気配を感じさせない。だが、そこには確かに火種というには、あまりに大きすぎるものが燻っていた。
「艦娘保護団体のう」
「〝夜明けの水平線〟、よくあるイカれ共さ」
艦娘の解放と権利を主張し、我らの隣人を軍の奴隷から解放せよと、そう息巻き、その為には保護対象である艦娘の、武力行使による犠牲すら厭わない、傍迷惑で本末転倒な集団。
つい先日、五十嵐水運も彼奴らの被害に遭っていた。
「アタシらみたいな連中が、艦娘を雇ってるのは、公然の秘密ってやつ

だからね」
「しょう迷惑な話やにゃ」
　まったくだと、短くなった煙草を揉み消し、三本目の煙草に火を点ける。吸い過ぎだと、自制しようとも思ったが、船も出せず、やれる事は書類を確認し、判を押すだけ。一応、他の同業者と集まり、話を聞いたりして、現状の打開案を考えてはいるが、現状では妙案は出てこない。
「兎に角、連中が居なくならん事には、軍も警戒を解かん」
「何がしたいがな？」
「それなんだよ……」
　空になった煙草の箱を逆さにして、そこから零れ落ちる塵を眺める北上に、五十嵐は自分の煙草を指で弾いて、箱から差し出す。
「すまんにゃあ」
「そりゃ、こっちの台詞だ。アタシらが、もう少し気を回せば、あんたらを町に出させてやれるんだがね……」
「気にしなや。アシも大和も、あんな気味の悪い連中が彷徨きゆう町、歩きとうないわにゃ」
　先日、大和を連れて入野達と町に出た所、件の〝夜明けの水平線〟と出会してしまった。体格の大きい入野と、もう一人の船員の背後に隠されて、その時は事なきを得たが、あの時見た連中の気味の悪さは忘れない。
「艦娘を解放せよち、アシらは何処に捕まっちゅうがな」
「アタシらにかねぇ」
「出て行こう思うたら、何時やち行けるにか？」
「そうだね。あんた達は行こうと思えば、何処にだって行けるんだ」
　潮風に揺れる紫煙が、頼りなくに風に巻かれていく。
「アタシらは、こうして船でしか生きられない。陸での息の仕方なんて、昔に忘れちまったよ」
「迷いゆうがかや？」
　北上が紫煙と共に吐いた言葉に、五十嵐は溜め息で答えた。五十嵐水運の現状は、正直逼迫している。

限りある在庫を食い潰し、柳瀬が遣り繰りして積み立てた貯金を切り崩して、どうにか今の状況を保っている。
猶予は無い。進むか降りるか、それを決める限界が今だ。
そして、五十嵐はそれを迷っている。
「……キタ、アタシらは自慢じゃないが、脛に傷のある連中ばかりだ」
「そうじゃろな」
「この宗谷を降りたら、真っ当に生きられないのが大半だ。……柳瀬や入野達は違うがな」
「幸蔵爺もじゃろ」
「まあ、そうだね。だけど、解るだろ？」
「まあの」
真っ当に生きられるだろう入野や柳瀬達でも、根掘り葉掘りと調べられれば、下手をすればお縄を頂戴する事だって有り得る。
それが他の連中なら、ほぼ間違いなく捕まるか、野垂れ死ぬかだ。
「キタ、こんな事をあんたに聞くのは間違ってる。だけど、教えてくれ。アタシはどうしたらいい」
「んなもん、アシは知らんちや。船長、おまんの好きにしたらえいが」
「好きに、か」
「ほうよ。この船はおまんの船ながやき、おまんの好いた様にしたらえいがよ」
北上が煙草を握り潰し、五十嵐に向き直る。
「アシらはどうするか知らんが、他はついて来らあよ」
「……そうかい。なら、あんたらにもついて来てもらうよ」
「しゃんとしよったら、ついて行っちゃらあ」
五十嵐の空になった袖が、風に揺れる。
どうにも弱っていた様だ。まったくもって、らしくない。
五十嵐は一度大きく息を吐くと、口に力強い笑みを浮かべた。
「じゃあ、渡りをつけて、さっさと仕事といこうか」
「やる気やにゃ」
「ああ、そうさ。アタシ、五十嵐勇奈は止まらない。あんたら、全員を連れて、誰も見たことの無い場所へ行ってやる」

「そら、どんなとこぜ？」
「それを見に行くのさ」
あるのかどうかすら、それすら定かではない。だがそれでも、五十嵐は見たい。
「そして、そこであんた達と酒呑んで、馬鹿話でもして笑いたい」
「えいにゃあ、それ」
北上も笑みを浮かべ、五十嵐も笑みを深くする。
人間と艦娘、似ているが違う。まったく違う生き物だが、この二人にはそんな事は関係無かった。
「アシも見たいにゃあ」
「当然、あんたも嬢ちゃんも饅頭共もさ……！」
さて、仕事だ。五十嵐が立ち上がり、空の袖をはためかせる。船も俄に騒がしさが出てきた。
北上も船室に予備の煙草を取りに行くかと、腰を上げた時、扉から大和が何やら急いだ様子で顔を出した。
「母さん！　船長！」
「んあ？　どういたよ」
「町が変だって！」
「変？」
大和の言葉に、二人が顔を見合せた。
その瞬間、轟音が鳴り響き、衝撃が船を揺らした。
「何だ……!?」
五十嵐がよろめき、北上に支えられながら見たものは、内側から爆ぜた様に捲れ上がり、煌々と燃え上がる町の船渠から、ゆっくりと鎌首をもたげた黒の巨体だった。

四十日目　黒蛇

慌ただしく、などと生ぬるいと、けたたましく警報が町に鳴り響く。その警報を合図に、港の船渠から黒の巨体が鎌首をもたげる。
　どこか気怠い気配を感じさせる動きで、大型深海棲艦は周囲を見渡し、己と周囲を煌々と染める炎の中、その咆哮をあげた。
「さて、アレをどうする？」
「アホ言わんと、さっさと逃げるが勝ちよ」
「いや、確かにそうなんだが」
　北上の言葉に、五十嵐は頷く。確かに、あれに関わる必要は無い。だが、あれは港の中に居て、港から出るには、あれの前を通らなくてはならない。
　つまり、
「今動けば的だ。……策を練るよ」
「息を潜めて待つ。これしか無いのでは？」
　装舵手のナオの発案は、確かに現実的だ。だがそれは、今の現実でなければという話だ。
「……入野に繋ぎな」
　無線のチャンネルを合わせ、マイクに呼び掛ければ、様々に入り交じった音と共に、〝脚付き〟に乗り、町の様子見に出ていた入野の声が聞こえてくる。
『船長、正直に言うぜ。こいつは早いとこ、逃げた方がいい』
「どんな状況だい？」
『今はまだ、何とか落ち着いてはいる。だけど、あとちょっと何かあったら、一気に大混乱だな』
「そうかい。他の船の動きはどうだい？」
『似た様なもんだな。〝脚付き〟がちらほら見えるし、中には機動殻まで居やがる』
　他の船も、今の状況を見定めている最中で、深海棲艦の動き次第では、蹴落とし合いも有り得る。
「入野、適当なとこで戻ってきな」

『あいよ』
黒い巨体は、まだ動きを見せない。今、しかないのだろう。だが、下手に動けば最悪の事態になる。
五十嵐は焼け始めた空を、窓から見上げた。この朱が過ぎれば、やって来るのは何も写さない黒だ。
つまりは、連中の時間になる。時間、金、人員、環境、もう限界が来ていて、目の前には終わりがある。
なら、それを受け入れるのか。答えは否だ。
「船長、どうするんや？」
「分かって聞いてるな」
「そらそうや。ウチらは、五十嵐水運や」
船長に、ウチらはついてくで。
柳瀬がそう言い、周囲が頷く。どうせ、こんな世界では当たり前に終わりが来る。なら、自分達の納得のいくやり方で生きて、その終わりに逆らう。
五十嵐ならそれを選んで、自分達を率いて進む。
「……やるしかないか」
このまま終わるなら、それに逆らう。賭けになる。それも、負ける事が前提の賭けだ。
「機関部、聞こえてるかい」
『ああ、聞こえてる』
「これから、無茶をする。だから」
『アシらは船を降りろかや？』
「……キタ。ああ、そうだ。言ってしまえば、あんた達には無理にアタシらに付き合う義理は無い」
『そらなあ、アシらはただついてきただけやし。好きにさいてもらうわ』
「そうだね」
『幸蔵爺、アシの装備出し』
「キタ？」
『言うたじゃろ、アシはアシの好いた様にするち』

「だがね」
　それでも、北上や大和、妖精達は自分達に付き合う必要は無いのだ。
五十嵐がそう言おうとした時、マイクの向こう側から重い音と共に、北上の言葉が聞こえた。
『それにの、おまん言うたじゃか。見た事ないもん見せちゃるち。アシらにゃ、見せてくれんがか？』
「それは……」
『アシもにゃ、見たいがよ。おまんらと』
　笑って、馬鹿話がしたい。確かにそう言った。
『やからよ、見せとうせ。誰っちゃあ見た事ないゆうがを』
「……なら、その為にはどうしたらいい？」
『簡単な事よや。言うてくれたらえい。アシに、そうせえと』
「やれと、あんたにあれをやれと、言えってのかい」
『おう、そうじゃ』
「キタ、あんたは強い。アタシらなんかより、ずっとね」
『おん、そうじゃ』
　見えないが、胸を張って言っている。そう確信出来る程度には、信頼も信用もしている。一年足らずの短い期間で、そこまで信じるのは、少しおかしいかもしれない。
　だが、どうにも北上には警戒心を抱けなかった。
「キタ、やれるのかい？　あのデカブツを、アタシよりも小さいあんたが、やれるのかい？」
　北上は、正直小さい。あまり身長の高くない、五十嵐よりも北上の身長は低い。
　その小さな体で、今日まで更に小さな者達を連れて、この慈悲の欠片も失せた世界で、生き延びてきた。
　そんなデタラメな奴に、言う言葉ではないかもしれない。だが、言わねばならない言葉でもあった。
『船長、アシはの、おまんがやれ言うたら、どんな奴やち、やっちゃらあや』
　その言葉に対する返しは、予想の範疇から出ず、五十嵐は一度目を

閉じて、そして息を深く吸い込んだ。
これから口に出す言葉は、きっとこれからの自分達を呪う言葉になる。
――ああ、そうだね――
自分達は止まれない。止まれば死ぬ。なら、例え自分達を呪う事になっても、この言葉は自分が口にしなくてはならない。
入野でも、柳瀬でも、他の誰でもなく、五十嵐勇奈が言わなくてはならない。
「……キタ、やっちまえ。あんたとアタシ、アタシらの邪魔する奴は、全部叩き潰しちまえ。そして、生きて帰って来な。……頼む」
『おん、分かった。頼まれたわ』
「全員、聞こえてるね。アタシらはこれから、好きにやる。ああ、港を出るよ。……準備しな！」
その言葉に、北上は主作動機となる煙突缶を背負う。幸蔵と妖精組が、何やら弄っていた様だが、特にこれといった変化は無い。強いて言うなら、背中に当たる部分が増強されているところか。
「幸蔵爺、そっちはどうな？」
「追加の装甲貼り付けて、中身の分銅もさらに重いやつに取り換えた。北上、振れるか？」
一回り太さを増した金棒の柄を掴む。カートに乗せられ運ばれてきたそれは、確かに重量を増していて、掴む手に存在を強く伝えてくる。
「ふんっ」
「やっぱ上がるか」
「他はあるがか？」
「お前が持ってた単装砲は、腰のハードポイントに係留出来る様にして、弾も散弾に替えて、ついでに榴弾もチビ達に持たせてある」
「使い分けえゆうことか」
「そういうこったな。鎚鉈は変わらず、鉋鎚は缶の左に、あとはとっておきのこれだ」
幸蔵が部下に持ってこさせたのは、一本の銛だった。

「俺らが使う杭打ち銛を改良して、……あー、簡単に言えば溶接のメタルジェットで、相手の装甲溶解させてから、仕込んだ炸薬を炸裂させて、銛を打ち込む様にした」
「えっずいのこさえたのうし。やけど、抜けるがか？」
相手の巨駆に、この銛はあまりに細く見えて、幸蔵が言う様な効果が出るとは思えない。
怪訝そうに銛を睨む北上に、幸蔵は近くの空き箱を引き寄せ、腰を下ろした。
「いいか。連中はデタラメだが、生物である事に変わりはねえ。いくら硬く分厚い装甲に覆われていても、動作する以上は、どっかしら柔くなってる」
「そこにぶちこんだらえいゆう話か」
そうだと、幸蔵が頷く。既に〝宗谷〟の機関は動き出している。音は外にも伝わっていて、幾人かは動きを見せ始めているだろう。
作動機の右側にマウントさせ、肩と首を回す北上の様子を眺める。
「大和の嬢ちゃんはどうしてる」
「柳瀬の部屋におる。あれか入野、船長やったら信用出来らあな」
「儂は抜きか」
「おまん、こっから出てこんやか」
確かにと笑う。一頻り笑い、そろそろ船が動き始めるかという時に、〝宗谷〟の後部ハッチが開いた。
〝脚付き〟で偵察に出ていた入野が戻ってきた。
彼は、蹴破る様に〝脚付き〟の搭乗口を開き、開口一番に叫んだ。
「ロ、ロボットだ、軍がロボット出したぞ……!!」
「おん？」
返事は、口を横にした北上の声だけだった。

四十日目　破鎧

それを何と呼べばいいのか。
分厚い外殻である装甲に覆われ、僅かに覗く筋肉は、鈍く光を返す合金と、滑る様に撓む樹脂、ワイヤーで構成されていた。
「何ぜ、あら？」
北上が縒れた煙草を口の端に咥え、船体後部の搬出入ハッチから、件の町の方角を見ると、視認出来るだけで三体の巨人の姿があった。
圧倒的な力と重さを伝える足音を響かせながら、見上げる程の蛇体へ向かう姿に、人々の反応は様々であった。
「見ろよ、幸蔵爺。ロボットだ、ロボット！」
「ああ？　んなもん、有るわけねえだろうが。……マジじゃねえか!!」
「二足歩行巨大ロボだあっ……！」
北上は、何かでかいのが動いている程度だったが、宗谷乗組員の男衆は違った。
目測で凡そ１０ｍ程の、機械の鎧武者。それが動きを見せる度に、口々に何やら語り合っていた。
「ほらな?!　ほらな！　言ったじゃねえか！」
「いや、でもな。二足歩行は脚部の強度が……、歩いてるな。どういう強度計算して、何を使いやがった？」
「なあなあ、あれビーム出すかな？」
「いや、それより変形合体だろ」
「飛べよ」
「それだ！」
沸き立つ男衆を他所に、金棒を肩に担ぐ北上は興味無さげに、煙草を吹かして灰皿に吸殻を押し付けていた。
「のう、幸蔵爺。あら、なんぜ？」
「何って聞かれてもな……。軍の新兵器ってやつだろうよ」
「はー、そらまたえらいもん造ったにゃあ」
北上が次の煙草に火を点け、紫煙を吐き出す。技術者である幸蔵や、その他男衆はあの機械の鎧武者の、一挙手一投足に沸き立ってい

るが、北上はあれをどう潰すかの算段を立てていた。
簡単に楽をするなら、あの大型深海棲艦とやりあっている内に、隙を見て一撃叩き込めばいいだろうし、そうでなくてもやりあっている間に逃げればいい。
「船長、聞こえゆうか？」
『聞こえてる。どうした？』
「船、出したがましやぞ」
『そうもいかん。水門が開いてない』
「開いちゃあせんつか？」
『ああ、港湾局に連絡を入れても、まるで返事が無い』
「返事が無い、のう？」
『ああ、つまりそういう事だ』
この騒ぎで水門が開かず、ついでとばかりに責任者である港湾局からも返事が無いとすれば、それはつまりそういう事だ。
「幸蔵爺」
「お、やるか？」
「ここで待ちよったち、全員ちゃがまるだけよや」
恐らく、軍は国内の海上流通を支配したいが為に、五十嵐達を始めとした武装船団をここで潰すつもりなのだろう。
その為に、あの大型深海棲艦を街に運び入れ、自分達の新型兵器で力の差を見せ付ける。
計画としては、理に叶ったものだ。しかし、軍は相手を見誤っている。
「船長！」
『おう』
北上が伝声管に声を張り上げ、五十嵐が返事を返す。
軍の誤算は一つ、五十嵐達武装船団は軍を飛び抜けた脅威として見ていない。
軍はあくまでも取引相手の一つでしかなく、取引相手としての義理を捨てるなら、こちらもそれ相応の態度で相手するまでだ。
『総員出港準備！　貨物固定を再確認しながらタービン回せ！』

「でもよ、船長。水門はどうすんだよ？」
「んなもんしよい事ちや。あのデカブツ突っ込まいたらえい」
「いや、キタ。どうやって突っ込ませんだよ？」
「んなもん、あれらにやらいたらえいわな」
北上が指差すのは、今まさに深海棲艦に躍り掛からんとする人型兵器であった。

〃〃〃

軍が討伐し、その中で軍に街の統治権を渡していれば今回の被害は防げたと、政府と各自治体に脅しを掛ける。
一体、誰がこんな頭の悪い絵図を描いたのだ。
参謀本部だとすれば、軍はまともに機能していないかもしれない。
「我らに出来るのは、民間人の被害を最小限に抑える事だけだ。……各員、集中しろ」
この人型兵器、〝武神〟は元々艦娘の装備に使われる筈だった技術を元に建造された。
レバーを握り、男は鎌首をもたげたまま動かない蛇体を睨み、背部に搭載された主砲に砲弾を装填する。
艦娘、年端もいかぬ子供に己が命運を背負わせ、あまつさえ使い捨て同然に扱う現状、もしこの技術が正統に艦娘達の装備に使われていたなら、その犠牲はどれだけ減らせただろうか。

――初代提督、疑わしい限りだな

艦娘に纏わる技術は全て、初代提督という者が残した文献から再現されている。
だが、その技術は半分も再現出来ていないという。
支離滅裂な文面と、現代では到底理解の及ばぬ理論の山。
特殊歩行戦車、機動殻、武神、そして艦娘。それら全て、学者達は頭を悩ませてどうにか形にしたデッドコピーに過ぎない。
深海棲艦に対抗しうる最大戦力である艦娘に関する技術でさえ、初代が残したお情けにすがって、どうにか形にしたものに過ぎないのだ。
一体、どれ程のものを造り上げようとしていたのか。
最早オカルトの類いとまで言われる技術体系は、解析の進まぬまま死蔵されていると聞く。
「隊長、攻撃命令を」
「分かった。総員、目標は敵大型深海棲艦、狙いは頭部だ。外すな。主砲発射……！」

雷鳴もかくやと、戦艦級の装甲すら穿つ砲弾が深海棲艦の頭部に撃ち込まれる。
排莢された薬莢がアスファルトに落ち、罅と窪地を作り出すが、砲撃の音は止まない。大抵の深海棲艦は、人間型で艦娘の砲撃や、機動殻の近接兵装で殺せる。
だが、このタイプの深海棲艦は通常の深海棲艦とは違う。機械的な昆虫とでも言えばいいのか、主となる主脳機関を破壊しても、全身にある副脳が瞬時に主脳機関の代わりとなり、活動を再開する。
それだけではなく、破壊した主脳機関も破壊された瞬間から再生を開始する。
とにかく硬く強くしぶとい。敵対者として最大に厄介極まりない。
故に対処する時は集中的に絶え間無く砲火を浴びせ続け、再生能力を超える破壊を与える。
そして、頭部の主脳機関を破壊すれば、一瞬だが再生能力が止まる。
だから、徹底的に頭部を破壊する。
「撃ち方止め！」
搭載された弾倉を八割程空にした時、男は言い知れない違和感と不安を感じた。
おかしい。何故、抵抗してこない。
破壊と砲火による煙幕が晴れた先、そこには確かに頭部が破壊された大型深海棲艦が在る。
「隊長、やりましたね」
「……」
「隊長？」
なんだ、これは。
武神の視覚素子が送ってくる情報は、確かに深海棲艦の撃破そのものなのに、男は感じる違和感を言葉に出来ない。
言葉が出ない。敵は撃破した。再生もしていない。街への被害も当初の予定より、遥かに最小限に済ませる事が出来た。
「……敵撃破を確認。各員、被害を報告後に、市民の安否確認を急げ」
だが、今は正体の知れない違和感より、市民の安否確認を優先する

べきだ。
男はそう考え、部下に命令を下した。
そして、緊張の糸が切れた瞬間、それが間違いだったと気付いた。
「……っ！　回避……！」
刹那、男は回避した。
だが、部下は回避出来ず、その機械の鎧ごと炎の中に沈んだ。
何が起きたのか認識は出来たが、理解は出来なかった。
「……そんな話があってたまるかっ……!!」
違和感の正体、それは深海棲艦だった。
武神が伝えてくる。大型深海棲艦の腹から出てきたのは、いまだに討伐報告が数件しかない特級危険存在である鬼級であった。
「《ｆｏｎｔ：ｕ２４７》あ……《／ｆｏｎｔ》」
鬼級棲艦は白く長い髪を蒼い体液に濡らしながら、胎盤の様に自らに繋がる艤装を引き摺り、母胎から這い出てくる胎児かの如く太陽の陽を浴びる。
「《ｆｏｎｔ：ｕ２４７》しんぴのけっしょうたい《／ｆｏｎｔ》」
もたらされたのは最悪の厄災だった。